

城西国際大学



研究シーズ集 2022



問合せ先
研究推進・社会貢献部

TEL:0475-55-7832 FAX:0475-55-8897
E-mail:research-c@jiu.ac.jp



はじめに

このたび城西国際大学では、本学の研究成果や研究シーズを企業、自治体、研究機関等のみなさまに活用いただくことを目的に「城西国際大学 研究シーズ集」を発刊しました。

城西国際大学は、企業、自治体、研究機関等と連携して産学官連携活動の活性化を図り、共同研究、受託研究を推進しています。また、大学の研究成果を広く社会に還元し、地域社会・地域産業の課題解決等に寄与する活動を進めています。

今回の研究シーズ集には、「人文・教育・心理分野」、「メディア・経営・観光・ビジネス分野」、「薬学分野」、および「看護・理学療法・福祉分野」から計102件の研究成果、研究シーズを掲載していますので、企業、自治体、研究機関等のみなさまに、ぜひご覧いただき、本学及び本学の研究者との共同研究等を進めていただければ幸いです。

本研究シーズを活用して、みなさまとの連携を積極的に進めることで様々な分野とのコミュニケーションが生まれ、本学の研究の発展と地域社会へのさらなる貢献につながることを確信しています。

令和4年（2022年）10月

城西国際大学 学長 杉 林 堅 次

本書の活用のしかた

本研究シーズ集は、企業、自治体、研究機関等のみなさまとの連携をより一層推進するため、本学研究者の研究内容・アピールポイントや今後の展望を1課題1ページで紹介しています。

各研究課題分野をご覧ください、本学との共同研究や受託研究、地域の課題解決等に向けた受託事業に関心をお持ちいただけましたら、ぜひご連絡ください。

興味をお持ちになったみなさまにご活用いただけるよう、それぞれのページに問い合わせ窓口である本学研究推進・社会貢献部の連絡先を記載しております。

なお、本研究シーズ集につきましては、本学ホームページにも掲載しており、今後定期的な内容の変更や追加を行いますので、あわせてご覧いただけますと幸いに存じます。

お問合せ先：研究推進・社会貢献部 研究推進課
TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

研究課題／分野一覧（キーワード）

〈人文・教育・心理分野〉

歴史、	思想、	文学、
言語、	教育、	心理

〈メディア・経営・観光・ビジネス分野〉

経営・経済、	情報・システム、	数学（代数学・幾何学）、
材料・物性物理、	健康・環境、	観光、
地域・文化、	政策、	交通、
国際		

〈薬学分野〉

基礎薬学・創薬研究、	臨床調査・臨床薬学、
レギュラトリーサイエンス、	天然物・有機合成、
感染症・抗菌薬、	薬物送達システム、
経皮吸収、	相互作用、
食品・栄養、	再生医療・免疫・病態

〈看護・理学療法・福祉分野〉

教育・人材育成、	高齢者・地域連携・福祉、
リハビリテーション、	看護技術、
周産期・育児・保育、	生涯発達

研究課題／分野一覧
人文・教育・心理

キーワード

歴史 思想 文学 言語 教育 心理

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名	歴 史	思 想	文 学	言 語	教 育	心 理
2	アメリカのマイノリティ文学と異文化理解	国際人文学部 国際文化学科	オオモリ ユカ 大森 夕夏			●			
3	中世文学と房総（特に東総地域）	国際人文学部 国際文化学科	オカダ ミキヨ 岡田美也子	●		●			
4	日本語と韓国語の形容詞の比較、意味・用法の記述	国際人文学部 国際文化学科	カメイ ミドリ 亀井みどり				●	●	
5	近代日本における「日本文化」の思想史的探究 —思想の受容・伝達をめぐるメディア、図書館、出版流通の歴史的な検討—	国際人文学部 国際文化学科	ナガオ ムネノリ 長尾 宗典	●	●				
6	気候と文学、環境批評から読む文学作品、東日本大震災と小説	国際人文学部 国際文化学科	ハガ コウイチ 芳賀 浩一			●			
7	日露戦争と第一次世界大戦 —諷刺画の中の日本表象、「黄禍論」の展開、戦争の諸相の見直し—	国際人文学部 国際交流学科	イイクラ アキラ 飯倉 章	●					
8	Corpus Platonicumの全貌解明に向けて	国際人文学部 国際交流学科	タケノ 章次 瀧 章次	●	●		●		
9	グローバルな観点からみたアメリカの内政と外交のネクサス	国際人文学部 国際交流学科	ミシマ タケノスケ 三島武之介	●	●				
10	夫婦での育児協働を推進するための父親の育児動機づけに関する研究	福祉総合学部 福祉総合学科	オオウチ ヨシヒロ 大内 善広					●	●
11	「難聴者」に対する理解と支援の促進。難聴の早期スクリーニングから支援及びコミュニケーションの工夫に関する研修プログラムの開発	福祉総合学部 福祉総合学科	サノ トモコ 佐野 智子					●	●
12	博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文に現れた誤用の傾向・要因と指導方法	人文科学研究科	イタイ ミサ 板井 美佐				●	●	
13	日本語の会話の丁寧さを決める要因は何か？	語学教育センター	タカギ ミヨシ 高木 美嘉				●	●	
14	日本の企業が求める外国人人材とは —ビジネス日本語教育での実践—	語学教育センター	ハトリ ミユキ 羽鳥美有紀				●	●	

研究課題／分野一覧

メディア・経営・観光・ビジネス

キーワード

経営・経済	情報・システム	数学（代数学・幾何学）	材料・物性物理	健康・環境	観光	地域・文化	政策	交通	国際
-------	---------	-------------	---------	-------	----	-------	----	----	----

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名	経営・経済	情報・システム	数学（代数学・幾何学）	材料・物性物理	健康・環境	観光	地域・文化	政策	交通	国際
16	消費者経済学・消費者教育論・経済教育論の研究	経営情報学部 総合経営学科	アベシタロフ 阿部信太郎	●						●	●		
17	ある種の群スキームのトーサーについて	経営情報学部 総合経営学科	トダ ヨウヘイ 戸田 容平		●								
18	香り、においの可能性を探る	経営情報学部 総合経営学科	ナカムラ チカ 中村 智香				●						
19	成田国際空港南側経済圏における地域活性化の探究	経営情報学部 総合経営学科	ナナイ セイイチロウ 七井誠一郎	●						●	●		
20	情報システムにおける信頼性について	経営情報学部 総合経営学科	ナルセケンイチロウ 成瀬健一郎		●								
21	オピニオンダイナミクス理論を活用したイノベーションの普及要因の探索	経営情報学部 総合経営学科	フジイ マコト 藤居 誠	●	●								
22	公共サインの中国語対応について	福祉総合学部 福祉総合学科	ミヤ イ 宮 偉							●			●
23	エンターテインメントから見る世界の変容とアダプテーションの潮流	メディア学部 メディア情報学科	ウダ カナエ 宇田 夏苗										●
24	「限界芸術」の体系化に関する研究	メディア学部 メディア情報学科	オエ アキユ 大絵 晃世							●			
25	ヒトの形質の他の生物描画における応用 —生物のボディプランのクリーチャー造形への活用—	メディア学部 メディア情報学科	タカツク マサエ 高桑 真恵	●									
26	3Dスカルプトツールを使用したクリーチャー造形における解剖学的整合性の意義	メディア学部 メディア情報学科	タカツク マサエ 高桑 真恵	●									
27	アメリカ合衆国第26代大統領 Theodore “Teddy” Rooseveltの肖像写真から見る「憂い」の原因についての一考察	メディア学部 メディア情報学科	タカツク マサエ 高桑 真恵							●			
28	SNSアイコン Theodore “Teddy” Rooseveltの肖像描画における問題解決 —アメリカ合衆国第26代大統領 Theodore “Teddy” Rooseveltの肖像描画における骨格的整合性と感情表現の必要性—	メディア学部 メディア情報学科	タカツク マサエ 高桑 真恵	●									
29	「ロマ音楽」を想起する —多文化共生社会の実現を目指したマイノリティの音楽研究—	メディア学部 メディア情報学科	タキグチ サチコ 滝口 幸子							●			
30	インターネットでの映像配信を中心としたメディア表現の活用による、地域イベントの「メディア化」を通じた活性化に関する実践的取り組み	メディア学部 メディア情報学科	テラモト タクジ 寺本 卓史	●						●			
31	XRコンテンツの開発、マルチメディア技術の研究	メディア学部 メディア情報学科	ナカジマ マサオ 中嶋 正夫	●									
32	三次元コンピューターグラフィクス	メディア学部 メディア情報学科	ナカムラ ヨウスケ 中村 陽介	●									
33	対面コミュニケーションにおける言語化トレーニングの研究	メディア学部 メディア情報学科	ミヤタ カヨコ 宮田佳代子					●		●			
34	音楽劇の制作を通じた障がい者の身体技能の向上と自尊感情の醸成	メディア学部 メディア情報学科	モチヅキ ジュンキチ 望月 純吉					●		●			
35	初等教育における演劇的表現の重要性について	メディア学部 メディア情報学科	モチヅキ ジュンキチ 望月 純吉							●			

研究課題／分野一覧

メディア・経営・観光・ビジネス

キーワード

経営・経済	情報・システム	数学(代数学・幾何学)	材料・物性物理	健康・環境	観光	地域・文化	政策	交通	国際
-------	---------	-------------	---------	-------	----	-------	----	----	----

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名	経営・経済	情報・システム	数学(代数学・幾何学)	材料・物性物理	健康・環境	観光	地域・文化	政策	交通	国際
36	インバウンド観光における滞在コンテンツの造成	観光学部 観光学科	宇 航						●	●			●
37	地域資源を活用したコミュニティの活性化に資する実践的取り組みの考察	観光学部 観光学科	ウチヤマ 内山 タツヤ 達也						●	●	●		
38	観光地における新たな地域内交通の定着とそれに伴う拠点整備に関わる研究	観光学部 観光学科	カネコ 金子 ユフスケ 祐介						●	●		●	
39	自然・農業・環境教育を活用した健康増進と地域活性化プログラムの開発・評価	観光学部 観光学科	タダ 多田 ミツル 充					●	●	●			
40	中堅中小企業の今日的課題の解決に向けた萌芽的研究	観光学部 観光学科	ナカザワシンイチロウ 中沢信一郎	●						●	●		
41	九十九里浜・南房総沿岸部の漁港と漁師町の文化的景観と観光資源	観光学部 観光学科	ナカザワシンイチロウ 中沢信一郎						●	●	●		
42	リスクと税率がみかん耕作放棄地の再生と柑橘生産活動に及ぼす影響評価	ビジネスデザイン研究科	トマル 都丸 タカユキ 孝之	●						●			
43	インバウンドの視点からの観光まちづくり 産官学による政策形成のためのプラットフォームづくり	国際アドミニストレーション研究科	クロサワ 黒澤 タケフミ 武邦	●						●			●
44	動学的確率的一般均衡(DSGE)モデルによる長期停滞ヒステリシスモデルの開発と政策分析	国際アドミニストレーション研究科	コマツ 小松 ゴロウ 悟朗	●									●
45	複合機能を持つアモルファス合金(バルク金属ガラス)の作製と新特性	イノベーションベース	コバ 孔 ファンリ 凡利				●						

研究課題／分野一覧

薬学

キーワード

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名	キーワード											
				基礎薬学・創薬研究	臨床調査・臨床薬学	レギュラトリーサイエンス	天然物・有機合成	感染症・抗菌薬	薬物送達システム	経皮吸収	相互作用	食品・栄養	再生医療・免疫・病態		
48	機能的表示成分の薬学的品質評価法 —食品・サプリメントの有用性と安全性評価法開発 をめざして—	薬学部 医療薬学科	アキモト 秋元 マサユキ 雅之	●								●	●		
49	新規な骨格や生理活性な天然物の全合成に関する研究	薬学部 医療薬学科	イシザキ 石崎 ミユキ 幸	●			●								
50	皮膚透過性に及ぼすイオン液体の皮膚透過メカニズム および促進効果	薬学部 医療薬学科	オシザカ 押坂 タクシ 勇志	●						●	●				
51	医薬品・医療機器のレギュラトリーサイエンスに関 する研究	薬学部 医療薬学科	コダマ 児玉 ヤスオ 庸夫		●	●									
52	新規キラル誘導化試薬の開発	薬学部 医療薬学科	コヤナギ 小柳 ジュンイチ 順一 カメイ 亀井 トモヨ 智代	●			●								
53	スポーツ選手のパフォーマンス向上のための食事・ 栄養学 —トレーニング負荷量とコンディションを考える—	薬学部 医療薬学科	サカイ 酒井 ケンサク 健介		●									●	
54	生活習慣病の薬剤の適正使用や在宅医療のあり方を 探索	薬学部 医療薬学科	ササキ 佐々木 ヒデヒサ 英久		●										●
55	薬物動態・薬効・毒性の予測に基づく統合的創薬支援 システムの確立	薬学部 医療薬学科	スギヤマ 杉山 ユフイチ 雄一	●	●							●			
56	高分子ナノ粒子を用いた皮内への薬物送達	薬学部 医療薬学科	タケウチ 竹内 イツセイ 一成	●						●					●
57	普段の食事によってストレス抵抗性を高める胃腸機 能食材・食品の開発	薬学部 医療薬学科	タシマ 田嶋 キミヒト 公人	●									●	●	
58	「卵からはじめる、ウイメンズヘルスケア」 —卵子の再生力を引き出す世界初の不妊治療薬の開発—	薬学部 医療薬学科	ニイクラ 新倉 ユフイチ 雄一	●											●
59	進化医学の視点から考える感染症・遺伝子疾患・心 疾患の新しい治療薬の開発	薬学部 医療薬学科	ニシグチ 西口 ヨシカズ 慶一	●				●							
60	抗生物質耐性菌の耐性メカニズムの理論的解明と新 規抗菌剤デザインのための基礎研究	薬学部 医療薬学科	スカタ 額賀 ミチヨシ 路嘉	●				●							
61	消化器病病態モデルにおける、胸が焼ける・腹冷 えて痛む・下痢・便秘の症状と温度センサー神経増加 の連関および症状改善薬の探索	薬学部 医療薬学科	ホリエ 堀江 シュンジ 俊治	●											●
62	薬剤師業務のグローバル化に向けた研究	薬学部 医療薬学科	ミゾグチ 溝口 マサル 優		●							●			
63	薬物送達システムの研究および次世代薬物投与デバ イスの開発	薬学部 医療薬学科	モリ 森 ケンジ 健二	●						●	●				
64	深共晶溶媒を用いた抗体フラグメントの経皮的投与 方法の開発	看護学部 看護学科	オオモリ 大森 ナオキ 直哉	●						●	●				●
65	免疫抑制活性を有する抗体の敗血症（炎症疾患）治療 薬としての可能性評価	看護学部 看護学科	ゴトウ 後藤 タクシ 武	●						●	●				●

研究課題／分野一覧
看護・理学療法・福祉

キーワード

教育・人材育成
 高齢者・地域連携・福祉
 リハビリテーション
 看護技術
 周産期・育児・保育
 生涯発達

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名	教育・人材育成	高齢者・地域連携・福祉	リハビリテーション	看護技術	周産期・育児・保育	生涯発達
68	福祉領域における人材育成 —グループを活用した学びのあり方—	福祉総合学部 福祉総合学科	オガフ トモコ 小川 智子	●	●				
69	海洋ゴミの造形やアート利用の可能性についての調査研究	福祉総合学部 福祉総合学科	カワセ リキヤ 川瀬 力也	●					●
70	保育園経営における保育の質並びに環境デザインの在り方についての研究	福祉総合学部 福祉総合学科	クラタ アラフ 倉田 新	●				●	
71	地域づくりにおける文学館の役割	福祉総合学部 福祉総合学科	ジャン ドンシイン 姜 東星		●				
72	児童虐待予防に資する社会資源としての児童館における相談援助機能の可能性の探究	福祉総合学部 福祉総合学科	トコロ サダユキ 所 貞之		●			●	
73	介護実習の最終実習段階までに必要な能力を身に付けるためのルーブリック評価指標の開発	福祉総合学部 福祉総合学科	ハヤシ フカユ 林 和歌子	●	●				
74	認知症の方の施設サービスにおける「思い」や「考え」等の情報把握に向けた研究（アセスメントにおける情報把握・意向把握）	福祉総合学部 福祉総合学科	マツウラ ヒロノリ 松浦 弘典		●				
75	体表からの膝関節および後足部アラメント計測に関する研究	福祉総合学部 理学療法学科	オオコシ タダスケ 大西 忠輔			●			
76	物理療法が身体機能（痛み、関節の可動性、筋力、筋の弾性など）に与える影響に関する研究	福祉総合学部 理学療法学科	カラスノ ヒロシ 烏野 大			●			
77	人工関節術後における患者満足度に影響する歩行因子の探索と歩行改善プログラムの構築	福祉総合学部 理学療法学科	クリハラ ヤスジ 栗原 靖			●			
78	COVID-19の体制下におけるICTを用いた理学療法士の臨床能力向上のためのテレ臨床実習プログラム	福祉総合学部 理学療法学科	クワエ コタカ 桑江 豊	●	●				
79	高齢者・障害者のための住宅改修ユニットのモジュール化に関する研究	福祉総合学部 理学療法学科	クワエ コタカ 桑江 豊		●				
80	高齢者の転倒回避動作の運動力学的特性とそのトレーニング方法	福祉総合学部 理学療法学科	タケウチ ヤヒコ 竹内 弥彦		●	●			
81	脳卒中片麻痺者の「咬合」と歩行能力への影響 —簡易的マウスガードの開発に向けて—	福祉総合学部 理学療法学科	タニウチ コウキ 谷内 幸喜			●			
82	運動器系リハビリテーションにおける物理療法と運動療法のハイブリッド治療の開発および効果検証	福祉総合学部 理学療法学科	モリシタ カツユキ 森下 勝行			●			
83	スポーツ活動が身体機能に及ぼす影響を多角的に探索する	福祉総合学部 理学療法学科	モリフジ タケシ 森藤 武			●			●
84	喘息患者に対する呼吸リハビリテーションの適用と効果検証	福祉総合学部 理学療法学科	ヤマネ カズマサ 山根 主信			●			●
85	ウィメンズヘルス理学療法 —骨盤底筋トレーニングとその効果について—	福祉総合学部 理学療法学科	ヨコイ ユカ 横井 悠加			●		●	
86	手を温めることによる認知症予防に関する研究	看護学部 看護学科	フィタケミチヨ 四十竹美千代		●		●		
87	地域における多世代交流の分析	看護学部 看護学科	アオキリエコ 青木利江子		●				
88	精神疾患をもつ方の家族支援に関する研究	看護学部 看護学科	イガ サトコ 伊賀 聡子				●		●
89	精神疾患をもつ方が地域で生活するための支援に関する研究	看護学部 看護学科	イガ サトコ 伊賀 聡子				●		
90	テキストマイニングを用いた看護学生の臨地実習自己評価についての検討	看護学部 看護学科	イケガミ モエ 池上 萌絵	●					

研究課題／分野一覧
看護・理学療法・福祉

キーワード

教育・人材育成
 高齢者・地域連携・福祉
 リハビリテーション
 看護技術
 周産期・育児・保育
 生涯発達

頁	研究シーズ・タイトル	学部学科名	教員名						
91	外国籍住民の母子保健に関する研究	看護学部 看護学科	石井恵美子 イシイ エミコ					●	
92	親子の情緒的きずな（ボンディング）形成に着目した妊娠期からの子育て支援モデル構築	看護学部 看護学科	大橋優紀子 オオハシ ユキコ				●	●	
93	症状に応じた看護師のタッチング技法の生体力学的分析	看護学部 看護学科	樺島 稔 カバシマ ミノル				●		
94	認知症に対するアクティビティケアの心理社会的効果の検討	看護学部 看護学科	川久保悦子 カワクボ エツコ		●				
95	超音波画像が映す末梢静脈カテーテルの血管内留置の実態の分析による、カテーテルをより安全に、より長く留置させるための技術の開発	看護学部 看護学科	北田 素子 キタダ モトコ				●		
96	子どもを亡くした親のセルフ・ヘルプ・グループで活動するピアサポーターに対する支援	看護学部 看護学科	城所眞紀子 キトコロ マキコ					●	
97	高齢者看護における倫理的課題に関する学習内容の検討	看護学部 看護学科	熊谷 玲子 クマガイ レイコ	●	●				
98	中途障害児と家族への支援に関する研究	看護学部 看護学科	佐藤 愛 サトウ アイ				●	●	
99	精神科病棟での多職種連携で看護師に求められる役割	看護学部 看護学科	島村 龍治 シムラ リウジ		●		●		
100	多様化する提供精子治療における当事者への情報提供のあり方	看護学部 看護学科	清水 清美 シミズ キヨミ					●	
101	殺菌・抗ウイルス効果に及ぼすエタノール濃度の影響	看護学部 看護学科	神明 朱美 シンメイ アケミ				●		
102	看護実習の臨地実習指導者が学生指導で抱える困難感の因子と個人属性の検討	看護学部 看護学科	舘野 和子 タテノ カズコ	●					
103	手浴の効果に対する生理学的エビデンスの確立	看護学部 看護学科	中野 元 ナカノ ハジメ				●		
104	在宅高齢者の抑うつ悪化の要因、抑うつと痛みとの関連、在宅看取りにおける訪問介護員と訪問看護師の連携	看護学部 看護学科	二宮 彩子 ニノミヤ アヤコ	●					
105	高齢心不全患者と共有できる意思決定支援の構造化に関する研究	看護学部 看護学科	松尾 尚美 マツオ ナオミ	●			●		
106	高齢者の社会的つながりに関する研究	看護学部 看護学科	丸山あかね マルヤマ アカネ		●				
107	産後のストレス予防支援の研究、親性準備性の研究 女性の健康を考えたプレコンセプションケアの研究	看護学部 看護学科	山田万希子 ヤマダ マキコ					●	
108	動物介在（イヌ）による子どもの心身への影響に関する研究	看護学部 看護学科	柚山香世子 ユヤマ カヨコ				●	●	

人文・教育・心理



アメリカのマイノリティ文学と異文化理解



准教授
大森 夕夏

① アピールポイント

グローバル化の進行に伴い、アイデンティティも多様化しています。新たなアイデンティティの視点から書かれた文学作品を通して、文化や歴史に新たな光を当て異文化理解を深めます。

② 研究の出口のイメージ

多文化社会アメリカのマイノリティによる文学作品を通して異文化理解を深めることは、グローバルな環境で働く際に役立ちます。

キーワード

アメリカ文学、ユダヤ系アメリカ文学、黒人文学、異文化理解

研究の内容

ユダヤ系アメリカ人女性作家の小説を通して、マイノリティとしてのユダヤ人、ホロコーストのトラウマ、ユダヤ人特有のユーモアなどについて研究を行ってきました。最近では、ユダヤ教に改宗したアフリカ系アメリカ人作家に焦点を当て、黒人の視点を踏まえたホロコースト文学の研究を行っています。



今後の展望

児童向けの黒人文学で知られるジュリアス・レスターがユダヤ教に改宗し、ホロコーストを扱った小説も書いている点についてはほとんど研究が進んでいません。レスターのホロコースト文学に着目することで、ホロコースト文学研究に新たな視点を加えていきたいと思っています。

中世文学と房総（特に東総地域）



教授
岡田 美也子

① アピールポイント

赤人上総国山辺郡出身説を唱えている古今和歌集古注釈のうち成立が早いとされる為頭流の書を検討し、山辺郡と和歌文学史との接点を見出しました。さらに、地誌の記事と考え合わせることで、日蓮宗僧が伝承に関与した可能性を示しました。

② 研究の出口のイメージ

房総と古典文学について、古代では『古事記』等のヤマトタケルノミコトの渡海、中古では『更級日記』筆者孝標娘の旅立ち、中世では『平家物語』とその周辺、近世では『南総里見八犬伝』などの話題があり、各地域の観光などに活かされています。東総の歴史と文化の解明が地域の活性化に役立てば幸いです。

キーワード

中世文学、房総、地域伝承、和歌文学史

研究の内容

中世の説話文学及び和歌史と、房総の地域伝承との関連を研究しています。東金には山辺赤人、小野小町、西行と上代から平安末期の歌人たちをめぐる逸話が伝わっています。本学着任を契機に赤人伝承の背景を考え始めました。赤人については、古今集古注釈や歌学秘伝のうち、13世紀終わり頃に成立したと思われる為頭流の書物に、赤人上総国山辺郡出身説や罪を犯して山辺郡に配流された柿本人麿が山辺赤人に改名して上京したとする人麿一人二名説が見えます。

藤原俊成以降、歌壇を主導してきた御子左家は、鎌倉後期に二条家・京極家・冷泉家に分裂し、皇統の対立抗争とも相まって歌壇の主導権を争いました。為頭は、そのいずれにも属さず、関東に活躍の場を求めたようです。

赤人上総国山辺郡出身説は、為頭流の書から二条家や飛鳥井家の伝に引き継がれていきます。一方で、東金市では赤人塚や法光寺にまつわる伝承として今日まで伝えられてきました。

現存する資料は多くはありませんが、山辺郡で相伝、書写された古今集古注の書も存在します。和歌及び和歌と関連する説話や伝承を醸成する東総の文化環境がどのようなものであったか考えていきたいと思えます。

今後の展望

東総とその周辺地域で成立した作品やそれらと関連がうかがえる作品の分析考察を進める予定です。また、地誌を初めとする関連資料を丹念に読み解き、同地域の文化的環境を明らかにしていきたいと思えます。



日本語と韓国語の形容詞の比較、意味・用法の記述



助教
亀井 みどり

① アピールポイント

韓国の大学院で韓国語学を専攻し8年間の留学生活を送る中で、奥深く繊細な「形容詞」の世界に心惹かれ、研究を進めてきました。これまでに得た知識と経験を日本の言語教育や国際理解教育の現場へ還元するとともに、これからの未来を築いていく学生たちが、日本と韓国の言語や文化について理解を深め、視野を広げていけるよう、後押しできたらと考えています。

② 研究の出口のイメージ

言語の比較・対照研究では、一つの言語だけを見ている時には気づきにくい普遍性・特殊性が浮かび上がってくるため、研究の成果は、言語とその背景にある文化を理解するための資料として活用できると考えています。また、韓国語の形容詞の意味・用法や類義語の使い分けについてわかりやすく記述し、最終的に学習用の辞書などにまとめることを目指しています。

キーワード

文化、語彙、形容詞、類義語、コーパス、辞書、言語教育、国際理解教育

研究の内容

「形容詞」はその言語が用いられる時代・地域・人々の物の見方や感じ方、考え方などを表す語彙であるため、言語によって異なる特性が見られます。そして、外国語学習者にとっては、その特性が語彙を習得する際の面白さにもなり、難しさにもなり得ます。このような点に注目し、これまで、韓国語の形容詞の意味・用法について用例分析を基に考察したり、日本語と韓国語の形容詞を比較したりするなどの研究を行ってきました。

修士学位論文では、韓国語の温度形容詞がテレビの天気予報でどのように用いられているのかについて、KBS「ニュース9」の天気予報一年間分の映像を分析した上で、季節と気温などを基準に使用様相を考察しました。

博士學位論文では、日本と韓国それぞれの国語大辞典から選定した感情形容詞を「快・不快・中立」の3つに分類し、さらに感情の種類を基にした10系統計24のカテゴリーに細分化した上で考察を行いました。両言語の感情形容詞の体系を比較した結果、日本語の感情形容詞326個に対し、韓国語の感情形容詞は920個と、約2.8倍多く存在することがわかりました。また、両言語は「不快」の感情に分類された感情形容詞が70%以上を占めるという共通点を持つ一方で、感情のカテゴリーの分布には一定の違いも見られました。これらの結果を踏まえ、より具体的な比較として「喜び」と「悲しみ」を表す感情形容詞を対象に、形態・統語・意味の面から分析し、両言語の間に浮かび上がった共通点と相違点を示しました。

大学院での研究を経て、帰国後は韓国語教育に携わる傍ら、日本語母語話者にとって説明がないと理解しにくい韓国語の形容詞の意味・用法について、いかにわかりやすく記述するかを課題とし、実際の言語資料を活用した研究を試みています。

研究詳細：<https://researchmap.jp/midorikamei>

今後の展望

今後、実際の言語資料を用いた用例分析を丁寧に重ね、韓国語の形容詞の意味・用法や類義語の使い分けについて、日本語母語話者の視点からのわかりやすい解説を試み、最終的に学習用の辞書などにまとめていければと考えています。



近代日本における「日本文化」の思想史的探究 — 思想の受容・伝達をめぐるメディア、図書館、出版流通の歴史的な検討 —



准教授
長尾 宗典

① アピールポイント

人々が様々な本や文章をいつ、どこで、どんな風に読んだのか？が一つのテーマです。古い雑誌記事などの解説を通じ、とくに地域社会に埋もれている歴史を実証的に発掘することに努めています。

② 研究の出口のイメージ

地域で発行されていた小さな同人雑誌のなかから、思いがけない事実の発見をしてきました。今後もその収集に努め、東京以外の地域が持っていた歴史文化の厚みを見出し、守っていくお手伝いをしたいと思っています。

キーワード

出版史、帝国図書館、史料学、ナショナリズム、岡倉天心、姉崎正治、高山樗牛、図書館史

研究の内容

元図書館員。日本史の研究と教育に関わっています。また、人文学全体のゆくえんについても興味を持っています。実用的な尺度をもって人文学の価値を図るのはなかなか容易ではありませんが、それでも、読むこと・書くことを通じて、誰かの、何かの役に立てるように、研究していきたいと思っています。

現在、以下の研究テーマに関心を持っています。

1. 高山樗牛や姉崎嘲風らを中心とする明治・大正時代にかけての「文明批評」の展開および「日本文化」をめぐる議論の位相
2. 明治20年代から40年代にかけての地方文芸雑誌の読者が構築した独自の読者ネットワークの実態解明と雑誌メディアの史料学的研究
3. 帝国図書館を中心とした近代日本における図書館機能の思想史的意義

今後の展望

本や雑誌を通じた人々のコミュニケーション、ネットワークの動態を明らかにし、明治時代などの日本近代社会において人々が情報を求めて、想像よりはるかに豊かなつながりを模索していたことを解明したいと思っています。



気候と文学、環境批評から読む文学作品、東日本大震災と小説



教授
芳賀 浩一

① アピールポイント

環境問題や自然災害と文化、特に文学表現について研究しています。主に欧米における環境批評理論を調査しその分析法を発展させることにより日本における文学や文化の鑑賞と評価の新しい方法を提唱しています。

② 研究の出口のイメージ

地球環境問題への対応には社会的な価値観の変容が必要です。文化芸術が楽しみながら新しい価値感を学び形成する最良の媒体のひとつであることを示します。

キーワード

文学、環境、災害

研究の内容

「人新世」という概念が2000年頃に地球物理の分野で提唱され、人文学の分野にも大きな影響を与えました。人間の手による気候の変化をはじめとする地球環境の破壊は自然と人間の関係を根本的に変え、人間個人を中心とする近代の文学研究にも変化を迫っています。現代日本の文学・文化と英語圏の理論と文学作品を比較検討しながら、地球環境の変化が文化・芸術の表現に与える影響を調査研究しています。

今後の展望

文学・文化における環境について分析を深めていく予定です。

日露戦争と第一次世界大戦 — 諷刺画の中の日本表象、「黄禍論」の展開、戦争の諸相の見直し —



教授
飯倉 章

① アピールポイント

これまでに日露戦争時の日本イメージ（諷刺画など）の変化、アジア人脅威論の「黄禍論」、第一次世界大戦の歴史的展開などを研究してきました。いまは大戦への日本参戦・日独戦争について考究しています。最近は郷土史的なテーマにも取り組んでおり、日露戦争従軍者の個人資料の分析、日露戦争の捕虜生還者の研究などもしています。

② 研究の出口のイメージ

出口としては著作・論文・資料集などの出版を考えています。歴史研究では出版により研究成果を社会に還元することが重要であると思います。日本語は元より、英語でも発信していきたいと考えています。

キーワード

日露戦争、第一次世界大戦、日独戦争、「黄禍論」、諷刺画

研究の内容

これまで日露戦争時の日本イメージ（諷刺画など）の変遷、アジア人脅威論「黄禍論」、第一次世界大戦の歴史的展開などを研究し、いまは第一次大戦への日本参戦について探求しています。主に海外の文献・資料を用いてきましたが、これからは郷土史的なテーマにも取り組みたいと思い、日露戦争従軍者の個人資料の分析、日露戦争の捕虜生還者の研究などもしています。戦場に赴いた人々やその家族らの気持ちや、戦場での生活、兵士の様々な思い、戦争の悲惨さなどについても注目していきたいと思っています。このような研究テーマに関連して、個人の方々や企業・団体・自治体などが所蔵されている未発表の資料があれば、出向いて見させていただきたいとも思っています。近代史にはまだまだ沢山、現代に活かせる知恵や教訓があると考えています。そのような知恵や教訓を導き出すためにも、新しい資料を発掘して歴史研究をする意義があると考えております。関連書籍はこれまで単著・共著で十数冊刊行しています。



(研究著書：単著のみ)

今後の展望

いまは第一次大戦の日本参戦についての歴史書を準備しています。今後は日露戦争や黄禍論、第一次大戦について引き続き考察し、論文や資料集、著作にまとめたいと考えています。英語での著作出版にも取り組みたいと考えています。



Corpus Platonicumの全貌解明に向けて



教授
瀧 章次

① アピールポイント

人類の知的財産であり、人類社会の危機を克服するための現代的理念の創造に必須となる古代ギリシアの哲学者、プラトンの著作について、現代に至る伝承の全体像を解明します。とりわけ印刷時代以前中世・古代における直接、間接（ギリシア語、ラテン語、アラビア語、アルメニア語ほか）伝承を解明します。

② 研究の出口のイメージ

15世紀末印刷濫觴期ならびにそれ以前、ギリシア語ほか諸言語の写本、パピルスに直接、間接に伝承するプラトン著作各作品の伝承全史を完成します。20世紀後半以降原資料のデジタル化が進む中でキリスト教聖典編集が飛躍的に進化したことに並行して、古代作家についても今後世代を越えて進捗する事業の一端となります。

キーワード

プラトン、パピルス、中世写本、テキスト伝承、アラビア語、ギリシア語、ビザンツ帝国

研究の内容

2007年からの本学における中世写本マイクロフィルム、デジタル資料の収集、解明の中で、現代世界における古典文献学に与えられた使命として、個人的事業としては、古代の哲学者、プラトンのその著作のわずかな一部分について、印刷時代前期における、直接・間接伝承の全体を、資料校合を通じて、解明してきています。世界的動向として見ても20世紀中葉以降、個別テキスト編集、正文批判においても、直接・間接伝承全史の解明が必須の作業として前提されています。そうはいつても、20世紀後半になっても、新たな校訂本、また学術的翻訳の多くは、依然、現存全資料の全体を解明するものとは必ずしもなってきました。漸く、20世紀末以降のデジタル技術の進歩により、精度の高い技術で、現存資料の多くがデジタル化され、原資料閲覧、入手が容易になるだけでなく、なによりも、伝承全史解明上重要な諸事象、例えば、写字生、校正者による字体の違い、インクの違い、修正作業経緯についても、分析が可能となってきました。また、欄外注釈のほか欄外に追加されている諸記述についても、デジタル資料であることによって、その詳細について確度の高い分析が可能になってきています。現在2022年時点においても、ヴァチカン図書館はじめ、古代・中世原資料所蔵館が、逐次デジタル化の作業を進め、デジタル資料を公開することが進められています。世界的にも研究者は、すそ野はひろがってはいかないものの、研究環境は格段に進化し続けているので、世代を越えて、将来に向けて、古代・中世文化の原資料にもとづく確固とした人文研究を構築していくことが、現代の古典研究者の使命であります。

今後の展望

この数年ようやく小作品の伝承全史にほぼ近いものを産み出す研究基盤が整い、その成果は発表、公開してきているので、今後とも公開されるデジタル化資料にも合わせて、部分的、些末的ではあっても、Corpus Platonicum全貌解明を進めていきます。



グローバルな観点からみたアメリカの内政と外交のネクサス



准教授
三島 武之介

① アピールポイント

アメリカの内政と外交の歩みをグローバルな観点から紐解くことによって、アメリカは「新しい国」で、海外から受ける影響よりも海外に与える影響の方が大きいという先入観を覆します。同時に、アメリカが自らの手で内政・外交上の問題を生み出し、その解決に苦慮し続けるのかも解き明かします。

② 研究の出口のイメージ

アメリカがとても「古い国」で、海外から様々な影響を受けて今日に至っているという理解は、現代アメリカの内政・外交の混迷、そして今後の世界秩序の行方をうらなう上で最も重要な認識の一つです。学校での国際教育はもちろん、企業での社員研修や海外戦略の立案においても有用な知見を提供できればと存じます。

キーワード

アメリカ政治外交、大西洋主義、アメリカニズム、リベラリズム、パクス・ブリタニカ、門戸開放

研究の内容

南北戦争から第二次大戦にかけてアメリカが直面した内政・外交上の諸課題において、西欧由来の思想や制度を受容しようとする「大西洋主義」と、これに対抗してアメリカの独自性を追求しようとする「アメリカニズム」とが、どのように対立したか、そして国家指導者たちはその対立をどのように乗り越えようとしたかを研究しています。

この時期のアメリカで、さらなる国家発展を求めた改革者たちは、旧宗主国イギリスをはじめとするヨーロッパ先進国の内政と外交をつぶさに観察し、そこで行われていた改革を輸入しようとしています。その改革は、公務員・外交官制度改革、選挙制度改革、通貨・関税改革、陸海軍改革、社会政策改革など、多岐にわたります。アメリカも明治維新以後の日本と同様に、ヨーロッパの「フォロワー」として大国への道を歩み始めたのです。

ですが、これらの改革は、「旧世界」ヨーロッパに対する「新世界」アメリカの独自性こそ国家としてのアイデンティティと信じる人々から、猛烈な抵抗を受けます。時にその抵抗は、改革そのものを、アメリカ支配をもくろむイギリス政府とこれと結託する富裕層の陰謀だ、と大真面目に語る人々を生み出すほど、強力でした。改革者たちはこの抵抗を退けるために、抵抗者たちとの間で説得と妥協を繰り返すことになりました。

この「説得と妥協」こそ、現代アメリカ内政・外交の混迷を生み出した遠因ではないかとの問題意識から、研究を進めております。

今後の展望

上に述べたアメリカの大国化に向けた改革のなかで繰り返された「説得と妥協」の営みが、米英覇権交代期の最中に行われたことの世界史的意義、とりわけ国際秩序に与えた影響を問うていきたいと考えています。合わせて、大正・昭和の日本の歩みと比較し、同時期に地域大国として勃興し、ともにヨーロッパの「フォロワー」として出発した日本とアメリカがその歩みを大きく違えていく原因を再検討できればと思います。



夫婦での育児協働を推進するための父親の育児動機づけに関する研究



准教授
大内 善広

① アピールポイント

父親が育児に対して主体的に関わる要因について、モチベーションの観点から研究しています。育児については、夫婦で当たり前のように参加するものでありますが、モチベーションの持ち方によって、具体的な育児行動が変わってくると考えられます。より望ましい育児行動を取ろうとするモチベーションを向上させるための要因について検討しています。

② 研究の出口のイメージ

父親の主体的な育児参加を促す要因について検討することで、父親の育児参加率向上に寄与するとともに、夫婦間でのより良い育児協働を実現するために必要な取り組みについて明らかにしていきます。

キーワード

育児協働、自己決定理論、自律性、有能感、関係性、父親教室

研究の内容

夫婦の育児協働を実現するために、父親の主体的な育児関与をどのように動機づけるかは、社会的に重要な課題となっています。学術的には、父親の育児関与は母親の育児ストレスを軽減し、子どもの自発性・社会性への発達スキルを高めることなどが指摘されています。

一方で、父親に対する子育て支援に関する研究の蓄積は世界的にも少ない状況です。具体的な父親への子育て支援として自治体等による父親教室が挙げられますが、その効果に関する検討はほとんど行われていません。父親教室に関する研究は、自治体を対象とした実施状況に関する研究や、父親教室の参加者を対象とした研究などが挙げられますが、研究の蓄積が少ないことが指摘されています。特に、父親教室に参加する効果に関する検討は不十分であり、父親教室への参加前後における比較研究はあるものの、父親教室への参加の有無による比較研究や、父親教室への参加後からの経時的な効果に関する研究は行われていません。

これまでに、自己決定理論に基づいた育児に対する動機づけに着目した研究を行い、主体的で積極的に育児関与しようとする自律的な育児動機づけが高い父親は実際に育児に関与する傾向があり、母親からのプレッシャー等により育児関与しようとする外的な育児動機づけが高い父親はあまり育児に関与しない傾向があることを見出してきています。また、育児動機づけは第一子出生後から第一子が幼児期まで育つ間であまり変動が見られないこと、第一子出生後から自律的な育児動機づけが高い場合には積極的に子育てに関する講座や保育所等の行事に参加する傾向があることを明らかにしてきています。このような研究の蓄積から、第一子出生までに自律的な育児動機づけを高めておくことが、父親の育児関与を促す上で重要であると考えられます。そこで、自治体等によって実施されている第一子出生前の父親教室に参加した父親に対して、育児関与や育児動機づけにどのような効果が生じるのかについて、現在研究しています。

今後の展望

2022年度より科学研究費助成事業として、父親教室に参加することが、実際の父親の育児行動や動機づけにどのような影響を及ぼすのかについて検討していきます。この研究が進めば、父親に対して父親教室に参加する重要性について伝えられるようになるとともに、どのような父親教室の内容が求められているのかを明らかにできると考えています。



「難聴者」に対する理解と支援の促進。難聴の早期スクリーニングから支援及びコミュニケーションの工夫に関する研修プログラムの開発



教授
佐野 智子

① アピールポイント

耳の健康教育の開発・普及を目指し、その基礎研究しています。特別な機器を使わずに、簡単に2、3秒でできる難聴のスクリーニング検査の妥当性を検証しました。難聴者の心理や障がい開示についても研究しています。難聴とはどのようなものか、難聴者の困難、難聴の早期発見と対処法、コミュニケーションの工夫などに関して、多くの方々にわかりやすくお伝えしたいです。

② 研究の出口のイメージ

地域住民や自治体職員、学校や企業、病院、施設等で高齢者や難聴者に関わる仕事をする方たちを対象とした「耳の健康教育」プログラムを実施いたします。難聴、コミュニケーションの工夫やその他対処法などについて学ぶことで、地域住民の健康の向上及び各企業等のサービスの質の向上につながります。WHOは若年層の難聴についても警告していますから、世代を問わず、難聴への理解が重要です。

キーワード

難聴、加齢性難聴、スクリーニング検査、コミュニケーション、耳の健康教育、認知症予防、転倒予防、難聴者の心理、臨床心理学、老年学、生活の質、ヘッドホン難聴、やさしい日本語

研究の内容

WHOによれば、世界では15億人が何らかの難聴を抱えており、2030年にはその数は23億人以上に増加すると推計されています。65歳以上人口の約3分の1が難聴といわれています。日本でも65歳以上の高齢者のうち1,500万~1,600万人以上は難聴があると推計されています(右上の図参照)。そして、難聴は健康状態や日常生活にも大きな影響を与えます(右下の図参照)。例えば、難聴は認知症やうつ、転倒、社会的孤立などと関連していることが研究により示されています。つまり、難聴は重要な健康課題のひとつといえます。しかし、残念ながら、人々の難聴に対する認知度は低く、聞こえにくくなくても放置されがちです。

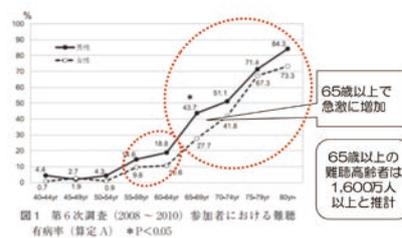
さらに難聴の問題は高齢者ばかりではありません。WHOは世界では約11億人の若者が難聴のリスクに直面していると警告しています。これはヘッドホンやライブなどでの大音量聴取によって生じるものです。

このような状況を改善するために、難聴予防策、難聴の早期発見と早期補聴、コミュニケーションの工夫、補聴機器などについて研修や講演会を行います。正しい知識と対処法によって、一人ひとりの健康及び生活の質の向上を目指します。

今後の展望

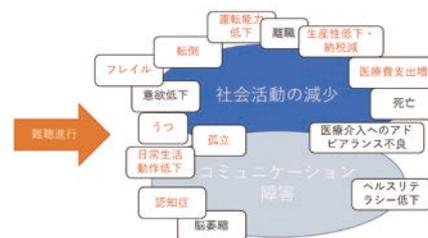
全国の自治体や企業において、「耳の健康教育プログラム」を実施し、難聴に関する一般の理解を深めることと、企業や病院、学校等における誰にでもわかりやすいユニバーサルデザイン・コミュニケーション方法を提案します。今後は難聴者へのサポートをより効果的にするための機関(研究、製品開発、難聴者支援をワンストップでできるようなセンター)の設立に関わりたいと考えています。

難聴者数の推計



内田ら(2012)より引用

難聴をそのままにしている高齢者に生じる健康問題



(内田, 2018より引用)

博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文に現れた誤用の傾向・要因と指導方法



准教授
板井 美佐

① アピールポイント

中国人上級日本語学習者が書いた論文における誤用の特徴、原因を解明し、指導のヒントとして有効な指導方法を究明します。

② 研究の出口のイメージ

中国人上級日本語学習者の、論文における談話レベルの誤用の特徴、原因を踏まえた上での効果的な指導方法をわかりやすく伝え、そのための教材を開発します。

キーワード

修士・博士論文、学術論文、中国人上級日本語学習者、生データ、日本語作文コーパス、誤用の傾向と要因、指導のヒント

研究の内容

これまで留学生の作文及び論文に現れた誤用を対象として誤用分析を行ない、その成果を研究論文、著書、中国での招聘講演会において明らかにしてきました。

本研究では、3回に渡って、13の分類項目と構成から、博士論文草稿に出現した生データにおける誤用の傾向と要因について分析・考察をし、指導のヒントを示しています。また、同学習者のアカデミック・ライティングにおける誤用の傾向と要因、指導の際に役立つ解説ポイントについての研究も進めています。

今後の展望

これまで、初級から中級レベル中国人日本語学習者の作文に現れた誤用に関する研究はなされてきていますが、中国人上級日本語学習者の論文における誤用の特徴・原因を究明した研究、その原因を踏まえた上での指導方法についての研究はほとんど行なわれていません。指導している学生の修士・博士論文草稿における談話レベルの誤用の特徴・原因を究明し、誤用から学ぶ指導方法のための研究を行なっています。

日本語の会話の丁寧さを決める要因は何か？



准教授
高木 美嘉

① アピールポイント

日本語には敬語の有無に関わらず、「とても丁寧な会話」と「なんだか失礼な会話」というものがあります。こうした会話の丁寧さを決める要因について、実際の会話の分析をもとに解明しました。

② 研究の出口のイメージ

自治体や企業で働く外国人に対する日本語教育や、一般の方のコミュニケーションのトレーニングに役立つ情報をご提供します。

キーワード

会話、コミュニケーション、丁寧さ、待遇ストラテジー、話題選び

研究の内容

日本語母語話者による電話での依頼の会話（20例）の全ターン（2,015発話／62分75秒）をデータとし、「何に関して話しているか」を質的に分析したところ、話している内容は用件だけでなく、相手との関係性に関する話や、その場所や状況を配慮した話、また、その用件の必然性をめぐる話など、1つの会話の中に意外に多くの話題が話されていることがわかりました。日本語の依頼の会話の中には、「～てくれませんか」「～てもらえませんか」といういわゆる依頼表現以外に、実際にはもっと多くの要素が含まれているわけです。

さらに、依頼表現以外の話題が会話の中でどのような条件で現れるかを見てみたところ、丁寧さと深い関係があることがわかりました。一般的に日本語の丁寧さというと敬語が関係していると言われますが、よく分析してみると、日本語母語話者は、敬語を使わなくても、話題の選び方、話題のつなげ方によって丁寧さを表していることがわかりました。本研究では、こうした丁寧さに関係のある話題選びの方略を「待遇ストラテジー」と名付けました。

この発見によって、外国人を対象にした日本語教育の会話練習の方法や教科書の記述を変えることができました。依頼表現「～てくれませんか」や「～していただけませんか」といったフレーズだけを練習しても、現実の日本での生活や仕事に通用しないことがわかったからです。一方の日本語母語話者は「待遇ストラテジー」を自然に身に着けていますが、意識して話してみると、さらにコミュニケーションの達人になれるでしょう。

今後の展望

「待遇ストラテジー」をトレーニングしながら、コミュニケーションがさらにじょうずになる練習方法やテキストを開発しています。

日本の企業が求める外国人人材とは — ビジネス日本語教育での実践 —



助教
羽鳥 美有紀

① アピールポイント

外国人が日本の企業で働く上で、言語以外にも円滑な人間関係を構築するための文化理解や、コミュニケーション能力、ビジネス慣習や企業文化などの理解が必要です。それらを含めた日本語教育を大学で実践しています。

② 研究の出口のイメージ

日本の企業に従事する日本人と外国人との間には、言語以外にも文化の相違からくる問題や認識のズレが生じています。それらを明らかにし、大学教育で何ができるのかを検討し、日本の企業で活躍できる外国人人材を育成することを目指しています。

キーワード

ビジネス日本語、キャリア形成、ビジネスマナー、企業文化、異文化間コミュニケーション、異文化理解

研究の内容

近年、日本の企業も外国人社員を積極的に採用し、グローバル社会に対応していこうという傾向が見られます。しかし、実際の現場では多くの問題があります。これまでの調査研究では、以下のような問題点が明らかとなりました。



*これまでの調査研究を教育に反映させた教材（2022年度から「ビジネス日本語」の授業で使用）

『日本で働くための本—就活生から社会人まで—』
アスク出版

【言語面に関する問題点】

敬語の使用、書き言葉と話し言葉の区別、ビジネス文書で使う日本語（語彙や表現）など

【言語以外に関する問題点】

ビジネスマナー、企業文化の理解、ビジネス慣習の違い（情報共有や仕事の進め方など）、人間関係（つきあい）、ハラスメント、「謝罪」に対する概念の相違、キャリアの重ね方など

これらの問題が原因となり、職場に馴染めず仕事を辞めてしまう外国人も多くいます。そこで、大学の日本語教育（ビジネス日本語）の中でこれらの問題点について考え、理解を促すことで、外国人が就職後に感じる違和感がなくなるのではないかと考えています。

*調査は、外国人人材が多く採用されているホテルや旅館などの宿泊業や、航空業界などを主な対象としています。今後は多様化する外国人人材に対応するため調査対象の幅を広げていきます。

今後の展望

今後も企業への調査は進めますが、「多文化共生」という観点でも研究を掘り下げていきます。また、日本で働く外国人人材のキャリアという点において、縦断的に研究を進めていく予定です。

メディア・経営・観光・ビジネス



消費者経済学・消費者教育論・経済教育論の研究



教授
阿部 信太郎

① アピールポイント

成年年齢18歳引き下げに伴い消費者教育、経済教育の重要性が高まっています。しかし、経済や金融は生徒・学生にとってはわかりづらい分野であり、消費者経済学の発想を取り入れる必要があります。また消費者教育は消費者市民の育成まで高めていくことが課題です。長年にわたり生徒・学生の経済・金融リテラシーの実態調査と国際共同研究を実施するとともに教材開発や学習方法の改善について取り組んでいます。

② 研究の出口のイメージ

各地の自治体や教育センターからの依頼を受けて、消費者教育や経済教育をテーマとする教員研修や一般市民対象の消費者教育講座の講師を担当しました。いずれも双方向的なワークショップ型研修を企画しました。また自治体・公的機関や業界団体等が作成する生徒・学生・一般市民向けの消費者教育や金融教育に関する啓発パンフレットや教材作成に携わりました。研究成果を踏まえて今後もこうした分野で貢献します。

キーワード

消費者経済学、消費者教育、経済教育、金融リテラシー、消費者市民社会、成年年齢引き下げ

研究の内容

長年にわたり、経済学と教育学の融合分野であり学際的な分野である消費者経済学、消費者教育論、経済教育論について調査研究を行っています。生徒・学生を対象に大規模なリテラシー調査を行い、その結果を踏まえて、教材開発や授業法改善などに取り組んできました。また、海外の研究者と共同研究を行うとともに、国際シンポジウムなども開催しています。

(1) 消費者経済学・消費者教育論

成年年齢18歳引き下げに伴い、消費者教育の重要性が認識されています。身近な題材を使いながら消費者市民の育成という究極の目標に向けて、消費者経済学と消費者教育論の原論的な研究から実践的な教材開発まで幅広く取り組んでいます。(この分野の学会活動：日本消費者教育学会副会長)

(2) 経済教育論・金融リテラシー教育

1990年代から継続的に生徒・学生を対象に経済の理解度についての実態調査を繰り返し実施し、その結果、特に金融とマクロ経済において理解度が低いことが判明しています。消費者経済学の発想から経済や金融をもっと身近に感じられる教材や思考力を育成する教材の開発に取り組んでいます。欧米の経済教育にも注目しています。(この分野の学会活動：経済教育学会理事)

今後の展望

社会の変化の激しい現代において私たちは生涯、学び続けていくことが必要です。特に現代の消費者に求められている消費者教育論・経済教育論についての原論的研究と、その時々課題の解決に必要な実践的研究の両面を深めていきたいと思っております。研究成果は、教育委員会の消費者教育・経済教育関連の教員研修や自治体の生涯学習講座などにおける双方向的なセミナーの実施や、公的機関や業界団体等が作成する消費者啓発資料等の作成に活用可能です。



ある種の群スキームのトーサーについて



助教
戸田 容平

① アピールポイント

本研究では、ある種の群スキームのトーサーを決定することができました。群スキームとは群を代数幾何学的に一般化したものであり、そのトーサーを決定することは、群スキームに対する Galois の逆問題を解くことを意味します。

② 研究の出口のイメージ

本研究を推し進めることにより、素数冪位数の有限群スキームの分類が期待されます。また、研究対象のひとつである、ある種の有限群スキームを用いることにより、高速で安全な暗号の構成が期待されます。

キーワード

トーサー、群スキーム、Kummer 理論、暗号への応用

研究の内容

F. Oort および J. Tate によって、素数位数の有限群スキームが、適切な a, b の選択のもとで $G_-(a, b)$ という形の群スキームに同型であることが示されていますが、L. G. Roberts は基礎環が局所体の整数環の場合に、C. Andreatta および C. Gasbarri は基礎環が完備離散付値環でその剰余体が正標数であり、かつ基礎環が b の $p-1$ 乗根を含む場合について、 $G_-(a, b)$ トーサーを決定しています。本研究ではこれらの先行研究とはまったく異なった手法および仮定のもとで $G_-(a, b)$ トーサーを決定しており、すなわち、円分振れトーラスの概念を用いる方法です。円分振れトーラスの概念の一般論は B. Mazur, K. Rubin および A. Silverberg によって与えられました。彼らは、1次元代数的トーラスの Weil 制限のノルム写像たちの核の共通部分によって与えられる部分群スキームが円分振れトーラスに同型であることを一般的な形で証明しており、小出・關口によって、円分振れトーラスが計算に援用できるような明示的な記述が与えられました。

本研究は、彼らを与えた上記の同型を拡張して得られる完全列の存在を示すことから出発し、円分振れトーラスの自己準同型環を具体的に記述し、さらに、 μ_p をあるトーラスに埋め込み、それらのデサントにより得られる完全列を用いて、 $G_-(a, b)$ トーサーを決定しています。また、F. Oort および J. Tate による素数位数の有限群スキームの分類定理を素数冪位数の場合に拡張することにより、 $\mu_{(p^l)}$ のデサントのトーサーについてもある程度の結果を得ることができました。

今後の展望

F. Oort および J. Tate が素数位数の群スキームの分類に用いた手法を一般化することにより、より多くの有限群スキームのトーサーについて決定することができましたが、この手法の一般化をさらに推し進めることにより、素数冪位数の有限群スキームの分類にまで発展させられることが期待されます。



香り、においの可能性を探る



助教
中村 智香

① アピールポイント

香りやにおいの情報は、私たちの嗅覚を介して脳へと伝わり、心や身体にさまざまな影響を与えます。香りやにおいがもつ力に着目し、どのように社会に生かすことができるかを探ります。

② 研究の出口のイメージ

香り、においの活用分野は多岐にわたります。健康維持、香育、医療や福祉、企業ブランディング、販売促進、空間演出、VR（仮想現実）やデジタル分野など、幅広い領域で香りの可能性を検討しています。

キーワード

香り、におい、嗅覚刺激、健康維持、企業戦略、環境改善、アロマセラピー

研究の内容

鼻の奥には嗅細胞が多数存在しています。嗅細胞は嗅毛をもち、嗅毛の表面に発現している嗅覚受容体に香り分子が結合することにより、嗅神経を介して脳に香りの情報が伝達されます。

嗅覚受容体の種類を決める遺伝子はヒトでは396種類あり、ヒトの全遺伝子の2%近くを占めています。私たちヒトは香りを捉えることに多くの遺伝子を使っているということになります。ヒトを含め、生物は、【生存】や【子孫繁栄】のために香りを利用しており、嗅覚はまさに本能的な感覚といえるでしょう。

香りやにおいは、食の美味しさ、ストレス改善、心地よい空間の演出、QOL（生活の質）向上など、私たちの生活を豊かにしてくれます。認知症、子どもの虐待、あおり運転などの社会が抱える課題への活用も研究されています。また、動物の優れた嗅覚を利用したがんの早期発見や新型コロナウイルス感染者の発見、VRに香りをプラスして視覚・嗅覚でよりリアル体験に近づける取り組みなども注目されています。

多くの分野で香りやにおいの導入が進んでいます。



今後の展望

香りやにおいは大きな可能性を秘めています。社会に貢献できる活用の仕方を考えていきます。

成田国際空港南側経済圏における地域活性化の探究



教授
七井 誠一郎

① アピールポイント

山武市からの委託を受け成田国際空港周辺地域における雇用環境調査を実施しました。空港の機能拡充に伴う雇用拡大が期待されていますが、空港南側地区の現状は、このままでは、その恩恵を受けられないことが予測されています。

② 研究の出口のイメージ

地域活性化として、雇用の拡大や人口の増加が大いに期待されています。そのためにも現状の課題を明らかにし、行政のみならず民間企業の力を借りるための施策を提示することが大事と考えています。

キーワード

成田国際空港、脱炭素社会、グリーンエネルギー、第三滑走路建設、成田空港南側圏地方創生、雇用環境調査、成田空港周辺地域における国家戦略特区

研究の内容

成田国際空港の第三滑走路となるC滑走路建設により、空港内における雇用は4万人から7万人へと約3万人の新たな雇用創出が試算されています。新滑走路建設による空港の機能強化が進むことで、大きな雇用創出が空港内、そして空港周辺地域においても期待されています。

これまで、この新滑走路建設に関連した調査研究の多くは、首都圏の空港機能強化の意義や千葉県への経済波及効果などマクロ的視点からおこなわれてきました。一方で、空港周辺となる地域に目を向けた調査や研究は、決して十分とは言えません。たしかに国や県といったマクロ的視点で見れば、滑走路建設や空港機能強化は経済波及効果が期待できるものの、空港周辺地域の視点に立つと果たしてどのような経済波及効果が期待できるのかがわかりません。本研究ではミクロな視点から、成田国際空港の第三滑走路建設、機能強化がどのような経済効果を周辺地域に及ぼすかを研究していくものです。



今後の展望

成田国際空港の機能拡充は、人口減少と高齢社会に直面する日本経済においても大きな刺激策となることが期待されています。地域や環境との共生を目指す地域活性化策を模索していきます。



情報システムにおける信頼性について



助教
成瀬 健一郎

① アピールポイント

情報システムの信頼性について、コンピュータシステムをモデル化し、最適な障害回復点の数、方法を研究しています。

② 研究の出口のイメージ

信頼性の高いコンピュータシステムの構成や故障率に応じた最適な障害回復点の設置数などを解析的に求めています。

キーワード

信頼性、チェックポイント回数、2重化システム、多数決システム

研究の内容

コンピュータシステムに依存している現代社会において、何らかの原因によってシステムが止まってしまった場合、大きな混乱が生じることは明白です。しかし、コンピュータは機械であるため一定の確率で故障が発生することは避けられません。そこで、システムとしての故障が許されない場合、コンピュータシステムの中で構成を2重にしたり、多数決システムを採用するなどして、一部でエラーが起こってもそれを表面化させないための構成や、そういった構成を施した場合の時間ロスを最低にするための方策について研究しています。

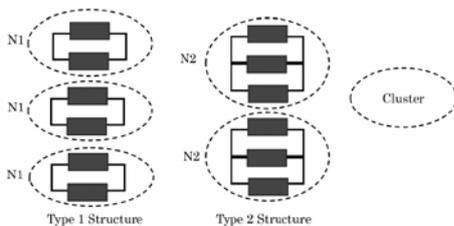


Figure 1: Two types of structure model

システム例

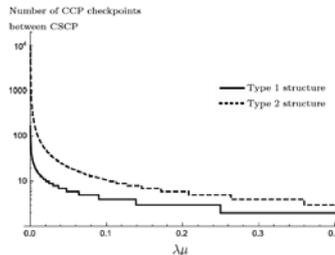


Figure 3: Number of CCP checkpoints between CSCP N_1^* and N_2^* when $Cs/\mu = 3.000, C/\mu = 0.001$ and $\mu = 1$.

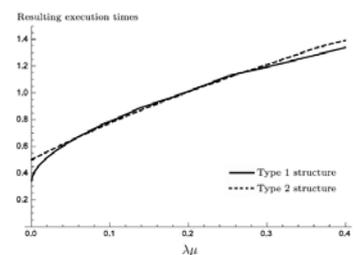


Figure 4: Resulting execution times $TL_1(N_1^*)$ and $TL_2(N_2^*)$ when $Cs/\mu = 3.000, C/\mu = 0.001$ and $\mu = 1$.

今後の展望

高信頼にするためにチェックポイント方式を採用したコンピュータにおいて、新しいチェックポイントの方式、システム構成などについて考案し、高速で高信頼なコンピュータシステムの構成について基礎研究を行っていきます。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



オピニオンダイナミクス理論を活用した イノベーションの普及要因の探索



准教授
藤居 誠

① アピールポイント

ネットワークの構造、広告などの外生変数、そしてエージェントのタイプ（採用者カテゴリ）といった要素に着目し、オピニオンダイナミクス理論に拠るイノベーションの普及に関する研究を行っています。

② 研究の出口のイメージ

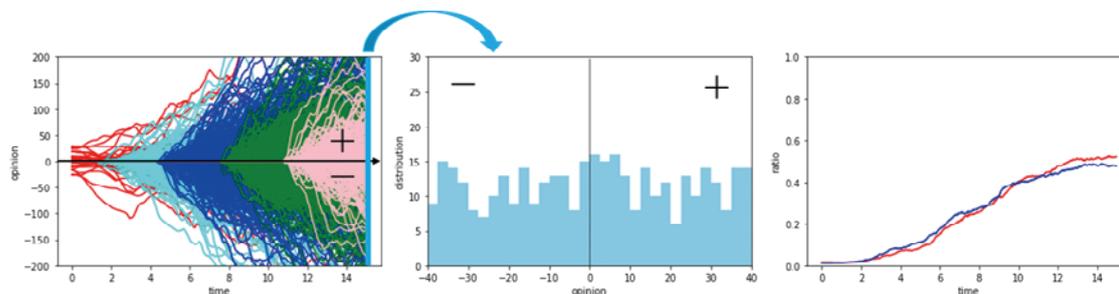
イノベーションの普及を促進するため、市場の状況に応じた効果／効率的な広告の投下パターンの開発など、外生変数の操作に利用できればと思います。

キーワード

オピニオンダイナミクス理論、シミュレーション、ネットワーク、イノベーション普及、採用者カテゴリ

研究の内容

社会物理学の研究テーマの一つであるオピニオンダイナミクスは、多数の人が周囲の人々と相互作用しながら意見を変え、社会的合意形成を目指していくプロセスを離散写像でモデル化し解析する理論です。消費者に見立てたエージェント、ネットワーク構造（エージェント間のつながり）、エージェントの意思決定に影響を与える広告などの外生変数を操作することで、イノベーションの普及過程の違いを観察するシミュレーション実験を行っています。



エージェントを5つのタイプに分け、イノベーションの普及（社会的合意形成）をシミュレーション

【左図】 エージェントを情報感度によって5つに類型化しイノベーションの採用率を観察

【中図】 シミュレーション終了時の採用率の分布（プラス（+）＝採用、マイナス（-）＝非採用）

【右図】 イノベーション採用率の割合の時系列変化（赤＝採用、青＝非採用）

*本図ではニュートラルな条件設定によるシミュレーションの為、採用／非採用の割合が拮抗している

今後の展望

複数の外生変数の取り扱い、複数イノベーションの普及を同時に取り扱ったシミュレーションなど、より実社会に即したモデルの開発を目指しています。



公共サインの中国語対応について



教授
宮 偉

① アピールポイント

名称サイン・解説サイン・注意サイン等からなる公共サインは、その多言語対応が注目されていますが、必ずしも適切に行われておらず、国や自治体のイメージにも悪影響を及ぼすことがあります。本研究は、その問題解決のために寄与します。

② 研究の出口のイメージ

中国語翻訳をはじめ、公共サインの多言語対応解決策を提案します。

キーワード

公共サイン、中国語翻訳

研究の内容

公共サインの多言語対応は、グローバル化に従い、訪日（在日）外国人の利便性向上の視点から、重要視されてきています。そして、その対応の質は、日本国及び自治体のイメージにも繋がっています。しかし、日本における公共サインの多言語対応は、必ずしも満足できるような状況にはありません。中国語翻訳に限ってみると、誤訳をはじめ、公共サインの情報伝達という機能が損なわれ、設置主体者の教養度までも疑われるような問題が頻繁に見られ、中国のマスメディアにもしばしば取り上げられています。本研究は、公共サインの中国語翻訳の問題点を考察・分析し、その解決策を提案するものです。



今後の展望

公共サインの中国語翻訳の問題点を体系的に分析し、その解決策や適切な対応について提案します。

エンターテインメントから見る世界の変容とアダプテーションの潮流



助教

宇田 夏苗

① アピールポイント

ミュージカルを中心に演劇・映画をはじめとするエンターテインメントを通して、社会の変容や人間の意識の変化を考察。さらには近年盛んに行われているアダプテーション（人気コミックや小説などの映像・舞台化など）を取り上げ、人の心を掴むコンテンツが生まれる背景、マーケティング戦略について実務者・研究者としての知識を提供していきます。

② 研究の出口のイメージ

たとえば『レ・ミゼラブル』やディズニーミュージカルなど日本で親しまれている作品を通して、ミュージカルの成り立ちや音楽と言葉の関わり、そこに描かれている時代・社会背景を読み解いていきます。たんに楽しむだけでなく、エンターテインメントを学習の題材として活用する方法を提案します。また演劇は対話を広げるツールであり、演劇を鑑賞することは、グローバル社会で求められている共感力（エンパシー）を育むことにもつながります。

キーワード

ミュージカル・演劇、多様性、ジェンダー、異文化交流、共感力、翻訳・翻案

研究の内容

ミュージカル・演劇をメディア（情報伝達的手段）としてとらえ、世界の歴史や人間の権利意識や社会の変化について研究しています。今日私たちが映画や舞台で鑑賞しているミュージカルの多くは、米国ニューヨークのブロードウェイ、英国ロンドンのウエストエンドと呼ばれる劇場街から生まれたものです。そもそも演劇は社会を映す鏡と言われています。それゆえに、一見楽しく思えるミュージカル作品にも人種問題、差別、ジェンダー、LGBTQといった今日的題材が織り込まれており、さまざまな作品に触れることは、グローバルな視点を養うことになると考えます。それら舞台芸術から、社会情勢や歴史も自然に学ぶことができます。

私のもう一つの研究テーマは「アダプテーション」です。小説や漫画の映画化・舞台化のみならず、アニメ、ゲームなど、メディアを横断した形式の変化＝アダプテーションは、古くからグローバル・エンターテインメントの世界でたえず行われている現象です。こうした作品からポップカルチャーの実態を理解し、文化的グローバリゼーションの動向について研究を進めています。



日本のアニメーションが舞台化された例
『千と千尋の神隠し』『バケモノの子』

今後の展望

近年の人気の高まりによりテレビ局など多くの企業が参入しはじめているミュージカル。日本のミュージカルに関する文化およびビジネスとしての両面からの専門研究を進めるとともに、エンパシーを育む芸術として幅広くエンターテインメントについて考察、グローバル社会にとって需要課題である異文化交流、他者理解へと結びつく研究を深めていきます。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



「限界芸術」の体系化に関する研究



助教
大絵 晃世

① アピールポイント

鶴見俊輔が提唱した「限界芸術論」という思想は、「素人による素人のための芸術作品」を意味しますが、これに特化して研究する研究者は少数です。私はこの概念を、芸術と非芸術の境界を議論するためのキーワードとして重要視し、体系化に取り組んでいます。

② 研究の出口のイメージ

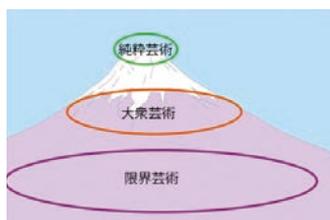
この思想では、人間のさまざまな「表現」を芸術とみなしており、例えば、子どもの落書き、盆栽や花火といった日常における文化、友達につける面白い「あだ名」まで、広く取り扱っています。これらの日常を少し面白くする「小さな芸術」を見つけるきっかけを、ワークショップや市民絵画教室、絵本の出版などでその発見の面白さをアピールしています。

キーワード

芸術哲学、限界芸術論、表象文化論、博物館学、アーカイブズ学

研究の内容

1960年代、鶴見俊輔は「限界芸術」を、「非専門的表現者により作られ、非専門的享受者によって享受される表現」と定義し、日常のなかにひそむありとあらゆる表現も一つの「芸術」であることを提唱しました。似ている概念に「アウトサイダー・アート」などがありますが、「限界芸術」では享受者までも定義している上に、絵画や彫刻作品だけではなく、日常の身振り・手振りや早口言葉、あだ名といった小さな表現までもを包含しています。この概念が提唱された1960年代から60年ほどが経ち、2020年代ではインターネット上やYoutubeを含むソーシャルメディアなどで表現が極めて多様化し、誰でもいつでも「表現者」になれる時代が到来しています。このなかで新たに限界芸術を体系化して考察し、現代における限界芸術の研究と、その日常や社会における役割の明確化および普及につとめています。



限界芸術の概念図



子どもの「自由帳」の研究の成果物で、私が著者の絵本『自由帳みせて！』2020年、福音館書店

今後の展望

本年は、限界芸術論を扱った私の博士学位論文を大幅に修正した著書『世界を肯定する表象：限界芸術はだれかに「贈られる」(仮題)』を出版予定です。今後は、「事務作業のなかの芸術／芸術表現のなかの事務作業」をテーマに、創造的作業と非創造的作業の境界について研究していきたいです。

ヒトの形質の他の生物描画における応用 — 生物のボディプランのクリーチャー造形への活用 —



准教授
高桑 真恵

① アピールポイント

生物のボディプランを基に、「分類学上近縁の生物の形態が似る」という仮定から、クリーチャー造形におけるマスターモデル（複数の雛形）を定義し記憶することにより、あらゆる動物種やクリーチャーの描画が容易になると見込まれます。

② 研究の出口のイメージ

大きくボディプランが異なる新・旧口動物のすべての動物種を描くためのマスターモデルを定義し、数少ない雛形の形態を理解することにより、あらゆる生物種を容易に描くことが可能となります。

キーワード

クリーチャー（仮想生物）造形、デッサン、ボディプラン、美術解剖学、比較形態学

研究の内容

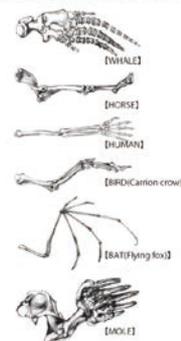
アニメやゲームコンテンツに登場するクリーチャー造形には、生物の形質（構造や機能）の理解が補助になることは周知のとおりです。しかし生物の形態は多種多様であり、全てを記憶することは困難です。しかもコンピューターグラフィックスなどの業界において、これら生物の形態の理解なしにクリーチャーなどのキャラクター設計においてリアリティのある創造・制作が困難であるという問題がかつてより提起されていて、理解の必要性は高いため問題解決が求められます。

一方、人物の素描といった生体観察を行う機会を通し、ヒトの形態の理解が、他の生物の造形に活用できたという事例がありました。これが事実であるならば、ヒトの形態の理解が他の生物の造形に役立つのではないかと想定されます。

本研究においてはヒトをマスターモデルとして設定し、その形態の理解がどこまで応用が可能であるかを、ティラノサウルス類の骨格を中心に、進化系統樹上の近縁の動物と比較しました。更に遡って上門の系統分類学上上位のタクサに属する種と形態の比較を行ない、人体解剖学の知見をベースとした比較解剖学やボディプランが、系統樹上近縁の動物描画に活用できる理由をティラノサウルス類の描画を例に調査を行いました。



HOMOLOGUES OF THE FORELIMB IN SIX VERTEBRATES



脊椎動物の相同性を表した図

今後の展望

本研究において現時点でヒトの形態をマスターモデル（造形の雛形）として同じ哺乳類の他の種や二足歩行の恐竜類に造形の応用できることがわかりましたが、ヒトが属する新口動物とは形態の異なる旧口動物は、大きくボディプランが異なるため、あらゆる動物とクリーチャーを描くためには、ヒト以外の複数種のマスターモデルを定義する必要があります。しかしこれが明確になれば、他種多様な生物・クリーチャーの描画の補助となり、容易になるでしょう。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



3Dスカルプトツールを使用したクリーチャー造形における解剖学的整合性の意義



准教授
高桑 真恵

① アピールポイント

クリーチャー造形において、脊椎動物のボディプランのうち、頭部・体幹・上肢・下肢といった区分で異種の生物の部位を挿げ替えた場合、違和感のない自然なデザインに仕上げることができた事例紹介です。

② 研究の出口のイメージ

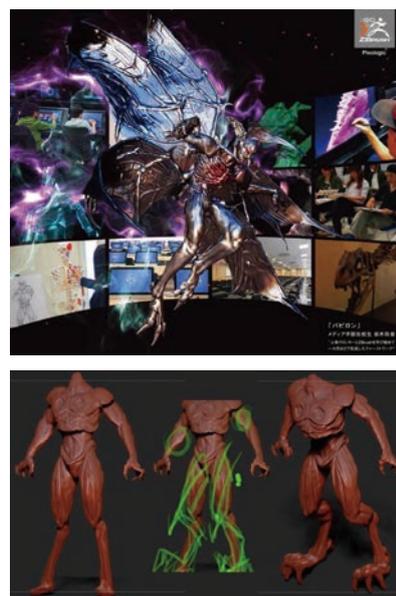
クリーチャー造形においても、形態における整合性をデザインの設計から完成に至るまでの基軸とすることにより、造形物のリアリティは高まり、造形そのものの美しさをより引き立たせることが可能となります。

キーワード

比較解剖学、3Dスカルプト、CG、クリーチャー、キメラ

研究の内容

学生作品の3Dスカルプトツールを使ったクリーチャー制作の事例を基に、デザイン・3DCGモデリング・アニメーションといった制作工程を経るために、比較解剖学の知識を活用した造形プロセスを確定する試みを行いました。またボディプランにより動物の形態の相同性が生じている点から、異種の動物間の同一関節部位を挿げ替える「キメラ的合成」を行うことが違和感のないデザインをする上で有効であることが明らかになりました。そのため脊椎動物の頭部・体幹・体肢といったボディプランにおいて、特に自由下肢の構造を猛獣として機動力を高めるために、相同する部位を挿げ替えるキメラ合成的デザインを行い、目標としていた攻撃力を感じるデザインに仕上がりました。



今後の展望

多種間の生物の同一部位での置き換えは、組み替えに違和感がさほど生じなく、自然なデザインとして仕上がるという可能性が見えてきました。この試みは他にも応用できるため、今後も同様の数多くのクリーチャーデザインが可能となることを見込んでいます。同時にヒトの形態の理解が他の生物の造形に役立つ事も明らかになったため、ヒトの形態を雛形として脊椎動物のあらゆるクリーチャー造形が可能となると見込んでいます。



アメリカ合衆国第26代大統領 Theodore “Teddy” Roosevelt の肖像写真から見る「憂い」の原因についての一考察



准教授
高桑 真恵

① アピールポイント

セオドア・ルーズベルトの肖像画を描くために、モチーフとなる人物の人格的特徴を調査するために、人生の年譜を5分割し、それぞれの時期において人格形成に影響したと思われるセンテンスを日記や手紙、第三者が書いた伝記などを参考に調査、分析を行いました。

② 研究の出口のイメージ

肖像画にリアリティを齎すものは、人物の形態を似せるだけでなく、その人物の特徴となる表情が何かを調査し決定します。さらにその表情に加工を加え、制作依頼者の使用用途に適応させる必要があります。

キーワード

肖像画、SNSアイコン、人格、顔面表情、セオドア・ローズヴェルト

研究の内容

本研究においてSNSアイコンとしてのTheodore “Teddy” Roosevelt氏の肖像画制作のための事前調査を行い、肖像画で表現する人物のパーソナリティと実際とに乖離がないよう検証を行いました。肖像描画においてモチーフとなる人物の顔に現れる感情は、人物のパーソナリティーの表現をする上で重要な手掛かりとなります。参考とした代表的肖像写真に見られる瞳の「憂い」の理由を探るため、セオドア氏に関する文献を調査、その中でも同氏が残した日記には、「憂い」の感情の理由を探る重要な手掛かりとなる事実が書かれてありました。同時に、多面的な分析を行うため、セオドア氏の年譜を調査し、参考とした写真が撮影された時期の感情を想定する試みを行いました。



今後の展望

SNSアイコンとしての肖像画制作の依頼は多く、またモチーフとなる人物も故人であるケースがあり、人物の人格的特徴を想像するのが困難である場合があります。人物の最も特徴的な表情とは何かを決定するためには、人物の調査を人生の年譜や残された日記、伝記などの資料の調査により人物の実際と肖像画の表情とに乖離がないよう試みるのが大事です。



SNSアイコン Theodore “Teddy” Roosevelt の 肖像描画における問題解決

— アメリカ合衆国第26代大統領 Theodore “Teddy” Roosevelt の 肖像描画における骨格的整合性と感情表現の必要性 —



准教授
高桑 真恵

① アピールポイント

肖像画を作成するにあたり、モチーフとなる人物の輪郭及び顔面諸器官の主要とされる位置にマーカーを設定すると同時に、写真から想定した頭蓋骨格図の復元を試み、主要骨格位置で輪郭を決定した上で人の外貌を似せる試みを行いました。

② 研究の出口のイメージ

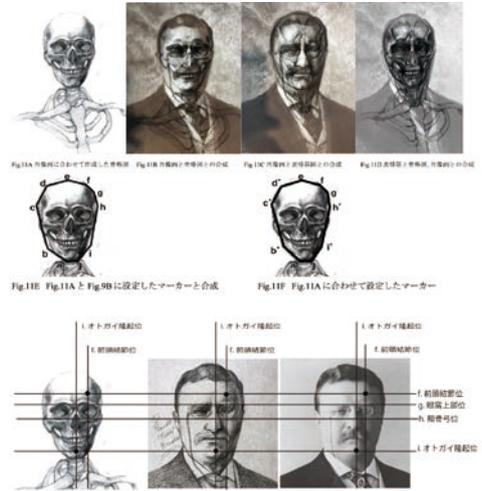
肖像画において骨格をベースとした形態的特徴を似せるだけでなく、表現者の想像力と感覚に委ねることになる人物のパーソナリティーを表す目元などの表情は、人物表現にリアリティをもたらすことができる重要な要素です。

キーワード

肖像描画、骨格的整合性、顔面表情、解剖学、セオドア・ローズヴェルト

研究の内容

SNSアイコンとしてのTheodore “Teddy” Rooseveltの肖像描画制作の依頼を受け、その制作過程において発生したいくつかの問題解決を行ないました。一つ目に、骨格的形態の理解が描画を容易にするのではないかと仮定し、参考とした写真と肖像画の両方の輪郭位に、骨格上主要であると想定した部位の位置指標としてのマーカーを設定し、解剖学的整合性を図りました。その結果、肖像描画において人物の外貌を似せるためには骨格の主要部位における位置の整合性が優先されることが確認できました。二つ目にこのマーカーはデッサンの初期段階において目安として描く「アタリ」に相当するのではないかと考え、人物を見る角度によりその位置が変化することでも想定されました。三つ目として、肖像描画においては外貌を似せるだけでなく、人物の人格が現れやすい目元の表情が重要と考え、参考写真に見られる「憂い」という負の感情と、「笑み」という正の感情の中間表現を目指しましたが、この点については表現者の感覚に大きく依存することがわかりました。



今後の展望

SNSアイコンとしての故人の肖像描画の依頼は多く、今後の受注の増加が見込まれます。しかし人物の骨格的形状の三次元的計測などができず、また目元などに現れるパーソナリティーの想像が困難で、多くの調査が必要とされ容易ではありません。しかし完成した肖像画は背景、テクスチャー、衣装などを入れ替えることにより、1度の制作で多くのバリエーションに活用することが可能となります。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



「ロマ音楽」を想起する —多文化共生社会の実現を目指したマイノリティの音楽研究—



准教授
滝口 幸子

① アピールポイント

国家や地域において、移民、難民あるいは民族的・宗教的差別の対象であるが故に可視化され難いマイノリティを対象に、彼らの音楽における民族的アイデンティティを想起する実践活動に注目しています。具体的にはオーストリアのロマ民族の音楽活動を事例とし、国民国家を持つことのなかった彼らが、多数派社会の一員として各々の経験を繋ぎ合わせながら、ロマという共同体意識をいかにして想起しようとしているのかを明らかにします。

② 研究の出口のイメージ

差別は無知から生まれるものです。マイノリティ研究は、日本の多文化共生社会の実現においても大きな可能性を提示できると考えます。

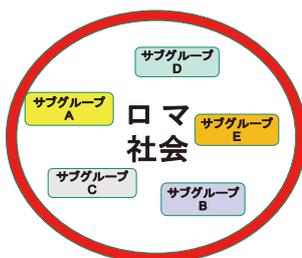
キーワード

マイノリティ、ロマ、ヨーロッパ、想起、アイデンティティ、音楽

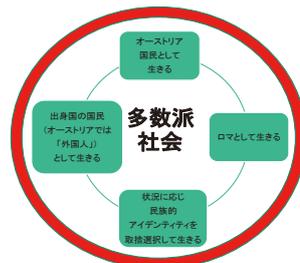
研究の内容

ロマ民族は、これまで国民国家を持ったことは一度もなく、歴史・社会・文化の異なるさまざまなサブグループに分かれています。そのため、彼らの何をもって「ロマ」と見なすのか、一般化して述べることは困難です。オーストリアにおいても、出身国、国内入国時期、居住地、宗教、伝統的職業などの異なるいくつものサブグループが居住し、各々が「自分たちが本物のロマだ」と主張しています（資料1）。一方彼らは多数派社会との関わりにおいては、状況に合わせて自身の民族的アイデンティティを上手く取捨選択しながら生きています（資料2）。このように、ロマ社会においても多数派社会においても多様な民族アイデンティティが存在するロマが共同体としての「ロマ音楽」の想起を試みようとする場合、それはどのような場において、誰を対象に発動し、どのような姿を見せるのか。本研究では、オーストリアのロマ達の、「ロマ音楽」の想起の実践について明らかにします。

資料1.



資料2.



今後の展望

欧州統合が進む中、ヨーロッパ各国ではロマの保護政策が数多く打ち出されています。それに伴いロマ自身もアソシエーションを組織し、自ら民族の権利や文化の存在を主張する行動を起こすことができるようになりました。今後は、ロマの音楽活動を通してヨーロッパが目指す「多様性における統合」のあり方を見据えながら、マイノリティの音楽研究を日本でも発展させて、国内の多文化共生社会の実現に貢献できることを考えていきたいです。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



インターネットでの映像配信を中心としたメディア表現の活用による、地域イベントの「メディア化」を通じた活性化に関する実践的取り組み



教授
寺本 卓史

① アピールポイント

インターネットライブ配信が一般化する2010年以前より、ライブ配信を地域イベントの発信に活用することに取り組み、自治体、ラジオ局、民間企業などと協同で地域イベントの「メディア化」に取り組んでいます。

② 研究の出口のイメージ

地域イベントをメディアイベントとして発信することによる経験の蓄積で、メディア表現と「メディア化」の効果測定に関する事例を収集し、地域活性化にネットメディアが果たしうる役割について、理論と実践の両立する基礎理論モデルを構築します。

キーワード

インターネット配信、地域活性化、メディア表現、メディア論、技術構成論、メディアデザイン能力

研究の内容

この研究は、端的には、インターネットで地域イベントなどを発信することで、イベントを「メディア化」し、それによって、どのような影響を一般の人やステークホルダーに与えることになるかを検証しようというものです。M.マクルーハンは『メディア論』の中で、「メディアはメッセージである」と述べています。これは、メディアの使用法自体もメッセージ性を持った一種の「イベント」となりうることを示すものです。一方、マクルーハン理論は「技術決定論」的であると批判を受け、それに対比する「技術構成論」的なアプローチが重要であるとの指摘もあります。本研究では、こうした「技術構成論」の立場に与しつつ、メディア技術と社会との相関関係の中で、効果のあるメディア表現の方法論を実践的に構築することを目指しています。そのためには、多くの実践的取り組みが必要です。

さらに、本研究は、きわめて実践的な活動に根差しておりながら、メディア論に出発点を持つ「メディア技術・表現」と「社会的受容」の相関関係を考察することを目的としています。ここでの「受容」とは、文字通りに情報・コンテンツを「受け入れる」だけではなく、発信と受信の相互作用の中での関係であり、その解明には社会的な文脈としての慣習、制度、法体系までも包括してとらえる必要があると考えます。「基礎情報学」に代表されるような、「情報」概念の再検討も連関することで、再帰的に情報社会を構成するすべての人が必要となる、広義の情報リテラシーとしての「メディアデザイン能力」のあり方を明らかにすることがこの研究の最終的な目標です。

今後の展望

インターネット配信に限らず、様々なメディア技術に基づくメディア表現と受容者との相関関係を考察することを、テーマとしています。こうした活動を通して、「メディアの形」が生成され、確立されるプロセスを明らかにすることを、目標としています。



XRコンテンツの開発、マルチメディア技術の研究



教授
中嶋 正夫

① アピールポイント

ヴァーチャルリアリティを活用したコンテンツや、3DCGで作成した仮想空間によるバーチャルツアーツールやゲームなどの研究・開発をしています。

② 研究の出口のイメージ

既に近隣の自治体と協力して、VRの体験会や施設紹介のバーチャルツアーコンテンツを作成しています。今後このようなメタバースは広く活用されることが予想できます。

キーワード

XR (VR, AR, MR)、メタバース、3DCG、マルチメディア、プログラミング

研究の内容

学生時代は人工知能を研究し、機械翻訳システムや日本語談話理解システムの研究を行っていました。その後、コンピュータを利用した教育システムの研究やスマートフォンのアプリの開発を行っていました。

現在は、メディアとコンピュータを融合したシステムの研究開発に発展し、VRやメタバースのコンテンツを中心に開発を行っています。

また、それに付随するもので、3DCGを作成したり、それを人間の動きに応じてリアルタイムに動かすようなことも行っています。

公益財団法人 画像情報教育振興協会（CG-ARTS協会）の委員としてマルチメディア検定の教育や検定試験に関わる業務も行っています。



今後の展望

VRなどのメタバースの技術は現在注目されています。コミュニケーションの手段として、非接触でありながらリアリティのある形態は今後も伸びることでしょう。現在も近隣地域での実験を行っています。



三次元コンピューターグラフィクス



助教
中村 陽介

① アピールポイント

アニメ、映画、ゲームなどさまざまな分野で活用されている3DCGの制作手法を作品づくりを通じて学生に教えています。近年はVRコンテンツのさまざまな分野への活用について研究しています。

② 研究の出口のイメージ

自治体のPR活動にVRコンテンツを活用できます。また、あらゆる映像にCGによる加工を行うことができます。

キーワード

3DCG、VR、AR、アニメ、ゲーム、Unity、UnrealEngine

研究の内容

2021年度に、VRを地域振興に活用する研究として、「VR道の駅」システムの開発を行いました。このシステムの特徴は、360度動画を用いた地方特産品の収穫、生産工程を見るなど、地方特産品の情報をVR空間で体験することで観光地での買い物のように特産品の購買意欲の向上を実現するものです。360度動画の他、地方特産品の購買意欲を向上させるコンテンツを配置し、且つ老若男女がVR空間で能動的にアクセス可能なシステムをUnityで開発しました。



今後の展望

VRを教育などさまざまな分野への応用を模索するほか、UnrealEngineなどゲームエンジンを映像制作に応用したコンテンツ開発の手法や教育法について研究を行います。

対面コミュニケーションにおける言語化トレーニングの研究



教授
宮田 佳代子

① アピールポイント

ネットコミュニケーションが当たり前となった今、対面での言語化能力を鍛える手法について研究しています。思考や感情を、相手との間合いを把握した上で言語化するトレーニング法の開発、その成果をまとめています。

② 研究の出口のイメージ

身近なビジネスにおいても、消費者の立場に立った説明、人の心に寄り添う会話術は今後ますます注目されるべきスキルと言えます。社会活動の基本となる対面でのコミュニケーションは言語表現の上に成り立っています。その重要性について世に問いかける研究としたいです。

キーワード

言語化、しゃべりのスキル、インタビュー、コミュニケーション、音声表現、フリートーク

研究の内容

「言葉にできない」というのは、対面コミュニケーションを諦めた状態を指します。どれだけ素晴らしい意見やアイデアがあろうと、それを言葉であらわせなければ他人と共有することはできません。人にわかりやすく説明すること、人から上手く話を聞き出せることは、コミュニケーションの難しさから生じる問題を解決に向かわせる有効なスキルとなります。言語化表現のスキルアップの手段を創出、その効果を確認する研究を行っています。

例

- 相手にどう思われたいかを明確にした自己PR
- 誰もが知る言葉を3つの文章で説明してみる
- 写真を見ながら時系列に沿った段取りを説明する
- 紙芝居を見ながら昔話を情感を込め語ってみる
- スキルに沿って詳しくインタビューする



今後の展望

今後は、幼稚園、小学校、中学校という教育の場で、長期にわたり定期的にトレーニングの実践を行い、子どもたちの言語化能力の成長・成果についてオリジナルのルーブリック評価にまとめたいと考えます。

音楽劇の制作を通じた障がい者の身体技能の向上と自尊感情の醸成



准教授
望月 純吉

① アピールポイント

ダウン症等の障がいを持つ人がダンス等の芸術表現を通じて身体能力を向上させ、自信を持てるようなメソッドの構築を追究しています。文学座の演出家として障がい者団体で演技・歌唱や舞踊等の指導をしています。

② 研究の出口のイメージ

芸術的手法を用いた身体能力と自尊感情の醸成におけるメソッドの構築。指導のメソッドを普及することで社会が障がい者の能力を認知し、共存方法の選択肢を広げます。

キーワード

演劇、舞台、演出、演技、歌唱、舞踏、障がい者、総合芸術、相互理解

研究の内容

障がい者と健常者の枠を越え、コンサートやミュージカルを通じて交流することを目的としている、山梨県『山の都ふれあいコンサート』は、ボランティアで組織する実行委員会が中心となって運営しています。

障がい者自身、実行委員、教員や保育士、施設職員、看護師、甲府青年会議所の方々、山梨県民文化ホールの方々、学生等によって、コンサートは41年間続いています。心身の障がいごとに得意なことは異なるため、特性や留意点を活かしながら、その能力を最大限に発揮できる方法を模索しています。それを芸術的な表現に昇華させることができると、自信を持つことができ、より表現の幅が広がることがあります。様々な障がいに応じたメソッドを構築できれば、自分の能力に自信を持てる人が多くなります。



今後の展望

10年間の活動において子どもの成長力に驚かされてばかりです。思い通りの言語表現や身体表現に近づけられたと喜び、より活発に活動する彼らの姿が参加者の胸を打つことは言うまでもありません。メソッド確立を感動という社会の原動力につなげていきたいと考えています。

初等教育における演劇的表現の重要性について



准教授
望月 純吉

① アピールポイント

教科書での学びを演劇にすることで、学びを立体的にすることができます。児童とともに演劇を創作する過程で、日頃のコミュニケーションでは確認できなかった児童の強みや課題を確認することができます。

② 研究の出口のイメージ

教育現場と教育委員会との連携の強化。創作活動を通じて、表現力やコミュニケーション力などの非認知能力を可視化します。また、スチューデント・アパシーや虐待等、潜在的課題の早期発見の機会としたいと考えます。

キーワード

演劇、舞台、演出、演技、自己表現、発達課題、虐待、非認知能力、総合学習

研究の内容

文部科学省（2010）は、「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」において、これからの時代を生きぬく子どもの基礎的な能力として次の4点を掲げました。

1. 国際社会を生きぬく異文化コミュニケーション能力
2. 世代間コミュニケーションの問題を克服する能力
3. 楽しい学校生活を送るための人間関係を形成していく能力
4. 多様なコミュニケーション能力

このような能力の醸成を鑑み、「コミュニケーション教育推進会議」を設置、この動きに連動し、文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」（2010）の一つとして「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」を展開し、芸術家等と教師の連携による芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を実施しています。



今後の展望

上級生になると社会性が発達し、照れや義務感が創作活動に垣間見えます。SNSの発展などによって日常の直接的なコミュニケーションは従来よりも希薄になりつつあることから、授業という限定的な時間の活用法や指導法を構築し、潜在的課題の発見、非認知能力の醸成につなげたいです。



インバウンド観光における滞在コンテンツの造成



准教授
于航 (YU HANG)

① アピールポイント

アフターコロナの観光政策は、従来の誘客施策の強化より、ニューノーマルの観光に応じ得る滞在コンテンツの構築が急がれています。長期滞在時間の確保と定期訪問への動機づけ、外国人利用者の滞在コンテンツに対する認識及び志向性を明らかにする研究を行っています。

② 研究の出口のイメージ

「密を避ける観光」、「量」より「質」を重視する付加価値の高い滞在コンテンツの造成により、将来的にインバウンド観光の回復と地方創生に寄与することを目指しています。

キーワード

インバウンド観光、地方創生、外国人観光客の志向性調査、コンテンツ造成・開発

研究の内容

観光庁では「感染拡大防止と観光需要回復のための政策プラン」(2020)の中、「国内外の観光客を惹きつける滞在コンテンツ造成」を含む5本の柱を掲げられており、そのうちの「滞在コンテンツ造成」が主な研究テーマです。これまでは「安房地域におけるインバウンド観光の可能性と問題点」、「外国人目線から見た東北スノーコンテンツ魅力」、「千葉県鴨川市における地域公共交通の利用現況及びインバウンド観光に向けてのショートトリップ展開」、「農家民泊のインバウンド受入の可能性」など、地方へのインバウンド観光展開のあり方と観光コンテンツの造成に関する論文を多数発表してきました。また、「安房の国観光まちづくり塾」で「外国人旅行客が求める訪日旅行の価値」など計8回の講演を担当しました。「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」事業(2020、観光庁)で採択された「海と里山のKAMOGAWA 農家民泊・宿坊宿泊でEXPERIENCE TRADITIONAL JAPAN」プログラムで『アフターコロナのインバウンドの動向と受入体制についてー「滞在コンテンツ造成」ワークショップ』の講師として務め、「訪日観光の価値及び地域観光魅力づくり」、「宿坊滞在」、「農家民泊」のテーマについて招聘講演及び在日外国人と市民のワークショップを実施してきました。



今後の展望

インバウンド観光の基本と地方誘客に関する地域観光魅力発見、観光資源の磨き上げ、コンテンツの構築と商品化について議論・情報共有し、今後の地方誘客と地方経済の回復に貢献できる研究を行います。

地域資源を活用したコミュニティの活性化に資する 実践的取り組みの考察



准教授
内山 達也

① アピールポイント

限界集落の活性化活動に取り組み、観光資源の発掘、磨き上げ、そしてその活用を実践するなかで、地域におけるコミュニティビジネスの可能性を考察します。

② 研究の出口のイメージ

住民が主体となって地域資源を活かす方法を実践し、地域が稼ぐ方法を見出していきます。

キーワード

地方創生、地域活性化、コミュニティビジネス、限界集落、小さな拠点

研究の内容



地域に魅力を感じる観光者にとっては、異なる「暮らし」を体験することが「異日常の体験」となります。そして、地域にとっては「日常の暮らし」を体験してもらうことで、新たな地域の価値を生み出していくことにつながります。

異なる地域に住み、異なる生活文化をもつ人々が、その日常性の中に現れる異質性の魅力を楽しむことで、地域の個性（地域文化＝生活文化）が育まれ、「地域らしさ」という価値につながります。地域の持続性を高めていくには、地域住民が主体となって活躍する場を協働で生み出していくことが求められています。

今後の展望

コミュニティが活発化し、各地域が小さな拠点となって、それぞれが地域の魅力を高めていくことで、持続的な地域が作られていくと考えます。そして、コミュニティを牽引していくための人材育成や活動を持続するためのコミュニティビジネスを形成していく方法を考察します。



観光地における新たな地域内交通の定着とそれに伴う拠点整備に関わる研究



助教
金子 祐介

① アピールポイント

多くの観光地では、地域が抱える定住人口の高齢化といった課題に対応した地域内交通の確保とともに、観光産業を支える観光モビリティの役割も担う低炭素型の新たな地域内交通が求められています。本学の拠点である山武郡域もそうした課題に対する回答が求められる地域と言えます。

② 研究の出口のイメージ

本研究は、そうした課題に対して対応できるスローモビリティと既存モビリティの連動（MaaS）事業の構築、それに伴うコンパクトな観光に特化した地域社会のモデル構築を最終目標としています。

キーワード

MaaS、デジタルアプリケーション、スローモビリティ（スモールモビリティ、グリーンモビリティなど）、EV化、サイクルツーリズム、拠点整備

研究の内容

1. 電動車椅子の観光利用に関する研究（ゼミ）
現状では、スモールモビリティ（電動車椅子）の地域にあった利用マニュアル整備とスモールモビリティに適した観光のためのMAP（アプリ）づくりを行なっています。
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=10171>
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=12436>
2. サイクルツーリズム促進に関する研究（授業）
現状では、自転車でしか行くことができない観光コンテンツの調査とそうしたコンテンツに連動したコース設計をする上での課題についての検討をしています。
今後は、準公共交通機関との連動を図りたいと考えています。
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=8626>
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=8584>
3. ウォーカブルシティ促進に関する研究（授業）
現状では、スローモビリティを導入した際に必要とされる観光コンテンツの洗い出しと既存拠点を観光利用した際に必要とされるノウハウの洗い出しについて調査しています。
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=9784>
<https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=9657>



今後の展望

1. スローモビリティを社会実装した際の課題調査
2. スローモビリティを活用した観光に関するメリットの調査
3. スローモビリティを運用するための拠点整備マニュアルの作成
4. 上記、研究内容の連動事業の構築



自然・農業・環境教育を活用した 健康増進と地域活性化プログラムの開発・評価



教授
多田 充

① アピールポイント

a. 自然の管理と、b. 緑とのふれあいが人間に与える効果を研究しています。どの地方にもある、ありふれた自然でも、人への働きかけ方を工夫することで魅力と効果を引き出し、地域の活性化につながられます。

② 研究の出口のイメージ

自然の癒しや学習意欲向上を活用したマイクロツーリズム、園芸による高齢者の生きがいづくりやリハビリテーション、障害者の就農支援等、健康と経済に結びつく地域のこつづくりを支援します。

キーワード

自然環境保全、公園・緑地の活用、子どもの自然体験、森林療法、リハビリ園芸、農福連携

研究の内容

自然環境がもたらす快適性は人間に多面的な効果をもたらします。都市環境と比較すると、脳の活動を鎮静化させるだけでなく、血圧の上昇を抑え、運動・精神疲労からの回復を促進します。また痛みの緩和、抗がん作用の増強なども報告されており、自然とのふれあいが人間の心身に与えている好ましい効果の科学的根拠が明らかにされつつあります。

もっと長期的な効果についても、自然体験の後に学習意欲が高まることや、さまざまな体験活動を経験している子どもほど自己能力感が高く、高学歴で高収入を得ているという調査結果が報告されています。また、近年問題になっている発達障害児の行動調節やうつ病の回復促進・社会復帰等にも有用であり、自然が人間にもたらす効果は全人的で幅が広く、かつ副作用を伴わない優れたものであることが分かってきています。

このような知見を応用することで、身近な自然を利用した多様で魅力的なプログラムを開発することができます。プログラムを実行することで、地域の方々の健康増進や次世代育成に貢献するだけでなく、地域内外から人々を呼び込むことで地域の活性化も期待することができます。



今後の展望

自然や農業を利用した①医療・福祉分野における精神・身体的リハビリテーション、②教育機関やNPO等における自然体験、環境教育活動、③行政や企業と連携したまちづくり・地域活性化等の各種プログラムの開発、効果測定を共同研究するカウンターパートを求めています。



中堅中小企業の今日的課題の解決に向けた萌芽的研究



教授
中沢 信一郎

① アピールポイント

企業が直面する外部経営環境の変化・事業承継の課題に対して、産学連携のアプローチから調査研究を行い、ESG経営の視点を整えます。グローバル市場への参入・アジア事業戦略の展開・DXの実装・事業承継のマネジメント等に対する課題を整理し共に考えます。

② 研究の出口のイメージ

事業承継が達成されるまでのプロセスに対する定量・定性の分析を行った結果、承継後の企業価値向上に繋がります。デザイン思考を用います。

キーワード

事業承継、ESG経営、デザイン思考、ハンズオン支援、経営心理学、イノベーション

研究の内容

まずこの研究の背景となる企業の今日的課題を3点述べます。

第1に国内の中堅中小企業が抱える課題として、「**事業承継**」があります。これは「第二創業」とも言われ、経営者の代替わりのタイミングで様々な課題解決が求められます。

第2に国内市場の規模縮小があり、企業活動の活路を見出すためにグローバル市場への参入を検討することが課題になっています。

第3にDX（デジタルトランスフォーメーション）への対応が、喫緊の社会情勢になっています。更には、環境・社会・統治に配慮した経営（**ESG経営**）を視野に入れることが、昨今求められつつあります。

当該研究では、経営者・従業員・顧客等の潜在価値発掘に**デザイン思考**を導入して「みえる化」を行います。組織の現場に埋もれて潜在化している価値を発見し活用します。産学連携の下、**ハンズオン支援**の必要性を確認します。併せて、経営心理学の知見から分析を行います。

イノベーションの創出に大学が携わるメリットは、様々な業界の垣根を超えて普段に縁のない人々と出会える点と、中長期的な観点から物事を進める際の知見を得られるところにあります。以上のプロセスから**イノベーション**をもたらす、企業価値向上に繋がります。

今後の展望

産学連携のアプローチから調査研究を行います。現場のヒアリングから始めます。個別企業の委託を受けて、デザイン思考を推し進めます。企業活動の持続可能性と**SDGs**の結び付きを強化します。



九十九里浜・南房総沿岸部の漁港と漁師町の文化的景観と観光資源



教授
中沢 信一郎

① アピールポイント

ユネスコ世界遺産が主導する文化的景観の捉え方を援用し、東金市と九十九里町の観光資源の評価基準の再構成を進め、これまでとは異なる視点からの価値を創出します。対象地域の観光資源の魅力を発掘します。

② 研究の出口のイメージ

新しい観光政策の提言を念頭に、文化的景観の保護行政と観光振興の両立手法を考案します。

キーワード

観光政策、観光資源、文化的景観、九十九里浜と南房総沿岸部、漁港と漁師町とその生業

研究の内容

長い年月をかけてその土地ならではの文化的景観を育んできた社会構造は、人々の生業や生活の営みに現れます。その動態を包括的に究明することが望まれる中で、「文化的景観」足らしめる「みえざる仕組み」を明らかにします。その仕組みを尊重した上での保護・活用・管理と観光振興の両立手法はどのようになされるべきか？さらには「ちば文化的景観」をどのように次世代に受け継いで行くのか？という問いかけの答えと持続可能性を探究します。

研究活動から「人間と自然との間の過去から現在に至るまでの、そして現在から未来を見据えた相互作用により生成される景観」の価値分析と評価方法の体系化を進めます。観光政策を東金市及び近隣自治体に政策提言できるよう報告図書にまとめます。

地域の生活環境を「良好な景観の形成」の観点から読み解くと共に、地域の主体性の中から文化的景観を保護・活用・管理するための指針を導きます。文化財保護法が定める「文化的景観」と景観法が定める「良好な景観」の比較検討を行った上で、九十九里浜・南房総沿岸部の漁港と漁師町の現状観察を行い記録化します。地域の風土の分布・形態・相互関係の把握のため空間解析を試行し、対象地域の「歴史文化基本構想」と「文化財保存活用地域計画」の策定に資する地理情報を提供します。

今後の展望

産学連携のアプローチから調査研究を行います。現場のヒアリングから始めます。地方自治体の委託を受けて、文化的景観からの価値創出を推し進めます。地方文化の持続可能性とSDGsの結び付きを強化します。

リスクと税率がみかん耕作放棄地の再生と 柑橘生産活動に及ぼす影響評価



教授
都丸 孝之

① アピールポイント

本研究では、みかん畑の耕作放棄地が年々増加していることを受け、農家の納める税率や天候不順・鳥獣被害などのリスク軽減が農業経営および耕作放棄地再生にどの程度の影響を及ぼすのか評価できます。

② 研究の出口のイメージ

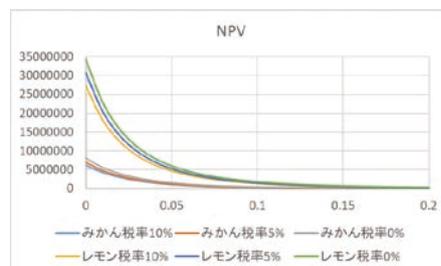
農家の納める税率や鳥獣被害や天候不順などのリスクに着目し、これらの要因が耕作放棄地再生と柑橘の生産活動に与える影響度を正味現在価値法 (NPV: Net Present Value) を用いて検証します。

キーワード

地域創生、耕作放棄地、税率、正味現在価値、柑橘生産

研究の内容

農家の高齢化に伴いみかんの樹園地の耕作放棄地が年々増加しています。耕作放棄地を再生させ、その農地を再活用することが急務となっていますが、耕作放棄地を再生させる上で農地を整備する費用やその農地に植樹する苗木費用が大きな負担となります。本研究では、耕作放棄地を再生した農地で柑橘生産することを想定し、農家の納める税率や天候不順・鳥獣被害などのリスクが、耕作放棄地の整備費用と苗木費用の回収期間への影響、さらにはNPV (Net Present Value) に及ぼす影響を評価しました。その結果、農家の納める税率の軽減と鳥獣被害などのリスク対策が、耕作放棄地の整備費用と苗木費用の回収期間の短縮、NPVの向上に大きく寄与することを示しました。また、みかんの耕作放棄地をレモン畑に転作することで、農家の収益が大幅に改善することも併せて示しました。



税率がNPVに及ぼす影響評価



耕作放棄地を再生させ
レモンの苗木を植樹

今後の展望

柑橘のブランディング化や柑橘の生産品質の向上、無農薬生産などの付加価値によって柑橘の販売単価がどの程度向上するのか消費者の意識調査と農業経営に与える影響度を考察します。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



インバウンドの視点からの観光まちづくり 産官学による政策形成のためのプラットフォームづくり



准教授
黒澤 武邦

① アピールポイント

学外組織と連携して、観光振興や都市再生など地域活性化につながる事業に積極的に取り組んでいます。公共政策コンサルタントや政策担当秘書として培った政策形成プロセスや政府渉外に関する豊富な知識と経験を活かして事業や研究を進めています。

② 研究の出口のイメージ

産官学連携活動を通して、一自治体、一企業ではカバーしきれない政策の必要性及び許容性について調査研究を行い、プラットフォームを構築して提言活動を推進していきます。

キーワード

観光まちづくり、都市再生、地域活性化、公共政策、政策形成プロセス

研究の内容

- 東京都の「大学等と連携した観光経営人材育成事業」の連携大学として選定され、外国人材活用をテーマに、社会人を対象にした観光経営人材育成講座を企画・運営し、教育プログラムの開発に取り組みました。(2019年度-2021年度)【右上：講座案内チラシ】
- 一般社団法人気仙沼仕事創出プロジェクトと連携してフィールドスタディを実施して、地域関係企業との勉強会において中国人観光客の視点から「観光と食」「体験型観光とSDGs」などをテーマに提案を行いました。(2019年度-2021年度)【右下：作成したPR動画】
- 地域復興のためのライフラインの必要性と課題として、福島県の避難指示解除後の薬局ゼロ地区解消にむけて、実行委員会を設置して、福島県関係自治体、厚生労働省、薬局、有識者による福島薬局ゼロ解消ラウンドテーブル会議を開催しました。(2021年度)



今後の展望

引き続き、現在取り組んでいる連携活動の深化と、インバウンド観光をはじめとした持続可能な地域の発展及び公共政策のあり方に資する取り組みを推進していきます。お気軽にお問い合わせください。

動学的確率的一般均衡（DSGE）モデルによる 長期停滞ヒステリシスモデルの開発と政策分析



准教授
小松 悟朗

① アピールポイント

現在、国際機関や各国の中央銀行で広く用いられている政策分析ツールによる、日本の「失われた20年」のような長期停滞の原因究明を行っています。

② 研究の出口のイメージ

長期停滞を再現できるマクロ経済（DSGE）モデルを開発し政策シミュレーションを行うことで、長期停滞脱出に有効となる金融・財政政策の提案を目指しています。

キーワード

動学的確率的一般均衡モデル、DSGE、マクロ経済学、長期停滞、失われた20年、金融政策、財政政策

研究の内容

経済全体を分析する経済モデルであり、現在世界各国の中央銀行や国際機関で盛んに開発されている「動学的確率的一般均衡（Dynamic Stochastic General Equilibrium: DSGE）モデルの開発と実証分析を行っています。特に、日本の「失われた20年」や金融危機後の米国の「緩やかな回復」のような、これまでのDSGEでは再現が困難とされていた「長期停滞」モデルの開発に取り組んでいます。

ある政策の効果を検証しようとする場合、その政策を行った場合とそうでない場合の比較が必要になります。しかしながら、現実の経済を利用して自然科学で行うような実験はできません。そこでDSGEモデルでは、経済主体の合理的行動を数式に落とし込み現実の複雑な経済現象の本質をとらえ、その中でシミュレーションを行い政策効果を検証する、というアプローチを採ります。政策の波及効果の分析に重要となる経済主体の期待も取り込み発展してきたDSGEモデルの開発と実証を通じて、景気変動や政策に資するような研究にこれからも貢献していきたいと考えています。

今後の展望

DSGEモデルを用いて長期停滞を再現するモデルはまだ開発が始まったばかりです。本研究では、これを再現する基本モデルを提案することで、先進国を中心に常態化する長期停滞現象の究明を推し進めます。



複合機能を持つアモルファス合金（バルク金属ガラス）の作製と新特性



特任准教授
孔 凡利

① アピールポイント

アモルファス合金は、急冷凝固法で作製された長範囲的にランダムである合金です。金属ガラスは、近年発見された徐冷凝固しても結晶質にならず、アモルファスとなる多成分系金属です。金属ガラスは高精度、省エネ加工が可能と、応用範囲が大きく広がりました。

② 研究の出口のイメージ

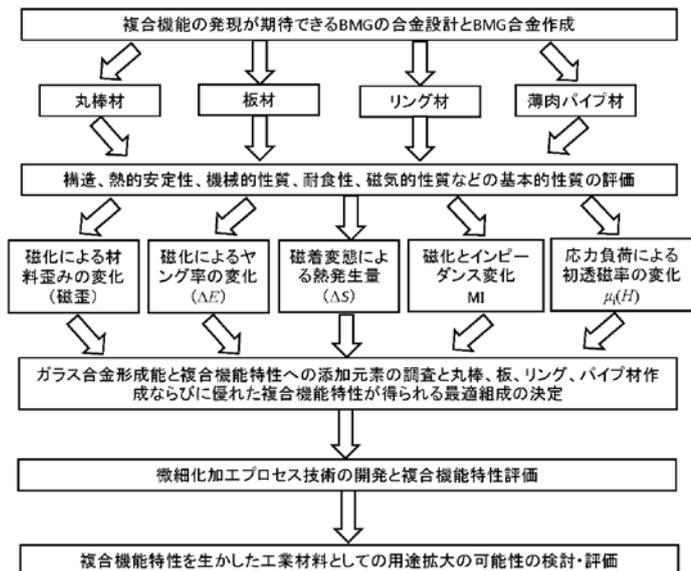
鉄系の金属ガラスは、電気抵抗が高く、保磁力の小さな優れた磁気に特徴づけられます。省エネルギー、低ノイズな磁性部品として応用されています。Zr 基およびTi 基ガラス合金の応用分野は、構造材料、精密機械材料、生体・医療機器材料などが挙げられます。

キーワード

アモルファス合金、バルク金属ガラス、高エントロピーバルク金属ガラス、磁気特性、ナノ結晶軟磁性、高強度、耐食性

研究の内容

1. 複合機能を持つ鉄基バルク金属ガラスの創成と特性
2. 高延性・高加工性を持つ高磁束密度軟磁性鉄基非晶質合金
3. 高磁束密度低鉄損軟磁性鉄基ナノ結晶軟磁性合金の開発
4. 多成分系高エントロピーバルク金属ガラスに関する研究

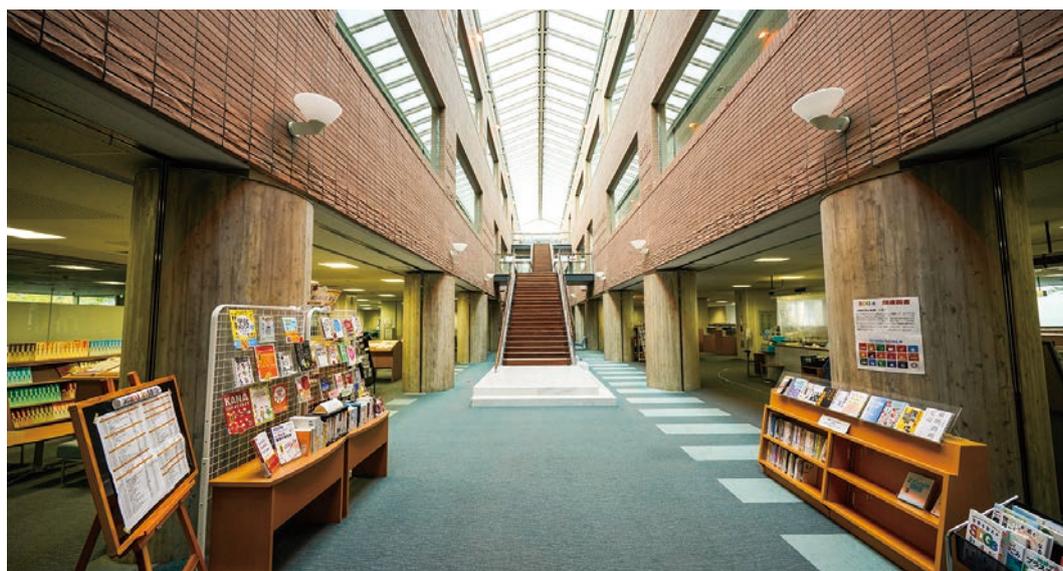


今後の展望

省エネルギー化、小型化、低ノイズ化を促進する複合機能を持つ鉄基バルク金属ガラス・ナノ結晶軟磁性合金の探索研究を行っています。



薬学



機能性表示成分の薬学的品質評価法 —食品・サプリメントの有用性と安全性評価法開発をめざして—



教授
秋元 雅之

① アピールポイント

抗酸化成分を中心とする機能性表示食品の吸収性の予測や薬-食相互作用について検討することで、安全性や有用性の重要性を再確認しました。製剤学的評価やin vitro代謝試験により、最終製品の品質保証や機能性成分の安全性を評価できます。

② 研究の出口のイメージ

機能性食品、サプリメントおよび漢方医薬に、抗酸化効果、薬物動態（基礎データ）というガイドラインに沿った科学的なエビデンスを付加し、商品開発に有益な情報を与えます。

キーワード

基礎研究、抗酸化作用、機能性表示食品、サプリメント、吸収性、薬物代謝、薬食間相互作用、漢方医薬、医療用医薬品

研究の内容

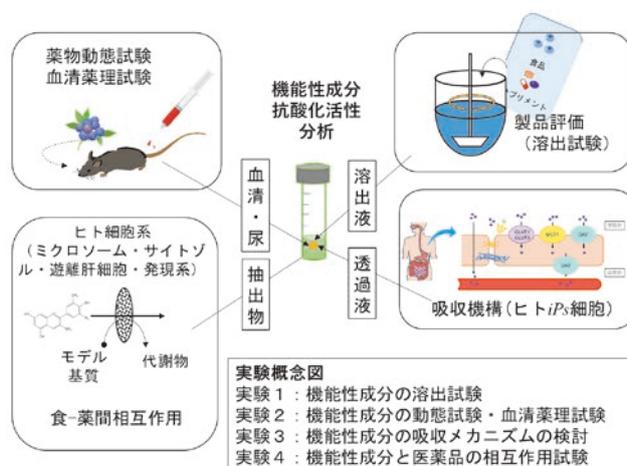
Phytochemical含有食品は抗酸化作用を有し、機能性表示食品として健康維持・増進や疾病に対する予防効果が期待され、サプリメント等として販売されています。

しかしながら、食品と雖も必ずしも安全が確保されていると言い切ることができるでしょうか？

- ・十分な食経験又は試験による安全性確認
- ・機能性成分と医薬品との相互作用の確認
- ・摂取量を踏まえた製品規格の設定
- ・最終製品の分析

についての情報を国民消費者に開示する必要があるのではないのでしょうか？

薬物動態学研究室では和漢医薬学研究室と共同して食品の安全確保推進研究を進めています。



今後の展望

医薬品に類似した形状の食品やサプリメントが多く販売されており、消費者は医薬品と同様の効果を期待しています。しかしながら、期待に合う製品ばかりとは限りません。私たちは、優れた品質の製品開発と情報開示のために尽力いたします。

新規な骨格や生理活性な天然物の全合成に関する研究



教授
石崎 幸

① アピールポイント

自然界の動植物が作り出す新規な骨格をもつ、あるいは有用な生理活性をもつ有機化合物（天然物）を化学的に合成する方法を検討しています。

② 研究の出口のイメージ

自然界から得られる天然物の多くは微量なため、多くの量を化学的に合成することで物性や薬理活性試験等の調査に貢献できます。また、中間物質など天然に存在しない化合物の調査も可能です。

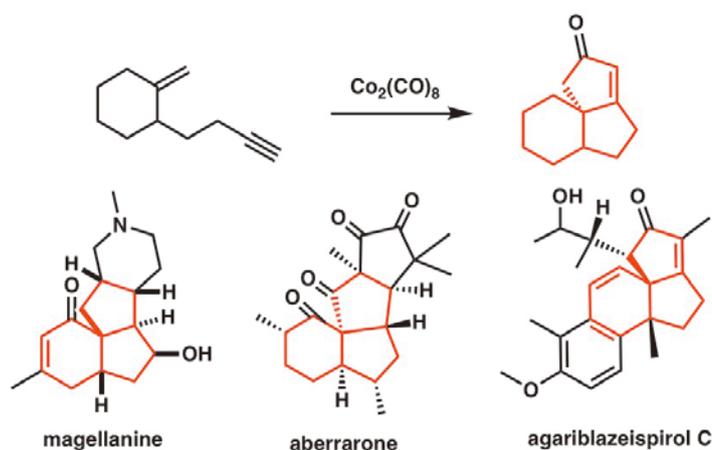
キーワード

基礎研究、生物活性、新規骨格、天然物、全合成

研究の内容

エンイン化合物の環化反応を利用して多環構造を構築し、官能基変換を行うことで、様々な天然物の化学的な合成を行います。

リコポジウムアルカロイドに含まれる magellanine などの合成を達成しました。他にも海綿から得られる抗結核作用を有する aberrarone、アガリクスの培養菌糸体から得られる新規な四環性骨格をもつ agariblazeispirol C などの合成を検討しています。



今後の展望

天然物の構造は多種多様であるため、合成に必要な手法の開発とともに最終産物となる天然物だけではなく、それらの誘導体を合成することも目指しています。

皮膚透過性に及ぼすイオン液体の皮膚透過メカニズムおよび促進効果



助教
押坂 勇志

① アピールポイント

皮膚透過パラメータを用いた化学物質の皮内動態解析や実使用条件下で適用した経皮吸収製剤からの薬物の皮膚透過挙動解析の研究が、厚生労働省もしくは日本化粧品学会より発出された安全性試験に関するガイドラインに引用されました。

② 研究の出口のイメージ

皮膚透過性が低い水溶性薬物をイオン液体とすることで、皮膚透過性の改善や封入できる基剤を増やすことで、水溶性薬物の経皮吸収製剤化を目指します。

キーワード

経皮吸収、イオン液体、物理化学的性質、活量

研究の内容

皮膚透過性が高い薬物の物理化学的性質は、分子量が小さく（500ダルトン以下）、薬物の脂溶性がある程度高いものになります。効能・効果が良い薬物でも、水溶性薬物であったために、皮膚透過量が低く、経皮吸収製剤にできなかった薬物が多々あります。また、経皮吸収製剤中の薬物の分解や不活化、さらには溶解性の低下など古くからの問題を解決する1つの方法として、薬物のイオン液体化が脚光を浴びてきています。

イオン液体は、アニオン性薬物とカチオン性薬物から構成される液状の塩と定義され、イオン液体は、融点が低く、室温付近でも液体の状態で存在するものになります。したがって、薬物をイオン液体化することで吸収改善になるだけでなく、イオン液体そのものが液体であるため、溶剤などが不要となり、高濃度で皮膚に適用することも可能となります。

一方で、イオン液体の中には、水に触れるとイオン液体化を解消するもの、粘度が高いものなどがあります。イオン液体を皮膚に適用したときに、皮膚に分配しやすいか、皮内にイオン液体が浸透した時に、皮膚にある水分でイオン液体が解消されてしまうのかなど、イオン液体の皮膚透過メカニズムについては、まだ分からないことが多いです。

イオン液体の皮膚透過メカニズムが明らかになれば、動物実験を行わずに、ある程度、皮膚透過性を予測することができ、スクリーニングにも繋げることができます。

今後の展望

イオン液体の皮膚透過メカニズムは、分かっていないことが多いです。我々は、いくつかの薬物をイオン液体にして、その皮膚透過性から皮膚透過メカニズム解析を行っています。

医薬品・医療機器のレギュラトリーサイエンスに関する研究



教授
児玉 庸夫

① アピールポイント

医薬品や医療機器の品質、有効性、および安全性の評価と開発の効率化を目的としたレギュラトリーサイエンス研究を行っています。また、当研究室は日本臨床薬理学会認定薬剤師制度の研修施設ですので、当該認定薬剤師を目指す先生方のご連絡ください。

② 研究の出口のイメージ

厚生労働省への承認申請を目的とした医薬品・医療機器の開発の効率化を支援します。また、日本臨床薬理学会認定薬剤師は、臨床薬理学の専門家として国民がより有効かつ安全な薬物治療の恩恵を受けられるために貢献することができます。

キーワード

薬機法、承認審査、レギュラトリーサイエンス、ICH、治験、臨床薬効評価、臨床薬理

研究の内容

医薬品や医療機器の品質、有効性、および安全性の評価と開発の効率化を目的としたレギュラトリーサイエンス研究として、厚生労働省が公表する審査報告書および承認申請資料を対象に、非臨床試験成績（無毒性量、曝露量）と臨床試験成績（臨床用量、曝露量）との比較による安全性評価、日本人被験者に初めて投与する第1相試験における開始用量設定法、治験での有効性主要評価項目としてのバイオマーカーの利用可能性、および治験におけるCTCAEグレード3以上の有害事象発現率に注目した安全性評価等を実施しています。

また、臨床薬理学は医薬品開発や臨床薬効評価を行う学問ですので、研究領域はレギュラトリーサイエンス研究の対象と重複する場合があります。さらに、臨床薬理学は薬物治療学を支える基礎として機能しますので、医薬品開発や臨床薬効評価に係る知識は、薬物治療の「個別化」を実現する上で有用です。

今後の展望

医薬品の場合、新たなICHガイドライン制定により医薬品開発が促進される可能性があるため、レギュラトリーサイエンス研究に対するアカデミア（学）の積極的な関与が期待されます。

新規キラル誘導化試薬の開発



教授 小柳 順一
助教 亀井 智代

① アピールポイント

有機化学を研究している機関には必ず必要とされるNMR測定装置を利用して、経験的な方法であるが絶対配置を決定できることはオイル状の化合物にとって有効です。そこで新モッシャー法で絶対配置を決定できるキラル誘導化試薬の開発研究を行っています。

② 研究の出口のイメージ

絶対配置決定に $^1\text{H-NMR}$ と $^{19}\text{F-NMR}$ を共に利用できるキラル誘導化試薬の開発を目指しています。このように二つの核種で絶対配置を決定することにより絶対配置決定の信頼性が上昇することを目的としています。

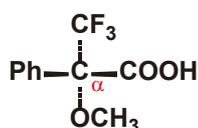
キーワード

$^1\text{H-NMR}$ 、 $^{19}\text{F-NMR}$ 、絶対配置決定、新モッシャー法

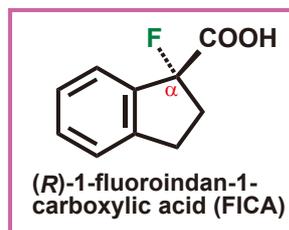
研究の内容

近年の有機化学の進歩はめざましく、不斉炭素を有する化合物の合成においては一方の対掌体のみを有効に合成できる方法が開発されています。光学活性化合物の人に対する作用は基本的に異なるので得られた化合物の絶対配置を決定することは重要です。一般的にはMTPAを用いた新モッシャー法が絶対配置決定に広く用いられています。しかしながらMTPAでは $^{19}\text{F-NMR}$ を用いて絶対配置の決定は行えないことが報告されています。

そこでベンゼン環とシクロペンタン環を結合させ、立体中心にフッ素原子を配置したFICAを開発し $^{19}\text{F-NMR}$ でも絶対配置の決定が可能かどうか研究しています。さらにはFICAのベンゼン環部分に置換基を導入してキラル誘導化試薬としての性能が向上するかも調査研究しております。



(S)-MTPA (Mosher, Kusumi)



(R)-1-fluoroindan-1-carboxylic acid (FICA)

1. Fixation of the orientation of Ar ring → Larger $\Delta\delta_{\text{H}}$
2. Restriction of the rotation around $\text{C}_{\alpha}\text{-CO}$ bond → Larger $\Delta\delta_{\text{F}}$

今後の展望

今まで、 $^{19}\text{F-NMR}$ を用いて絶対配置を決定することの出来るキラル誘導化試薬は開発されておられません。そこで $^1\text{H-NMR}$ のみでは無く $^{19}\text{F-NMR}$ も利用できるキラル誘導化試薬が開発できれば絶対配置決定の信頼性が向上いたします。

スポーツ選手のパフォーマンス向上のための食事・栄養学 —トレーニング負荷量とコンディションを考える—



教授
酒井 健介

① アピールポイント

主観的（心理的）尺度と客観的（生理的）尺度を用いて、選手のコンディションに合わせた食事や栄養について検討しています。コーチの計画するトレーニング負荷量への適応状態に応じた食事計画を検討しています。

② 研究の出口のイメージ

パフォーマンス向上につながる食事や摂取栄養素の提案を目指します。トレーニング負荷量への適応は選手個々で異なるため、選手個人の状態に適ったテーラーメイドの提案を目指します。

キーワード

食行動、栄養素等摂取量、食事調査、コンディション、心理的尺度、ピリオダイゼーション、トレーニング負荷量、パフォーマンス

研究の内容

同じトレーニングをしていても、パフォーマンスが向上する選手とそうでない選手が必ずいます。この違いは、トレーニング負荷量に対する適応と回復状況の違いにあると考えています。回復が不十分なままトレーニングを継続すると、十分なトレーニング効果は得られません。そこで、スポーツ選手の回復状況を縦断的にモニタリングすることで、トレーニングによる外的負荷のみならず内的負荷状態を把握し、レース（ゲーム）において最適なパフォーマンスを産み出すアルゴリズムを検討しています。一方で食事は回復を促す一つ的手段ですが、どのような栄養素をどのくらい摂取することが回復に適切なのかは十分な検討がなされていません。そこでスポーツ選手の回復状況と栄養素等摂取量についても同様に縦断的にモニタリングすることで、回復を促す食事や栄養素の摂取量について検討しています。

今後の展望

現在は大学生競泳選手を対象に縦断的モニタリングを行っていますが、異なる競技スポーツ、競技レベルやライフステージにおいても、選手個々のトレーニング負荷への適応を考慮した食事や栄養を提案していきたいと考えます。

生活習慣病の薬剤の適正使用や在宅医療のあり方を探索



准教授
佐々木 英久

① アピールポイント

最近では糖尿病腎症に対し、SGLT2阻害薬がどの重症度でも効果的であることや新型コロナウイルスワクチンの接種動機および副反応の傾向を明らかにしました。

② 研究の出口のイメージ

薬剤が効きやすいまたは、効きにくい患者背景を明らかにし、そのエビデンスに基づき、無駄のない医療が提供できるような情報を医療機関にフィードバックします。

キーワード

臨床研究、生活習慣病、糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、疑義照会、在宅医療、新型コロナウイルス感染症、検体測定室

研究の内容

病院や薬局にて以下の研究を実施

- ・糖尿病患者に対する能動的服薬指導効果に関する研究
- ・糖尿病腎症患者に対するSGLT2阻害薬の投与効果
- ・DPP-4阻害薬投与糖尿病患者に対する糖・血清脂質代謝変動の検討
- ・SGLT2阻害薬投与糖尿病患者に対する糖・血清脂質代謝変動と服薬指導効果
- ・高齢者糖尿病に対する薬物療法について
- ・保険薬局における疑義照会
- ・調剤薬局の適正な在庫管理について
- ・ドライブスルー併設薬局の有効性に関する検討
- ・高齢者糖尿病に対する薬物療法について
- ・在宅医療の費用対効果について
- ・千葉県東金市・山武市・大網白里市における薬局、病院、大学教員薬剤師の新型コロナワクチン接種業務の取り組みについて
- ・新型コロナワクチンの城西国際大学職域接種におけるワクチン接種動機と副反応の調査

今後の展望

- ・効果的な糖尿病腎症治療の探索や2022年度の診療報酬改定で「対人業務」の評価が導入され、まず薬剤師の減塩指導について探索する臨床研究を行っています。

薬物動態・薬効・毒性の予測に基づく 統合的創薬支援システムの確立



特別栄誉教授
杉山 雄一

① アピールポイント

クラリベイト社は、論文引用の詳細な分析により、杉山の特色として、引用している機関の半数近くが製薬企業であることを示しました。杉山が提案してきた薬物動態の解析・予測手法が創薬の場に広く受け入れられていることを示しています。

② 研究の出口のイメージ

薬物動態の個人差を考慮した予測および代謝・輸送の関わる複雑な薬物間相互作用予測に基づく創薬支援システムを開発します。

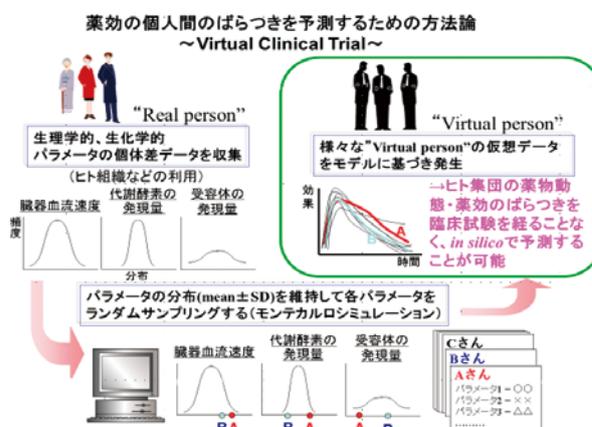
キーワード

薬物動態個人差、ファーマコゲノミクス、薬物間相互作用、仮想臨床試験、In vitro in vivo 補外生理学的薬物速度論モデル

研究の内容

薬物動態メカニズムに基づいた生理学的薬物速度論 (PBPK) モデルを薬効/副作用予測モデルと連結させ、さらに薬物動態・薬効制御因子個々の発現・機能の遺伝子多型や病態等による個人間変動、薬物間相互作用の情報を加味し、各パラメータの集団内分布に従ってコンピュータ上に仮想患者データを発生させシミュレーションを実施することで、集団での薬物血中/組織内濃度推移、薬効・副作用強度分布・頻度を予測する Virtual Clinical Study (VCS) を行っています。

薬物や集団が変わっても統一した方法論に基づきモデル構築を行い、汎用性の高い手法を提供することにより臨床開発試験の成功確率を上昇させることができます。



今後の展望

- ・ 前臨床から臨床試験にあげるための化合物選択
- ・ 薬物間相互作用の予測、肝・腎障害の予測
- ・ 対象患者の層別化
- ・ 臨床における安全性、治療域の予測

高分子ナノ粒子を用いた皮内への薬物送達



准教授
竹内 一成

① アピールポイント

生体適合性および生分解性を有する高分子を用いた薬物含有ナノ粒子の開発に成功し、特に皮膚を介した薬物送達に有用であることを見出しました。

② 研究の出口のイメージ

皮膚を介した薬物の全身投与や慢性皮膚疾患の治療だけでなく、角層や毛嚢への高い送達性を利用することで、化粧品開発における有効成分の輸送担体としても応用できます。

キーワード

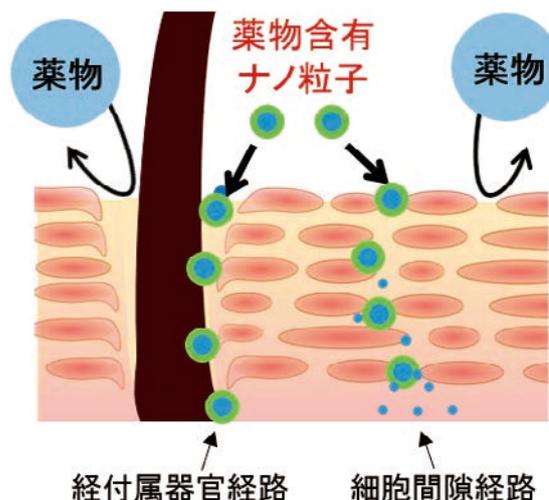
ナノ粒子、ドラッグデリバリー、全身投与、局所投与、慢性皮膚疾患、角層、毛嚢、非侵襲性

研究の内容

皮膚を介した薬物送達は、負担が少なく体内の薬物濃度が制御し易いことから、薬物投与経路として期待されています。

これまでの研究で、直径30~150nmの薬物含有ナノ粒子の調製に成功しています。これを用いることで、エタノールなどの皮膚刺激性を有する溶媒を用いることなく、水に不溶な疎水性薬物を皮内に送達可能であることがわかりました。また、ナノ粒子の皮内分布に関する研究成果から、「角層・毛嚢」へ集積し易いナノ粒子と、「角層・毛嚢・表皮深部~真皮」に到達するナノ粒子の調製が可能となりました。

本ナノ粒子は、全身性疾患の治療に有用であることが確認されており、局所作用だけでなく全身作用を期待した利用も可能です。



今後の展望

高分子ナノ粒子を用いた経皮投与には、投与時に有機溶媒を用いないため侵襲性が低いという利点があります。現在、これを活かした慢性皮膚疾患治療に関する研究を進めていますが、化粧品分野への応用についても検討しています。

普段の食事によってストレス抵抗性を高める 胃腸機能食材・食品の開発



教授
田嶋 公人

① アピールポイント

消化管に存在する特殊なタンパク質を刺激することで胃腸機能が高まることを発見し、普段の食事ですれらを適度に刺激できる、薬に依存しない、胃腸機能を亢進させる食生活・ウェルビーイングの提案を目指しています。

② 研究の出口のイメージ

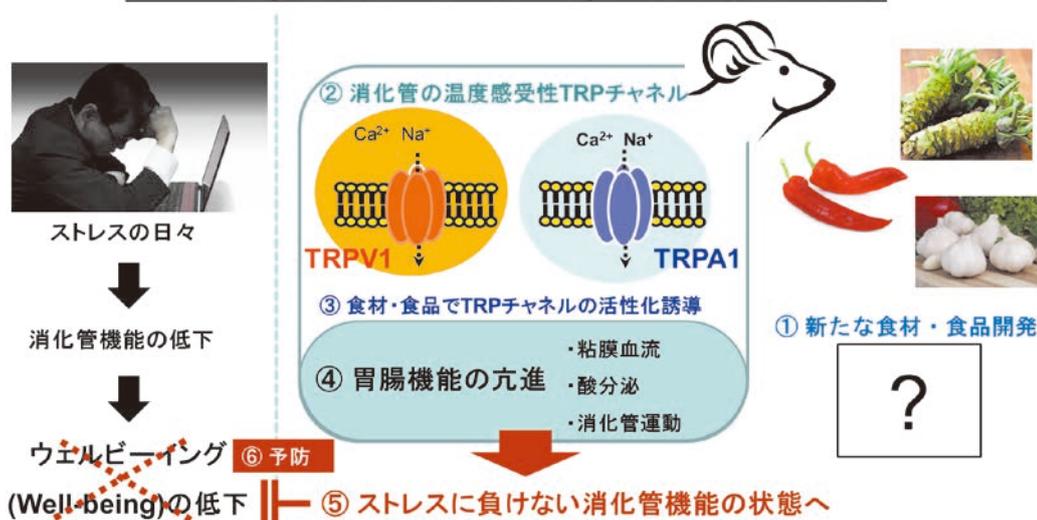
普段から口にできる食材・食品が消化管に存在する特殊なタンパク質（温度感受性TRPチャンネル）を刺激することで、ストレスに負けない胃腸機能が得られる科学的なエビデンスを提供します。

キーワード

トウガラシ、ワサビ、ストレス、胃腸機能障害、温度感受性TRPチャンネル、実験薬理学、薬膳

研究の内容

ストレス性胃腸機能障害の発生を防ぐ食材・食品の開発



今後の展望

千葉県は全国でも有数の農林水産物王国です。それら自然の恵みに健康を科学する視点を付加することで、千葉県産ブランドは美味しさとストレス抵抗性を増してくれる食材・食品であることを超高齢化社会で健康と食事に関心が高まる国内外へ発信できると考えています。

「卵からはじめる、ウイメンズヘルスケア」 — 卵子の再生力を引き出す世界初の不妊治療薬の開発 —



准教授
新倉 雄一

① アピールポイント

卵子の再生と老化を決定する創薬標的Xを発見し、その機能を可視化する技術を開発しました。本技術は、薬物候補の探索や卵巣老化マウスの作成に応用可能で、世界初となる卵子再生薬の開発を推進します。

② 研究の出口のイメージ

株式会社Ovenus（CEO 新倉雄一）が創薬パイプラインの開発及び知財の管理を行い、製薬企業との共同開発、ライセンス導出を目指します。

キーワード

不妊症、流産、更年期障害、卵子、再生医療、アンメット医療ニーズ

研究の内容

卵巣は再生しない臓器で、加齢に伴う妊娠力の低下は不可避かつ不可逆的な現象と考えられてきました。しかし、妊娠力をもたらす卵子は再生されます (Johnson *et al.* Nature 2004)。新倉らは、① 卵子再生細胞を世界に先駆けて発見、② 加齢により休眠状態に入ることを見出しました (Niikura *et al.* Aging 2009)。卵子再生細胞の休眠状態を制御することで、理論上、加齢に伴う妊娠力の低下を予防、治療することが可能です。

新倉ラボ@WSUでは、卵子再生細胞の休眠状態を制御する創薬標的Xを見出し、その活性状態を検出する技術を開発しました（未公開）。新倉ラボ@JIUでは、本技術が導入された培養細胞とマウスを作成し、休眠中の卵子再生細胞を活性化する創薬シーズの探索、そして卵子再生力を反映したバイオマーカーの同定を行うためのシステムを構築しました。

オビナスラボ@Ovenusでは、上記の知財及び資材を活用したパイプラインを開発し、世界初となる卵子再生薬とコンパニオン診断薬を創出します。

本事業に関心のある企業様は info@ovenus.co.jp までご連絡ください。

今後の展望

不妊女性をターゲットとする創薬研究ですが、卵子再生薬は更年期障害やがん治療に伴う卵巣機能障害に悩む女性、そしてコンパニオン診断薬は卵巣年齢に関心のある働く女性を第2のターゲットと想定しています。ライフステージ毎のアンメット医療ニーズに応えることでシーズ価値を最大化します。「唯一無二のソリューションで、ウイメンズヘルスの未来を切り拓く」というOvenusの精神を共有する投資家、製薬企業と共に、女性の元気を社会の元気につなげる医療を創出します。



進化医学の視点から考える感染症・遺伝子疾患・心疾患の新しい治療薬の開発



准教授
西口 慶一

① アピールポイント

進化医学の視点からの治療薬はない。その視点で感染症・遺伝子疾患・心疾患の新しい治療薬の開発をしています。

② 研究の出口のイメージ

- 1) 変異にも対応できる SARS-CoV-2 のワクチンを開発します。
- 2) 心臓の起源からその薬を提案します。

キーワード

基礎研究、SARS-CoV-2 のワクチン、心臓の薬

研究の内容

疾患を進化の視点から考える分野に進化医学がある。私は進化医学をさらに遺伝子にしばり、遺伝子の分子進化から疾患を考える分子進化医学を提唱しました。

我々は分子進化医学の研究を2つのテーマで研究を進めています。

1つ目は、ヌタウナギ科乳酸脱水素酵素の研究です。遺伝子の変異が起こりやすい部位が疾患と関係している可能性について、脊椎動物の祖先型である円口類の乳酸脱水素酵素 (LDH) 蛋白質の性質は、物理的圧力をかけることによりその構造と機能に大きな特徴を示します。その性質を引き起こす部位がヒトの遺伝子疾患と同じ部位であることがわかりました。進化を引き起こす遺伝子部位は、もともと変化しやすくなっています、または変化した遺伝子が遺残すると思われる。その変化しやすい遺伝子部位が何かの原因で突然変化すると、発病すると考えています。

2つ目は、マイクロ遺伝子重合法を用いた新型コロナウイルス (SARS CoV-2) のエピトープペプチドワクチンの構築です。我々は、過去に開発した人工タンパク質創製手法 MPR (microgene polymerization reaction) を利用することで、SARS-CoV-2 の MHC I エピトープ、MHC II エピトープ、および、アジュバンドモチーフをもつ人工タンパク質を創製します。人工タンパク質にどのような性質を与える事が、最も効率よく免疫誘導ができるかを調べ、これを新しいタイプのワクチン開発につなげるのが目的です。

今後の展望

今後は円口類と新型コロナウイルスを結びつけて進化医学として遺伝子の変化する部位を進化の視点で考察し、その視点で薬を開発したいと考えています。

抗生物質耐性菌の耐性メカニズムの理論的解明と 新規抗菌剤デザインのための基礎研究



教授
額賀 路嘉

① アピールポイント

抗生物質耐性菌は、世界的問題です。耐性という現象はどのようなメカニズムで発生するのか、分子の構造という視点で解明することを目指しています。プロテインデータバンクにも多数の構造情報を登録しています。

② 研究の出口のイメージ

β -ラクタマーゼとペニシリン結合タンパク質を中心に研究を行なっています。各種ESBLと開発中の阻害剤複合体の構造解析を行なっており、その阻害メカニズムを解明しています。

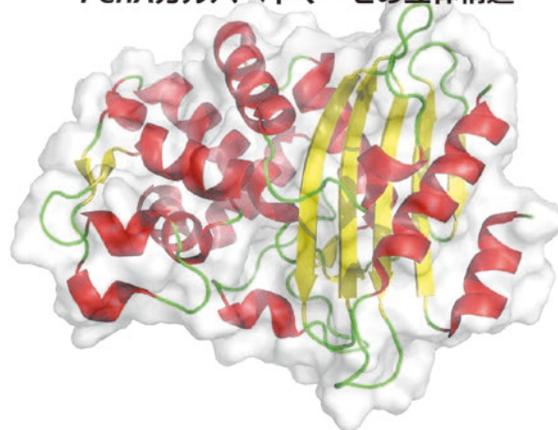
キーワード

抗生物質、耐性菌、CRE、MRSA、構造生物学、X線結晶解析、分子シミュレーション、 β -ラクタマーゼ、ペニシリン結合タンパク質、ESBL、カルバペネム、第五世代セフェム

研究の内容

最も使用頻度の高い β -ラクタム系抗生物質のターゲットであるペニシリン結合タンパク質、および、その耐性の主要因の、 β -ラクタマーゼを中心に研究を行なっています。耐性菌の産生する β -ラクタマーゼは、どんどん進化しています。自身の遺伝子に変異を組み込み、新しいタイプの薬剤をも分解可能に改変します。また、それまで自然界のどこにあったのかわからない酵素遺伝子を自身の中に取り込むなどが主要な戦略で第三、第四世代セフェムやカルバペネム剤を分解してしまう β -ラクタマーゼが身近に存在するようになりました。そのような酵素をX線結晶解析や分子動力学計算によるシミュレーションなどを使い、形や動きの変化を調べています。近年は、MRSA由来のペニシリン結合タンパク質と第五世代セフェムとの関係についても研究を進めています。

*Burkholderia multivorans*由来
PenAカルバペネマーゼの立体構造



今後の展望

市場に出ている抗菌剤の全てに耐性菌が生れていると言っても過言ではありません。細菌の作戦を科学の目で理解し、新しい抗菌薬の創成につなげることを目指しています。

消化器病態モデルにおける、胸が焼ける・腹冷えて痛む・下痢・便秘の症状と温度センサー神経増加の連関および症状改善薬の探索



教授
堀江 俊治

① アピールポイント

逆流性食道炎、潰瘍性大腸炎といった炎症性腸疾患動物モデルや、非びらん性胃食道逆流症、過敏性腸症候群といった機能性消化管疾患動物モデルを使って、ノーベル医学生理学賞2021の温度センサー神経が増加することを発見しました。

② 研究の出口のイメージ

貴社開発の消化器症状に効く一般用医薬品、機能性食品、サプリメントに、消化管粘膜の温度センサー知覚神経に対する作用（基礎データ）という科学的なエビデンスを付加し、その商品価値を高めます。

キーワード

基礎研究、胸焼け、腹冷え、下痢、便秘、逆流性食道炎、潰瘍性大腸炎、非びらん性胃食道逆流症、過敏性腸症候群、消化器症状、一般医薬品、機能性食品、サプリメント

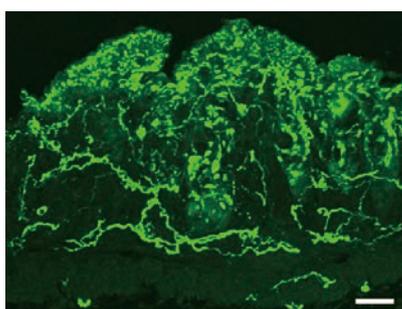
研究の内容

2021年度ノーベル医学生理学賞では、身体の温度を感じるセンサーであるTRPチャネルの発見が評価されました。主に、体の表面の知覚神経に発現して、熱いや冷たいといった温度情報を感知して脳にその情報を伝えています。

実は、消化管粘膜にも温度センサーTRPチャネルはたくさんあり、これが腹部の温度を感知しています。消化管粘膜に炎症が起きると知覚過敏が引き起こされます。胸が焼けるように痛んだり、下腹が冷えて痛んだりする痛覚過敏という症状には、TRPチャネル発現神経の数が増大することが関与していることがわかりました。また、粘膜肥満細胞とTRPチャネル発現神経の連関もわかってきました。

TRPV1チャネル発現神経や粘膜肥満細胞を減少させる薬やサプリメントが見つけれれば、このような消化管疾患の予防や普段の維持的治療にとっても有用な選択肢になります。

温度感覚を伴う痛みはTRPチャネルが関与



消化管の組織の横断面におけるTRPチャネル発現神経線維の増加：炎症が起きると、温度センサー神経の数が増えて、焼けるように痛んだり冷えて痛んだりする症状がみられる。

今後の展望

今のところ、このようなアイディアでの医薬品やサプリメントは開発されておられません。私たちはドラッグリポジショニングで、消化管粘膜の炎症を真に寛解させる薬を探索する基礎研究を行っています。

薬剤師業務のグローバル化に向けた研究



助教
溝口 優

① アピールポイント

外国人の方々が安心して日本の医療を受けられるように、薬局の多言語対応や人種差による投与量調節、世界の薬の鑑別・検索方法確立、ピクトグラムの活用等により、薬剤師業務のグローバル化を目指します。

② 研究の出口のイメージ

- ・機械翻訳を利用した多言語での患者対応を可能にします。
- ・人種差を考慮した薬物投与設計を可能にします。
- ・世界の薬の鑑別や検索方法を提供します。

キーワード

グローバル化、国際化、多言語、人種差、ファーマコゲノミクス、薬剤師業務

研究の内容

現在日本では、外国人労働者の増加や観光先進国に向けた政策の推進により、日本に来る外国の方が増えており、薬局に来られる外国人患者さんも増えてきました。しかし、多くの薬剤師にとって英語圏以外の患者さんへの対応は悩ましい問題であり、言語だけでなく、人種差を考慮した薬物投与設計についても十分な対応ができていないとも言えません。そこでわれわれは、下記のようなテーマで薬剤師業務のグローバル化を目指し研究を行っています。

1. 多言語での服薬指導対応

翻訳ツールは存在するが、医療用語を正確に翻訳できるのか、実用性が不明である。

2. 人種差を考慮した薬物投与設計

日本の添付文書には人種差に関する情報がほとんど記載されていない。

3. 世界の薬の鑑別・検索方法確立

英語以外はキーボードで入力もできない。各国の医薬品を検索する方法が不明である。

CYP2C19多型の頻度と関係する薬剤

	遺伝子多型	CYP2C19		CYP2C19で代謝される薬剤
		*2 *3 (PM)	*17 (UM)	
コーカソイド	ヨーロッパ人	15%	22%	SSRI エミトラプリリン エスチラピラム シタロプラム セルトラリン シタロピム
ネグロイド	アフリカ人	16%	17%	抗がん剤 フェナビルドタール プリミドン
	アフリカ系アメリカ人	18%	21%	オメプラゾール エソメプラゾール ラソプラゾール
モンゴロイド	東アジア人	36%	2%	NSAIDs インドメタシン タベンタドール
オーストラロイド	オセアニア人	76%	6%	SSRI クロキサロピド SSRI クロキサロピド 抗凝固薬 フルワリリン 抗血小板薬 クロロドグレル 抗真菌薬 ボリコナゾール アルキル化剤 シクロホスファミド 性ホルモン クロタスロリン カルモシタム タモキシフェン
その他	ラテン・ヒスパニック	11%	17%	
	中央・南アジア人	29%	17%	
	中東人	14%	19%	

今後の展望

薬局、ドラッグストア、病院との連携により、より実用的で持続的な外国人対応システムを構築し、全国に普及していきたいと考えております。

薬物送達システムの研究および次世代薬物投与デバイスの開発



教授
森 健二

① アピールポイント

経皮薬物治療システム（TTS）を中心とした薬物送達システム（DDS）に関する研究を行っています。企業での医薬品研究開発の経験を活かし、有効性、安全性を包括的に考えた製剤化を研究しています。またインターネットを利用した次世代の薬物投与デバイスについても検討しております。

② 研究の出口のイメージ

製剤化には主薬の他に様々添加剤が必要です。それらの使用前例を踏まえ安全な製剤を提案します。また高度な製剤には医薬品でなく、多種多様な分野との連携が必須です。電気、高分子、金属、印刷、包装、機械等との連携も考慮し製剤化に取り組みます。経皮吸収技術を生かした化粧品も検討します。

キーワード

基礎研究、製剤評価、経皮薬物治療システム、イオントフォレーシス、化粧品

研究の内容

1. 製剤研究

・薬物経皮吸収に関する研究

① イオントフォレーシス、エレクトロポレーションなど電気エネルギーを用いた物理的経皮薬物促進法に関し、基礎的知見から製剤化までの一連の研究を行っています。イオントフォレーシスを利用した製剤に関しては、これまでCalcitonin、Parathormone、水溶性ステロイド、Sumatriptanなどを、エレクトロポレーションについてはDiclofenacについて検討しました。

② 2つの固体の化合物を混合することで、低融点の混合物（イオン液体）を得ることができます。この混合物の膜透過に関する研究を行っています。

- ・坐剤の品質評価に関する研究
- ・2成分を時間差で放出する坐剤の開発
- ・貼付剤の品質評価に関する研究

2. 次世代薬物投与デバイスに関する研究

ダビンチ®などの遠隔で手術ができる医療機器やバイタルサインを感知して送信する医療機器は既に汎用されていますが、遠隔で薬物を投与できる装置は上市されていません。当研究室ではイオントフォレーシスによる投与装置をインターネット回線などの通信技術を用いてコントロールする次世代薬物投与デバイスに関する研究を行っています。

3. 化粧品の開発

イオントフォレーシスを用いた化粧品の開発を行っています。過去には商品化に至った開発もあります。

今後の展望

製剤化は医薬品を上市するための最後の基礎研究で、最も最終製品に近いものです。DDSの概念を主眼に有用性の高い製剤の開発を目指します。



深共晶溶媒を用いた抗体フラグメントの経皮的投与方法の開発



教授
大森 直哉

① アピールポイント

常温で液体の塩（えん）である深共晶溶媒は、様々な物質を溶解させることができ且つ配合比を改変することで容易に調整可能であることから、水や有機溶媒に代わる第3の溶媒として電池・環境・医学など幅広い分野での応用が期待されています。深共晶溶媒を用いた皮膚からの抗体医薬品の投与方法の開発は、患者さんのコンプライアンス向上に繋がると考えています。

② 研究の出口のイメージ

服薬コンプライアンスが悪い医薬品の投与経路変更が可能になると考えています。

キーワード

免疫抑制、抗体医薬、深共晶溶媒

研究の内容

抗体を経皮的に投与するための組成物の創成と皮膚移植への応用について研究しています。深共晶溶媒は常温で液体の塩であり医薬品への応用が期待されています。深共晶溶媒は皮膚浸透促進作用を示す一方で、その強いタンパク質変性作用のため生物製剤への応用が困難でした。

そこで抗体の変性を抑制する添加剤を含む『抗体・イオン液体組成物』の処方について検討を行いました。本研究の進展により、注射による投与しか方法がなかった抗体医薬品を皮膚に塗布して投与できるようになることが期待されます。

今後の展望

インスリンなどのタンパク質医薬品の経皮的投与方法について検討していきたいと考えています。

免疫抑制活性を有する抗体の 敗血症(炎症疾患)治療薬としての可能性評価



教授
後藤 武

① アピールポイント

敗血症は、細菌による感染を発端として、細菌が産生する毒素が全身に拡がり、多臓器不全、血圧低下、ショックなどの症状を引き起こす重篤な全身疾患で、罹患後の致死率は3割にも上ります。敗血症に対する特効的治療薬は未だになく、治療薬が上市されれば毎年数十万人の命を救うことができます。

② 研究の出口のイメージ

in vivo (動物実験) での薬効は確認済みであり、今後医薬品開発へ向けた抗体のヒト化や安全性試験を経て、臨床試験を行う必要があります。また、炎症疾患の重症化を予測する診断薬としての展開も可能です。

キーワード

敗血症、免疫抑制、炎症疾患治療剤、モノクローナル抗体、ペプチド抗原

研究の内容

研究対象としているモノクローナル抗体は、炎症病態の悪循環を促進するヒストンをブロックすることによって炎症の増悪を抑制します。敗血症モデル動物を用いた実験において、本モノクローナル抗体は、顕著な炎症疾患治療効果を示し、単独投与で有意に死亡を回避し、救命効果が認められました。また、本モノクローナル抗体と反応するペプチド断片を投与することで誘導される免疫でも同様な効果が確認されています。

尚、本モノクローナル抗体は、研究用として安定的に供給可能です。

今後の展望

炎症性疾患に対する効果が期待できることから、臓器移植拒絶反応の抑制、虚血再還流障害の予防、リウマチ、アレルギー疾患の治療などへの可能性も評価していきたいと考えています。

看護・理学療法・福祉



福祉領域における人材育成 —グループを活用した学びのあり方—



准教授
小川 智子

① アピールポイント

対人援助専門職の人材育成において、授業や研修などでグループワークを活用した学びは、知識の増加だけではなく、自身の取り組みの意義を実感できる側面があります。ソーシャルグループワークの理論などを活用し、そのあり方を探索しています。

② 研究の出口のイメージ

対人援助に関する人材育成の場において、テーマを設定し、グループワークを行い、参加メンバー同士の交互作用を通して、学びの質を高めることを目指しています。

キーワード

福祉領域、対人援助専門職、人材育成、ソーシャルグループワーク

研究の内容

グループワークを活用した学びは、グループに所属する個々のメンバーが、グループ活動での他者との相互作用経験を通して、自身の成長だけではなく、環境における諸課題に対処できる力を養うものです。その場合に、グループをファシリテートする、ファシリテーターのグループへのサポートが重要となります。本研究では、ソーシャルワーク領域のグループワークと教育学領域の協同学習の要素に基づき、活動・目標・手順を整理しました。大学の授業形態の一つである演習では、グループ指導の枠組みと特性を活用した指導を実践し、そのあり方について研究を続けています。

グループ指導の枠組み	グループ指導の特性
活動	個人メンバーとグループ全体との相互作用経験
目標	環境で生じる課題に対処できる力の養成
手順	(1) 個人メンバーとグループ全体の達成目標の設定 (2) グループ内でメンバーが使う技術の事前指導 (3) グループ活動の経過観察 (4) 個人メンバーが課題に取り組めるような技術の指導

今後の展望

今後はさらに、ファシリテーターの機能とグループを活用した指導効果の両面から研究を深めていきたいと考えています。

海洋ゴミの造形やアート利用の可能性についての調査研究



助教
川瀬 カ也

① アピールポイント

ゴミの素材としての表現の可能性を考えています。ゴミ単独の表現には限界があるため、何かと合わせることによる可能性を考えています。

② 研究の出口のイメージ

環境問題を扱いながら、興味や関心を引く制作につなげ、美しさやデザイン性のあるものを生み出していきたいです。

キーワード

幼児造形、環境、アート

研究の内容

現段階では学生とともにビーチコーミングなどを通じて、海洋プラスチックなどのゴミの種類とその可能性について調査。入手できた材料の造形利用法を考え、加工や研磨、接着やレジンなどを使い表現法を模索しています。ゴミがゴミとして残るのではなく、付加価値やアート性やデザイン性のあるものを生み出せるような可能性を考えていきます。



今後の展望

今後のフィールドワークで可能性を模索し様々な形としていき、幼児の環境・表現教育にも繋げていきたいです。



保育園経営における保育の質並びに 環境デザインの在り方についての研究



教授
倉田 新

① アピールポイント

保育は国家の未来を左右する大きな要であることが先進各国ではすでに認識され、財政的にも質的にも豊かであるのに比べて、日本では未だ社会的な位置づけや質が発展途上の域を脱していません。経営を含めて保育の総合的デザインについて研究します。

② 研究の出口のイメージ

様々な自治体で民営化が進んでいますが、保育の質をさらに向上させるためには何が必要なのか、保育のデザインは未来の日本をデザインするものであるという視点から行政支援、相談、コンサル等、協働しながら新しい時代の保育をデザインします。

キーワード

保育所・幼稚園経営、保育所民営化、保育の質の向上、待機児問題、育児支援、保育所設計、幼児教育、認定こども園、園庭デザイン、食育食農、医療的ケア、障がい児保育、キャリア教育、経営コンサルタン

研究の内容

子どもの最善の利益を中心に据えながら、質の高い保育の総合的な企画、デザイン、運営について研究しています。常に先駆的、開拓精神を持ち、新しい取り組みを模索しています。16の認可施設を運営しながら実際に起きる様々な問題について、学際的に分析して問題解決の糸口を探しています。行政や社会福祉法人、企業のコンサルとしても保育のデザインの在り方を提唱し、社会的な役割を果たしていきま。また職員の人事問題、人事考課の在り方経営のノウハウを研究の結果からアドバイスしていきま。



たかすな保育園建設工事総合監修



南八幡さくら保育園



神地保育園



東金国際こども園建設イメージ図、令和6年開園のこども園を総合監修。地域・国際交流など様々な仕掛けをデザインしています。

今後の展望

高い保育の質を持った保育所運営を更に拡大して日本の保育の質の向上と未来への責任を果します。そのために様々な分野から専門家とチームを作り、協働して新しいプロジェクトを推進していきま。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



地域づくりにおける文学館の役割



助教
姜 東星

① アピールポイント

日本の文学館の事例研究を通して、文学的な要素に基づくまちづくりの魅力を明らかにすることを目的としています。地域観光地づくりの根底に据えるキーワード「交流すること」、「心のふれあい」を文学館の役割に結び付けて探るころみです。

② 研究の出口のイメージ

文学館の生成は、能動的に故郷へ反哺（恩返し）すること、また、文学精神の継承は地域づくりの精神風土に貢献していくという、文学館の「内発型のものとなる」（野田邦弘，2014：221）地域づくりの取り組みを明らかにします。

キーワード

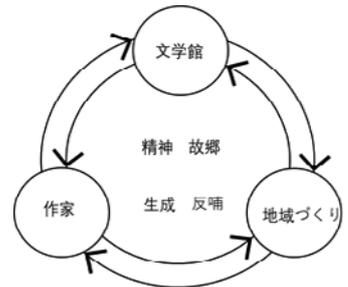
文学館、作家、地域づくり、相互生成、反哺（恩返し）、精神、故郷

研究の内容

文学館は「文学を通じて学び合いの場」、「相互の交流の場」、「教育・研究拠点としての場」、「作品を底流する作家の精神」（坂口安吾）の掘り起こしの「場」、さらに、一連の文学資源の意味が再発見される「場」としての文学館の本質的な価値を探ることこそが本研究の一つの目的です。

文学館は作家の郷土記憶を地域に深く入り込ませ、文学に親しみ、人々の心の中に根強く入り込んだ役割を果たしています。作家と故郷との関係は文学館を通じて相互に結び合っています。それをめぐって、文学館と文学散歩、文学碑めぐり、句碑めぐり、然るに、「文学のまちを歩こう」というコンテンツの創出は、その地の歴史、文化、芸術に対する理解を深め、誇れるものを醸成するとともに、その目に見えない故郷への誇りと愛着が育まれています。それは、現地の文化、さらに、「日本の文化を再認識することにも」（ハラルド・マイヤー，2017：1）深くつながっていると考えられます。

また、作家、作品舞台を含め、読まれている文学作品を共に共有する文学館は、地域の精神性への掘り起こしの一つのつなぎとして、能動的に地域に対する反哺をしています。精神性と地域文化振興は直接間接的に、地域の独自性としての「光」を見る大きな捉え方として、今日的意義を解釈します。



今後の展望

文学館は地域づくりの一つとしても重要な場所であり、広い意味で生活の中に文化定着として、一つの要素として形成されました。文学館の作り方、立地、どのように地域の歴史、文化、風俗等に繋げるのか、今日にあって、文学資源の要素の考えは重要です。文学館の利用、文学資源の活用、文学資源を地域づくりに応用する課題はさらに相互生成の視点から広く考察する必要があります。今後この課題の共同研究に取り組むことを期待しています。



児童虐待予防に資する社会資源としての 児童館における相談援助機能の可能性の探究



教授
所 貞之

① アピールポイント

地域における児童虐待対策の整備拡充が進捗する現在、児童に遊びを提供する施設としての地域児童館が利用児童やその家庭が抱える問題の早期発見・早期対応の役割を果たす意義と可能性を探っています。

② 研究の出口のイメージ

既存施設としての児童館が相談援助機能を果たすことの必要性を明らかにすることができれば、地域における子どもや子育て家庭に対する包括的支援の実施体制の強化を図ることができるものと考えます。

キーワード

児童虐待対策、児童館、地域、社会資源、相談援助機能、包括的支援

研究の内容

2021年度には、「令和3年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（国庫補助事業）」の『児童館の運営及び活動内容等の状況に関する調査研究』の研究委員として、全国の児童館の実態調査の分析に携わらせていただきました。地域に根差した児童福祉施設としての実態を明らかにすることにより、児童館施策の課題がみえてきました。コロナ禍にあって開館日数や利用人数が減少する中、地域に向けた多種多様な取り組みが展開されてきたことがわかりました。しかし一方では厚生労働省の「児童館ガイドライン」に掲げる児童館の機能としての「子どもと子育て家庭が抱える可能性のある課題の発生予防・早期発見と対応」すなわち相談援助機能については十全とはいえません。そこで、現状では、地域において児童館が相談援助機能を果たすことの阻害要因や必要条件を質問紙調査や聞き取り調査から明らかにすることを目指しております。

今後の展望

地域児童館が遊びの提供機能にとどまらず、相談援助機能を果たす包括的支援の社会資源となる可能性を探るべく量的・質的調査による研究を進めます。

介護実習の最終実習段階までに必要な能力を身に付けるためのルーブリック評価指標の開発



准教授
林 和歌子

① アピールポイント

実習の「目標は何か」「できたことは何か」「できなかったことは何か」「残されている課題は何か」を可視化できるルーブリック評価指標を開発しました。

② 研究の出口のイメージ

忙しい職員の勤務体制でも、施設の実習指導者間で共通の指導目標をもつことができ、何をどこまで指導できているか、指導状況を共有することができます。実習生への指導もスムーズに行うことができます。

キーワード

介護実習、実習評価、ルーブリック

研究の内容

ルーブリックとは、実技や作品などを評価するパフォーマンス評価の一つで、学習到達状況进行评估するための評価基準のことです。近年、評価者と学習者が共に学習目標や判断基準を認識できるものとして注目されています。特にペーパーテストでは、評価が困難な能力や態度の評価に向いているといわれています。評価基準が定められていることから、実習のように複数の人が評価を行う場合に、評価者間のバラつきが少なくなることや到達度も意識しやすいと注目されています。

複数回の実習経験を積み重ねて一定の能力を身に付ける介護実習において、どの段階においても活用できる評価指標を開発しました。実習施設や利用者によって学習進度が異なることもありますが、評価指標によって施設の実習指導者と実習生、教員が最終的に目標とする能力を共有することができます。そのうえで「できたこと」「できなかったこと」、そして到達目標までに「残されている課題」を可視化することができ、最終段階まで継続して活用することができます。

ルーブリックを用いた介護実習評価指標(一部)

評価項目	評価基準				
	評価観点(目標)	専門職に必要な基礎能力が身に付いていない	専門職に必要な基礎能力が身に付いている	専門職に必要な能力が十分な基準に達しつつある	専門職に必要な能力を十分に身に付けている
利用者の理解	(1)利用者との関係作りができる	基礎的な能力のレベルまで達していない	①利用者や職員の名前を覚えることができる。 ②挨拶や自己紹介など、実習生自ら話しかけることができる	③不特定多数の人と関わることができる。 ④利用者に合わせてコミュニケーションができる。	⑤利用者のあるがままを受容することができる。 ⑥利用者との双方向のコミュニケーションができる。

今後の展望

日々変化する利用者ニーズに合わせてより効果的な実習を行うために、評価指標の見直しを常に行っています。さらにこの評価指標を学内の授業で活用し、効果的な学習方法の展開について研究を行っています。



認知症の方の施設サービスにおける「思い」や「考え」等の情報把握に向けた研究（アセスメントにおける情報把握・意向把握）



助手
松浦 弘典

① アピールポイント

認知症の方は、認知機能の障害により自身の思いや考えなどを他者に伝えることが難しいと言われていました。しかし、介護職員など周囲の支援者による信頼関係の構築や意思決定支援といった関わり方の工夫で、本人の「思い」や「考え」を引き出せることが期待されます。

② 研究の出口のイメージ

科学的根拠に基づいた、認知症の方の「思い」や「考え」を引き出すコミュニケーションは、すべての分野における対人サービスの価値を高めます。そして、この取り組みは貴社の社会貢献にも繋がると考えます。

キーワード

認知症、施設サービス、介護職員、情報（意向）把握、信頼関係の構築、意思決定支援

研究の内容

これまで、養護老人ホームや認知症高齢者グループホームの介護職員が行う情報把握や意向把握の方法について調査してきました。その結果、介護職員は利用者の方（認知症に罹患していない方も含む）から施設サービス（食事や入浴、排泄、余暇活動など）に対する思いや考えを「観察」と「聞き取り」により把握していることが明らかとなりました。特に認知症の方の情報把握では、思いが表明しやすくなるように、①ジェスチャーを交えながら質問する、②2択から選べるような質問をする、③例えば飲み物を提供する際に実物を提示して質問する、④ゆっくり、はっきりと相手に伝わる声で質問する、⑤相手が質問内容を理解できているか言動を観察する、⑥相手が回答するための時間を十分設けるなど関わり方を工夫していることがわかりました。また、介護職員は、日常的に利用者の方とコミュニケーションを図ることで信頼関係が構築できるように図っていました。日本は、今後ますます認知症の方が増えていきます。このような介護職員の関わり方は、認知症の方に関わる全ての方に対しても役立つと考えます。認知症の方が住み慣れた地域で安心した生活を送るためにも重要です。

今後の展望

今後は、調査対象数を拡大し、より認知症の方から「思い」や「考え」を引き出すことができる支援方法を明らかにできればと考えています。そして、福祉分野のみならず、他分野においても応用できることを目指しています。

体表からの膝関節および後足部アラメント計測に関する研究



教授
大西 忠輔

① アピールポイント

ヒトの足部や下肢の形状は様々です。実際に詳しく個人の骨格の特性を知るにはレントゲン撮影が必要となり、被爆の危険性もあります。私の研究では、レーザーやデジタル画像を用いて安全に身体特性を明確にする方法を発見しました。

② 研究の出口のイメージ

変形性膝関節症は下肢の変形を特徴とする高齢者に多い疾患の一つです。変形性膝関節症が重症化して初めて病院受診する方が多いため、レントゲン撮影に頼らない方法でのスクリーニング検査法を確率することを目指します。

キーワード

体表から下肢アラメント計測方法、変形性膝関節症およびスポーツ障害予防、インソール、3Dプリンター

研究の内容

足部に対しては、レーザーを用いた方法で踵の傾きを計測する方法を開発しています。また膝の変形の程度を体表のランドマークから計測を行う方法を開発し、レントゲン撮影と高い相関があることがわかりました。また、下肢のアライメントの計測データを元に個人の症状や歩行の癖に合わせたオーダーメイドのインソールを3Dプリンターで作る方法を研究しています。

3Dプリンターでのインソール製造方法においては、企業と連携の元に特許を取得しています。(特許第7075032号)



今後の展望

変形性膝関節症に対して下肢アライメントの観点から地域におけるスクリーニング方法の開発を行いたいと思っています。また、3Dプリンターで膝や足部の負担を軽減するインソールを作ることで、障害予防や少しでも快適に歩ける方法を提案したいと考えています。



物理療法が身体機能（痛み、関節の可動性、筋力、筋の弾性など）に与える影響に関する研究



教授
烏野 大

① アピールポイント

電磁エネルギー・音響エネルギーなどの物理的エネルギーが、感覚機能（触覚、痛みなど）や運動機能（関節の可動性、筋の収縮など）に影響を与えることで、身体機能を変化させることを解析しています。

② 研究の出口のイメージ

物理的エネルギーの有効活用が分かると、リハビリテーション、スポーツケア、健康増進などの幅広い分野での活用が期待されています。まだ未知な部分が多い分、その可能性も大きくあります。

キーワード

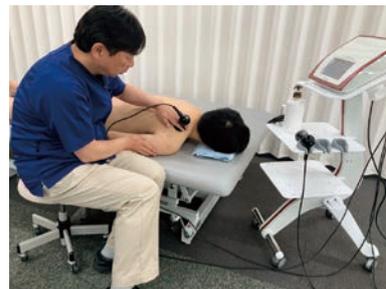
基礎研究、運動器疾患（五十肩、腰痛、膝痛、頸部痛など）、中枢性疾患（脳卒中）、ラジオ波療法、超短波療法、超音波療法、寒冷療法

研究の内容

体外から電気エネルギー・電磁エネルギーや・音響エネルギー・力学的エネルギーなど物理的エネルギーを身体に加えることで、感覚神経や運動神経に与える影響が分かっています。ただし、エネルギーの与える方法や適切な量については、まだ不明な部分があります。動物を用いた研究では明らかになっていても、人を対象とした研究では未確認であることも多々あります。運動療法や徒手療法とは異なり、物理療法では、1秒間に何十～何百万回の刺激を加えることができます。これにより、神経の活動を抑制したり、筋の収縮を促したり、筋の硬さを柔らかくしたりすることができます。現在は、ラジオ波に近い周波数（300～500kHz）を使用して、筋機能に与える研究を実施しています。



肩関節にある筋の一部が断裂して、肩関節が十分に動かない状態



ラジオ波治療器によって肩関節にエネルギーを与えていることで、上図のような状態から回復させる可能性を模索している

今後の展望

ラジオ波療法については、基礎的な研究を進めているところです。今までの物理療法とはエネルギーの伝達の仕方が違うことが考えられており、今後、どのような研究成果がでるかが楽しみな物理的エネルギーの1つだと考えています。



人工関節術後における患者満足度に影響する歩行因子の探索と歩行改善プログラムの構築



助教
栗原 靖

① アピールポイント

近年、リハビリテーションにおいて、患者満足度など患者さんの視点に立つ評価（患者立脚型評価）が重要視されています。これまで、人工膝関節・股関節を実施した患者さんの患者立脚型評価に影響する歩き方を示してきました。

② 研究の出口のイメージ

発見した歩き方をもとに、患者立脚型評価を高めるリハビリテーションプログラム（歩き方の改善）を作成します。

キーワード

人工関節、歩行分析、リハビリテーション、患者満足度

研究の内容

対象は、膝関節および股関節の人工関節手術をする患者さんとなります。手術前、退院時、手術後半年以上経過後に、3次元歩行解析システムを用いた歩行分析を行います。3次元歩行解析システムとは、体に赤外線反射マーカを貼付し、赤外線カメラで取り込んだ疑似的なヒトモデルを用いて、関節の動きや関節に生じる力を計測できるシステムです。

患者さんの歩き方は様々ですが、ある指標で数値化した患者満足度に影響するポイントが、歩き方の中で存在することがわかってきました。現在、手術した部位だけではなく、手術していない側の下肢の動きも含めた影響を検討しています。

この成果により、患者さんの満足度を高めることに特化したリハビリテーションの着目点（歩き方の着目点）を明らかにしていくことができるのではないかと考えています。

今後の展望

得られた結果をもとに、新たなリハビリテーションプログラム（歩き方の改善プログラム）の開発に着手し、患者さんの満足度の高い人工関節の手術に役立つ基礎研究を行っていきます。

COVID-19の体制下におけるICTを用いた 理学療法士の臨床能力向上のためのテレ臨床実習プログラム



准教授
桑江 豊

① アピールポイント

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が懸念される地域において臨床実習の中止が相次ぐ中、臨床実習を補完するため、Zoomを用いて教員・学生・脳卒中当事者の三者を繋ぎテレ臨床実習を行いました。

② 研究の出口のイメージ

感染状況に左右されない実習経験、疾病後の障害を有する方の新しい就労としての患者モデル事業、ICTプラットフォームの拡大と教育・地域・企業の三者にメリットが得られます。

キーワード

臨床実習、オンライン、ICT、テレリハビリテーション

研究の内容

当事者4名をモデルに起用し、1名を複数学生で担当しました。当事者の医学情報を事前に学生に提示し、その情報を元に学生同士で理学療法評価の具体的な実施方法を計画しました。テレ臨床実習では学生が当事者に対して問診・視診を行い、立ち会いの担当療法士から触診結果やテスト結果を収集して評価を行いました。評価結果を元に教員・学生・担当療法士でディスカッションを行い当事者の病態理解を深めました。

テレ臨床実習では学生の振る舞いを参加者全員で観察でき、成功失敗体験を共有しやすく、臨床技能の補講や指導方法の統一が図りやすいと考えます。反面、Zoomの操作やテレ臨床実習の実施手順の不慣れは満足度低下の一因となります。対面と比べ圧倒的に情報量が少ないため、音声と視覚情報だけで他者と共通理解を図るには、より丁寧な実施手順の指導とファシリテーターである教員・療法士のICTスキルが求められます。

患者モデルの脳卒中当事者からは、『障害を持ってからの就労は大変なことで、以前のようにはいかず希望する仕事ではないことも多々あります。迷惑掛けないか、負担にならないかと考え仕事に就くことを躊躇してしまいます。しかし今回のように、私達でしか出来ない、体験を話すことで誰かのお役に立てると思える、報酬を得られるのは本当に嬉しいことで、自己信頼の回復にも繋がります。それが、仕事になるなら未来に希望が持てます』と新しい就労に対して期待感を抱く結果につながりました。

今後の展望

Zoomを始めとするテレビ会議システムでは奥行き認知が得にくいため、3Dスキャンによる空間座標と実際の患者当事者を組み合わせたAR環境による実装の検討を将来の展望とします。患者モデルとしての障害を有する者の束金を中心としたコミュニティーを形成していきます。



高齢者・障害者のための住宅改修ユニットのモジュール化に関する研究



准教授
桑江 豊

① アピールポイント

設置工事に専門的技術を必要とせず、既存の空間に簡便に設置することを可能とし、入院・入所中からのリハビリテーション訓練を支援し、在宅での障害者の自立もしくは介護者の支援を実現する、住宅改修用ユニットをモジュール化するキットを開発します。

② 研究の出口のイメージ

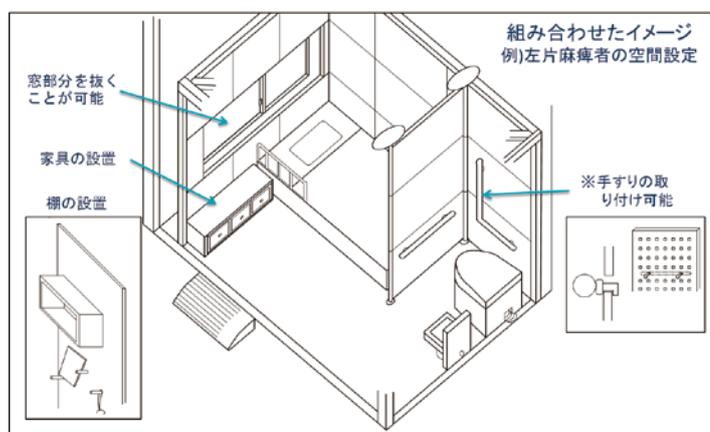
手すりの設置や導線の確保等、状態像にあわせて場所を選ばず躯体も傷つけずに空間アレンジを自由にできるといったメリットを提供できます。住宅改修は対象者自身の活動性の向上に加え、介護者の身体的負担や精神的負担の軽減につながります。

キーワード

住宅改修、ユニバーサルデザイン、介護保険

研究の内容

成果として、基本的な仕様を検討し、既存の家屋の躯体を傷めることなくパネル及び支柱にて空間を創出しパネル面に手すりや家具、窓の設置を可能な構造とし大掛かりな工事を必要としないものが適当であると考えました。また、既存の天井支持型パネル及び手すり等入手し予備的に仮空間を設定し、トイレ、居室等の活動場面に応じた仕様の検討をしました。これを反映させるかたちでメーカー等への提案に向けた、居室及び浴室の標準的なデザインを図示するに至っています。



今後の展望

- ① トイレ、台所、玄関等の活動場面に応じた仕様の検討
- ② モジュールの設計（基本性能、安全性能）と有用性の評価
 - ・ プロトタイプ製作
 - ・ フィールドテスト



高齢者の転倒回避動作の運動力学的特性とそのトレーニング方法



教授
竹内 弥彦

① アピールポイント

要介護状態になる要因として高齢者の転倒が挙げられます。転倒を防ぐ、または転倒しても外傷をできるだけ軽減するために重要な姿勢反応であるステップング動作について、高齢者の運動特性を明らかにしました。これらの知見を基にしたトレーニング方法を提案し、地域での体操教室などでご活用いただき、その効果検証にも関わらせていただきたいと思います。

② 研究の出口のイメージ

自治体が主体となり構築が進められている地域包括ケアシステムにて、住民が運営する「通いの場」での介護予防体操等でエビデンスを基にした運動プログラムを提供することが可能となり、介護予防事業の効果を高めます。

キーワード

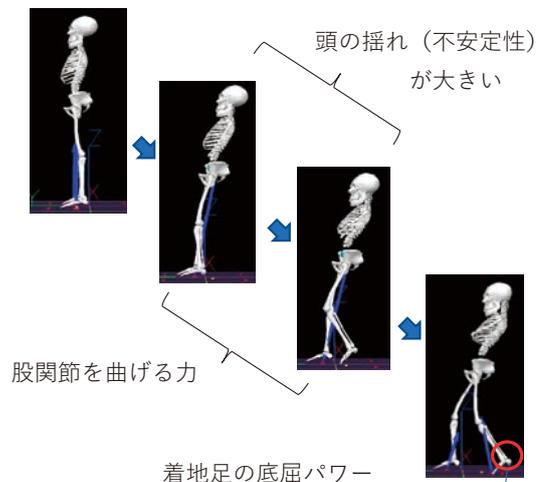
高齢者、転倒回避動作、運動学・運動力学的特性、介護予防、トレーニング方法、トレーニングの効果検証

研究の内容

立位姿勢にてバランスが崩れた際に、転倒を防止する重要な姿勢反応に一步足を踏み出して身体を支えるステップング反応があります。高齢者では、このステップング反応がうまく出現せずに、しりもちをついて腰椎を骨折したり、腰の側方が地面に衝突することで大腿骨の頸頸部を骨折してしまうことが多くあります。

これまでの研究結果から、高齢者のステップング反応の特性として、ステップした足部が着地する際に、爪先を軸として踵を地面に着地する際に発揮する力（下腿三頭筋の遠心性収縮による足関節の底屈力）が弱いほど、足部が地面に着地した際に、身体重心が側方向へ大きく揺れてしまう、つまり、横方向へ転倒してしまう可能性があることが明らかになりました。

これらの研究から得られたメカニズムを基に、姿勢が崩れた際に、姿勢を保つためのトレーニングやステップ着地時に足関節の底屈力を適切に発揮するためのトレーニング方法を考案しました。



高齢者の後方ステップング反応の特性

今後の展望

上記の研究結果をベースにした転倒予防トレーニングを考案し、住民が主体で運営する「通いの場」における体操教室などでご活用いただき、経時的なトレーニングの効果検証や認知機能を含めた転倒回避動作との関連性について更なる基礎研究につなげていきたいと考えています。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



脳卒中片麻痺者の「咬合」と歩行能力への影響 —簡易的マウスガードの開発に向けて—



教授
谷内 幸喜

① アピールポイント

脳卒中片麻痺者に対し、「咬合」状態を変化させることで、歩行能力が即効的に向上することを突き止めました。

*咬合が脳卒中片麻痺者歩行に及ぼす影響を調べた研究はあまりありません。

② 研究の出口のイメージ

咬合状態と姿勢との科学的なエビデンスを付加するとともに、日常生活において、咬合状態を変化させるための「簡易的マウスガード」を、歯科医師またはメーカー等の協力を得ながら開発したいと思っています。

キーワード

脳卒中片麻痺者・咬合・歩行能力・マウスガード

研究の内容

脳卒中は脳の細胞がダメージを負うことで、体の麻痺や感覚の障害、脳に障害が残る可能性があるため、発症後治療（リハビリテーション）しても後遺症が残ることが少なくありません。そのため、退院後も介護保険等を利用しながら日々、リハビリテーションに取り組んでいる脳卒中片麻痺者は数多くいます。

脳卒中片麻痺者から「リハビリ直後は調子が良いのだが、夜や朝起きて直ぐは、思うように歩けない」といった声をよく聞きます。

我々は、日常生活の中で即効的に効果の出る「何か」はないか??悩んだ挙句、脳卒中片麻痺者の「咬合」能力にたどり着きました。

現在まで行っている研究内容（結果）

顎口腔系に問題のない脳卒中片麻痺者に対し、厚さ3mmのマウスガードシートを噛んでいる状態での歩行を分析

- ①歩行速度・ケーデンス・麻痺側歩幅の有意な増加……………歩行能力指標の向上
- ②麻痺側立脚期時最大足底圧力の有意な増加……………麻痺側への荷重効果
- ③左右変動幅の有意な低下……………歩行時における左右差の改善

以上のことから、咬合は、脳卒中片麻痺者の歩行バランス・歩行機能に影響を与える可能性が示唆されました。

今後の展望

咬合と姿勢（立位姿勢）との関連性は必要不可欠だと考えております。

*マウスシートの内容に関しては、我々のこれまでの見解とともに、歯科医師またはメーカー等からご助言を頂きたいと切願しておりますので、何卒宜しくお願い致します。



運動器系リハビリテーションにおける 物理療法と運動療法のハイブリッド治療の開発および効果検証



准教授
森下 勝行

① アピールポイント

リハビリテーション対象障害の上位に挙げられる「痛み」・「関節可動域制限」・「筋力低下」などの問題に対して理学療法的主要な治療方法である「物理療法」と「運動療法」を効果的に複合したハイブリッド治療の開発および効果検証を進めています。

② 研究の出口のイメージ

貴社開発のリハビリテーション機器（物理療法機器・運動療法機器）に、痛みや関節可動域、筋力の改善を裏付ける科学的根拠をヒト健康者を対象とした基礎的データにて付加し、その商品価値を高めます。エビデンスに基づく物理療法や運動療法、ハイブリッド治療を目指します。

キーワード

物理療法、運動療法、ハイブリッド治療、痛み、関節可動域、筋力

研究の内容

痛みと関節可動域、筋力の改善に向けた効果的な物理療法と運動療法のハイブリッド治療を開発するため、超音波や電気刺激などの物理療法とストレッチングや筋力増強運動などの運動療法を併用し、その有効性を検証しています。

【インターベンション（介入）】

①物理療法

温熱療法（超音波・ラジオ波・ヒートパック等）、電気刺激療法（経皮的電気神経刺激・神経筋電気刺激等）、振動刺激療法、拡散型ショックウェーブ療法

②運動療法

ストレッチング、筋力増強運動

【アウトカム（評価）】

①痛み

主観的・客観的疼痛検査を複合しながら多角的に「痛み」を分析

②関節可動域

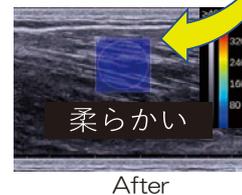
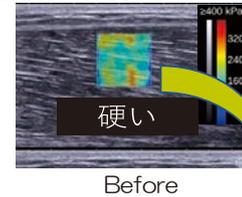
筋・関節の硬さ（右図）や感覚の変化を複合しながら「関節可動域」を分析

③筋力

筋が発揮する出力（質）と形態（量）の変化を複合しながら「筋力」を分析



◆ 骨格筋の硬さ評価



超音波エラストグラフィ法：
骨格筋に対する超音波やラジオ波の照射、ストレッチング、筋力増強運動などによる筋の硬さ変化も評価可能です。

今後の展望

運動器疾患に頻発する「痛み」・「関節可動域制限」・「筋力低下」に対するハイブリッド治療の最適な治療条件を確立するため、ヒトを対象とした基礎的研究を継続していきます。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



スポーツ活動が身体機能に及ぼす影響を多角的に探索する



教授
森藤 武

① アピールポイント

子供から大人まで、スポーツ選手のメディカルチェックを行い、怪我の起こりやすい身体機能の低下や問題をお伝えさせていただきます。

② 研究の出口のイメージ

各ライフステージのスポーツ選手において、怪我をしやすい身体機能の特徴や問題を示し、怪我を起こしにくい身体づくりをサポートします。

キーワード

スポーツ選手、傷害予防、投球障害、野球肘、ライフステージ

研究の内容

スポーツ活動は、それぞれ特有の身体運動を繰り返すことで、幼少期より特定の関節、筋、靭帯などに長期間のストレスを与えており、これはライフステージを通じてスポーツを楽しむことを阻害する恐れがあります。そのため、スポーツ選手においてもライフステージにあった評価やトレーニングが必要になってきます。これまで、私たちは野球選手を中心に、スポーツ傷害予防の研究を行ってきました。例えば、肩を捻る可動域は、投球時に肩をしならせるための重要な要素となります。しかし、野球選手は、繰り返しの投球動作によって、投球側の肩関節を外側に捻る（外旋）の可動域が増大、内側に捻る（内旋）の可動域が減少し、肩や肘の投球傷害につながると報告されています。しかし、私たちが成長期の野球選手でおこなった研究では、逆に肩関節外旋の可動域が減少し、また、肩を捻る可動域全体も減少することが分かりました。

この結果から、成長が終了している成人と成長期の学生達では身体機能の特徴に違いがある可能性があります。今後、人生の各ステージにおける身体機能の違いなどや傷害・障害の特徴について研究を進めていきたいと考えています。また、図は肘関節の緩みを超音波を用いて計測した画像ですが、このような機器を用いて関節の傷害の評価なども進めていきたいと考えています。



腕尺関節裂隙

今後の展望

野球やそれ以外のスポーツにおいて、できるだけ多くの選手のメディカルチェックなどを行い、「怪我をしているスポーツ選手」と「していない選手」との選手との身体機能の違いについて明らかにしていきたいと考えています。

喘息患者に対する呼吸リハビリテーションの適用と効果検証



助教
山根 主信

① アピールポイント

喘息は世界的に罹患者の多い疾患であり、慢性炎症を特徴とし、患者の日常生活を著しく制限する疾患のひとつです。薬物治療で症状が安定していても、Quality of Life (QOL) が損われている患者も多く、非薬物治療のひとつとしての呼吸リハビリテーション（呼吸リハビリ）は患者にとって興味深いものです。

② 研究の出口のイメージ

呼吸リハビリは主に慢性閉塞性肺疾患（COPD）という呼吸器疾患でエビデンスが確立されていますが、喘息患者が呼吸リハビリをうける機会は限られています。この研究では喘息患者へ呼吸リハビリを実施し、その効果検証を行います。

キーワード

呼吸リハビリテーション、気管支喘息、呼吸練習、Quality of Life

研究の内容

COPD患者で有効性が示されている呼吸リハビリテーションプログラムを気管支喘息患者に適用し、患者およびその家族のQOLを改善する手段となり得るか、その効果を検証します。

対象
喘息の診断で呼吸リハビリテーション処方のある患者

方法
対象患者へ呼吸リハビリテーションマニュアルに従い、患者教育、呼吸法指導、運動療法を実施します。
呼吸リハビリテーションの実施期間は1～3ヶ月とします。

呼吸リハビリテーションの開始時と終了時に、呼吸機能検査や気管支喘息QOL調査票を用いた評価を行います。



今後の展望

喘息は、気道炎症により呼吸器系の防御機能が弱まり、感染リスクが高いと考えられています。また、喘息児では運動誘発喘息により身体活動（体育など）に制限がかかる場合があります。理学療法士として成人喘息患者や喘息児のQOLを高める方法を確認するための研究を行っていきたいと思っています。



ウィメンズヘルス理学療法 —骨盤底筋トレーニングとその効果について—



准教授
横井 悠加

① アピールポイント

妊娠・出産は女性の身体に大きな影響を及ぼしますが、その影響は産後数十年経過した後にも現れます。多くは骨盤底の機能障害に起因するため、適切な骨盤底筋トレーニングにより、これらの症状を改善することができます。

② 研究の出口のイメージ

骨盤底筋トレーニングの鍵は「継続すること」ですが、ただ運動するだけでは継続のモチベーションが湧きません。そのような場合にトレーニングデバイスを用いて運動を継続させることで、より高い効果が期待できます。

キーワード

ウィメンズヘルス理学療法、骨盤底筋トレーニング、尿失禁、骨盤臓器脱、妊娠、出産、分娩

研究の内容

分娩による骨盤底への負荷は、その後、尿失禁のような骨盤底機能障害として現れます。これらの症状に対する保存的治療の第一選択として、骨盤底筋トレーニングが推奨されていますが、本邦におけるトレーニング実施率は非常に低く、「継続することが難しい」ということがわかります。

そこで、骨盤底筋トレーニングをサポートするデバイスを使用することで、トレーニングに対するアドヒアランス（遵守）を高め、骨盤底筋トレーニングの効果を高めることができるのか、検証しています。

尿失禁改善のための保存的治療



デバイスを用いたPFMTの効果



今後の展望

フェムテック (FemTech) に代表されるように、近年では、女性特有の身体症状を解決するデバイスの開発や展開が進んでいます。骨盤底筋トレーニングも同様に、今後はデバイスを用いたサポートを用いることで、より高いトレーニング効果とともに、多くの女性の悩みを解決することが期待されます。



手を温めることによる認知症予防に関する研究



教授
四十竹 美千代

① アピールポイント

手を温めるだけで認知症の予防に!!!

② 研究の出口のイメージ

習慣的に手を温め続けることにより、脳を健康な状態に保ち、高齢社会における認知機能低下を予防することに貢献します。

そして、高齢者がいつまでも元気に過ごすことができる社会を目指します。

キーワード

認知症、脳血流、温熱療法

研究の内容

寝たきりや脳梗塞の患者などに施す看護技術に「手浴」があります。手浴の効果として、爽快感やリラックス、交感神経の亢進、自律神経を一定に保つ、前頭前野への刺激など脳機能に変化を及ぼす、前頭前野の脳血流増加が報告されています。

認知症予防として、中等度の運動療法、学習療法によって前頭前野を活性化させ認知機能向上に効果的であることが報告されています。しかし、運動療法や学習療法は、高齢者のやる気に左右されるというデメリットがあります。

その点、手を温めることは、やる気に左右されることなく実施できます。

「手軽」「簡便」「安全」に実施することができます。

さらに、お湯を使わず温めることが可能な温熱手袋にて手浴と同等の効果があることを確認しました。

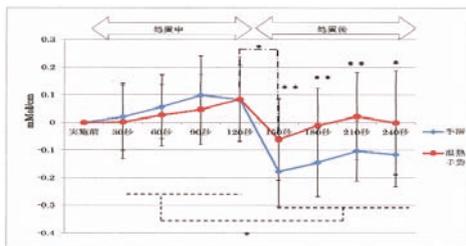


図6 手浴および温熱手袋による左室内側前頭前野のOxy-Hb濃の変化



温熱手袋

今後の展望

認知機能の低下がはじまっている高齢者に温熱手袋を習慣的に着用してもらい、認知機能の維持改善、行動に変化がもたらすことが可能か検証していきます。

地域における多世代交流の分析



准教授
青木 利江子

① アピールポイント

自治体では、乳幼児から高齢者まで地域包括支援の様々な実施をしています。母子保健分野ではブックスタートなど地域のボランティアと連携したり、小中学校では、読み聞かせ活動など学校、地域住民ボランティアの連携実施、赤ちゃんふれあい体験・性教育・命の教育など、学校、保健センター、地域親子の参加により地域の様々な機関や住民が参加し、多世代の交流事業を実施しています。

② 研究の出口のイメージ

地域の多世代の住民や様々な機関が協働し、多世代交流や子育て支援をしていくことは多世代、子育ての孤立化予防、虐待予防にもつながり、地域で人々が心身ともに健康に暮らし、地域で子どもを育てていく地域づくりの基盤づくりになります。地域の特性を生かした多世代交流について、地域住民とともに、対策について考え検証していきます。

キーワード

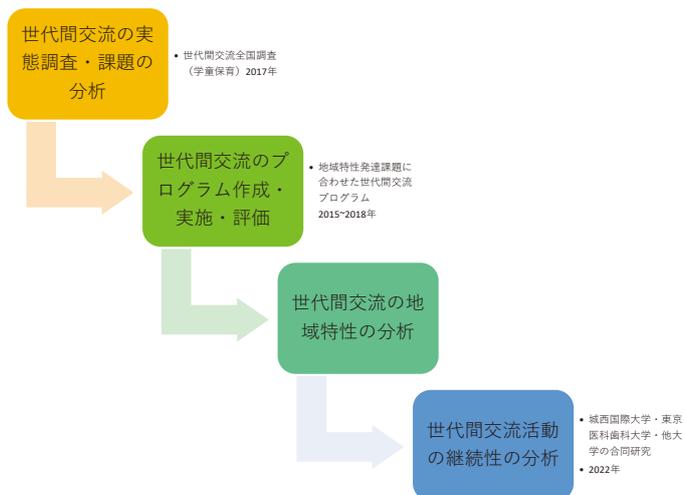
多世代交流、子育て支援、世代間交流プログラム、地域連携、継続性

研究の内容

これまで多世代交流の全国調査、多世代プログラムの検証、先進的活動地域の実態調査・分析などを実施しています。

2022年より城西国際大学と東京医科歯科大学、他大学と連携し、地域における世代間交流活動の分析に関する合同研究を始めています。

- 1) 森田 久美子, 青木 利江子, 小林 美奈子, 山本 晴美, 呂 暁衛, 永嶺 仁美, 佐々木 明子. 全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実施状況と実施に関わる要因掲載誌 日本世代間交流学会誌=Journal of Japan Society for Intergenerational Studies 6 (1) : 2017.1 p.27-36
- 2) 青木 利江子, 森田 久美子, 小林 美奈子, 山本 晴美, 呂 暁衛, 永嶺 仁美, 佐々木 明子. 学童保育における地域特性に合わせた世代間交流プログラムの実施と課題, 日本世代間交流学会誌=Journal of Japan Society for Intergenerational Studies 7 (1) 2018-2 p23-32
- 3) 青木利江子. 赤ちゃんとのふれあい体験が中学生の自己意識に与える影響: 自己意識尺度, M-GTAを用いたMixed methods approach分析日本世代間交流学会誌=Journal of Japan Society for Intergenerational Studies 5 (1) 2015-09 p.3-10
- 4) Kumiko Morita, Minako Kobayashi, Rieko Aoki, Hitomi Nagamine, Harumi Yamamoto, Fumi Ohtake, Mika Hoki, Hiroko Sumita, Kayo Maruyama, Kayoko Mitssuhashi, Akiko Sasaki. Factors that facilitate multigenerational exchanges in regional locations: across-sectional study in Niigata City, Japan Archives of Public Health. 2021.03; 79 (41)



今後の展望

現在の新型コロナ流行期、今後の社会状況に対応したICTを活用した多世代交流など、新しい形の多世代交流も検証していきます。また多世代交流の心身の健康、子育て支援における分析、活動の構造分析、エビデンスの検証をしていきたいと考えています。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先: 研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL : 0475-55-7832 FAX : 0475-55-8897

E-mail : research-c@jiu.ac.jp



精神疾患をもつ方の家族支援に関する研究



助教
伊賀 聡子

① アピールポイント

精神疾患をもつ方の家族は家庭という閉ざされた中で様々な経験をしています。特に、精神疾患の親をもつ子どもたちは、ヤングケアラーとして親の世話をしながら過ごすことが多く、大人になってからも生きづらさを抱えながら生きています。精神疾患の方の家族への支援を探求することは、精神疾患の方への支援にも繋がります。

② 研究の出口のイメージ

支援が必要な精神疾患をもつ方の家族が安心して相談できる場所や、精神疾患をもつ方が症状によって果たせない役割を、保健精神医療福祉分野の支援者だけでなく、学校や自治体、企業などが連携し支援を充実していきます。これによって、保健精神医療福祉のネットワークを拡大させていきます。

キーワード

精神疾患、家族支援、ヤングケアラー、カサンドラ症候群、発達障がい、ASD

研究の内容

精神疾患の親をもつ子どもたちは、親の精神症状により寂しさや不安、時には恐怖を抱きながら過ごしています。子どもたちは、親ができない家庭内での役割を担ったり、親の精神症状へのケアをしたりとヤングケアラーとして過ごすことも多くあります。子どもたちの子ども時代の経験は、大人になってからの生きづらさとなって現れます。子どもたちが、大人になってから子ども時代を振り返ると、子ども時代に助けてくれた大人の存在がありました。

このように、精神疾患の親をもつ子どもたちは、子ども時代に親の精神症状によって様々な思いを経験していますが、周りの大人の存在によって救われる経験もしていることが明らかになっています。また、親が病院に繋がっていないケースもあります。その場合、自ら助けを求められない子どもに対し、保健医療福祉の垣根を超え、学校や自治体、企業などが連携し、精神疾患をもつ方やその家族にも対応できる支援を充足させていく必要があります。

現在、国がヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチームを立ち上げ活動を始めています。地域包括的に精神疾患をもつ方やその家族への支援を普及するためには、さらに自治体や企業とも協働し支援の輪を広げていく必要があります。

今後の展望

昨今、発達障がいの方が増えてきています。なかでも周りから分かりにくい高機能ASDの方のパートナーは、その辛さを他者から理解してもらえないことで2重の苦しみを経験しています。精神疾患や発達障がいをもつ方のパートナーへの支援は行き届いていない現状があります。精神疾患・発達障がいをもつ方、そして、その家族がその人らしく生きていくための支援を、様々な方向から研究し探求していきます。



精神疾患をもつ方が地域で生活するための支援に関する研究



助教
伊賀 聡子

① アピールポイント

現在、障害者総合支援法に基づいて就労継続支援や地域活動支援など、精神障害をもたれた方が地域で自立して暮らすための支援が行われている。精神症状や居住地域によって法内施設に通うことが困難な精神障害者に対し、地域に根差した新しい居場所を探求していきます。ひきこもりや、親亡き後、8050問題等への支援を追い求めていきます。

② 研究の出口のイメージ

法内施設から漏れている精神疾患をもつ方の支援を探求していきます。さらには、社会問題となっているひきこもりや親亡き後の支援、8050問題に対する新たな支援体制を整えていきます。

キーワード

就労継続支援、地域活動支援、精神障害者、障害者総合支援法、ひきこもり、親亡き後、8050問題

研究の内容

自立支援法施行以降、法外施設となった小規模作業所はその多くが就労継続支援や地域活動支援センターへ移行しました。法外施設となってからも小規模作業所を継続して運営してきた運営者を対象に質的記述的研究法を実施いたしました。その結果、小規模作業所は、利用者の症状に合わせた作業提供や、利用者や家族へこころのケア等を行っており、彼らが安心して社会と繋がる場であることが明らかとなりました。さらに、利用者は小規模作業所に通うことで、「病気に前向きになった」「生き生きした姿になった」「自分の存在意義を感じ会話が増加した」等のプラスの変化がある一方、小規模作業所は、経済的困難を抱えているほか、法内施設への移行が困難である現状が明らかとなりました。この研究から、精神疾患をもつ方が地域で生活するために、小規模作業所の良さを残した、地域に根差した新支援体制の構築の必要性が示唆されました。

今後の展望

新支援体制を整えることで、法内施設に通うことが難しい方にも支援を届け、現在、社会問題となっているひきこもりや親亡き後の支援、8050問題への対策を構築していきます。精神疾患をもつ方が地域の中で地域の方々と繋がりながら、こころのケアが受けられ、自分自身も他者に対して、こころのケアができるような循環型のケアシステムを構築を目指していきます。



テキストマイニングを用いた看護学生の 臨地実習自己評価についての検討



助手
池上 萌絵

① アピールポイント

テキストマイニングを用い、看護学生の实習後レポートから学生の学び等についての検討を行っています。

② 研究の出口のイメージ

自由記載の文書などの評価が難しい質的なデータを、単語や分節の出現頻度や相関といった指標で示すことで授業内容や実習評価の方法・内容について検討しています。

キーワード

テキストマイニング、看護学生、実習評価

研究の内容

看護教育の基本的な考え方として、科学的な看護の実践に必要な臨床判断を行うための基礎的能力を養うことが求められています。こうした能力を養うためには、まず自身がどの程度の到達度にあるのかを正しく認識することが重要となると考えられます。しかし先行研究では、新型コロナウイルス感染拡大に伴い臨地での実習が十分に行えていないことから、現実的な視点からの評価ができていない可能性があると言われてしています。

以上より、実際の実習終了後の自己評価および教員評価に差があるのか、またその原因はどこにあるのかを、実習後評価と実習のまとめとして提出されたテキストデータを利用することで検討しています。また、テキストマイニングを用いてテキストデータを分析することで、学生の学びにどのような特徴がみられるのか併せて分析しています。

今後の展望

今後も学生のレポート等を分析することで、より効果的な教育方法や評価方法について検討していきます。

外国籍住民の母子保健に関する研究



助教
石井 恵美子

① アピールポイント

近年、地方においても外国にルーツを持つ住民の定住化がみられます。特徴はアジアの国の出身者、若い人たちが多く、定住する地域で妊娠・出産・育児をするケースも増えてきています。外国にルーツを持つ住民は、言葉の壁、文化の壁、心の壁などの困難を抱えていることが多いといわれます。

② 研究の出口のイメージ

外国籍住民が定住する地域で安心して妊娠・出産・育児ができるようサポートします。また受け入れる地域も外国籍住民がいることで地域が活性化するように、持続可能な仕組みを構築することを目指します。

キーワード

外国籍住民、子育て世代包括支援、妊娠・出産・育児、助産師、保健師

研究の内容

2021年6月末で、日本には282万人もの外国籍住民が暮らしています。その多くはアジアの国の出身者です。本学東金キャンパスが位置する千葉県の内陸地域でも、東南アジアや南アジア系の人を近年よく見かけます。外国ルーツの小さな子ども連れの母親やご家族も大学近隣のスーパーやホームセンターなどでよく見かけます。また看護学部の臨地実習では学生が外国籍の患者さんや産婦さんを受け持たせていただくこともあります。

外国にルーツを持つ人たちが日本で暮らす中で困る場面としては、役所での手続きや病院受診があります。言葉の壁、文化の壁、心の壁、制度の壁などの困難がみられることが多いです。また病院勤務の医療スタッフを対象にした研究でも、外国籍患者や妊産婦を受け持った時に、同様の壁や困難があったことが明らかになっています。

そこで、外国籍住民と地域の医療や行政サービスを提供する人たちが、互いの溝を埋め、互いに理解しあえるにはどうすればよいか。外国籍住民と医療スタッフ・行政スタッフ双方へ質的研究を行い、そこで得た知見をもとに、仕組みを構築していきます。

今後の展望

まず、地域の子育て世代包括支援センターを利用する外国籍住民とそこで従事する助産師・保健師を観察し、どのような点は既にスムーズに行われていて、どのような点が困難となっているのか、またどのようなニーズが双方にあるのかをインタビュー調査していこうと考えています。

親子の情緒的きずな（ボンディング）形成に着目した 妊娠期からの子育て支援モデル構築



教授
大橋 優紀子

① アピールポイント

近年の深刻な社会的問題である新生児虐待を規定するのは、産後うつ病よりもむしろ、わが子に対する情緒的きずな（ボンディング）の問題であることを、世界ではじめて発表しました（Ohashi, et al. 2016）。親子のきずな・関係性を早期に支えて、すべての赤ちゃんに、本来の幸せな人生のスタートを迎えてほしいという思いで、研究にとりこんでいます。

② 研究の出口のイメージ

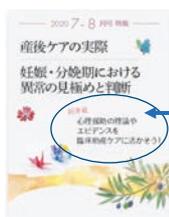
ボンディングの問題は、不良な育児行動や児童虐待の素地になる可能性が言われているものの、支援の手立てが確立されていません。ボンディングの問題の類型解明、アセスメント法の開発、支援プログラムの開発を連動して行うことで、未確立であった支援の手立てを見出し、虐待予防をみすえたポピュレーションアプローチとしての、早期ボンディング形成支援モデルを提案することを最終目的としています。

キーワード

ボンディング、親子相互作用、周産期メンタルヘルス、乳幼児精神保健、ペアレンティング、子育て支援、心理援助教育、尺度開発

研究の内容

- ① ボンディングとその問題の本質を見据えて、ボンディングの概念を再構築しています。
- ② 数千人規模の親のデータから、ボンディング問題の類型を解明し、母親・父親の両方に使える、ボンディング障害の類型アセスメント法の開発に取り組んでいます。
- ③ ボンディング類型（タイプ）に対応できる「妊娠期からのボンディング形成支援プログラム」を作成し、その効果検証を行っていきます。



日経研
雑誌「臨床助産ケア」
【連載】心理援助の理論や
エビデンスを
臨床助産ケアに活かそう！
（代表：大橋優紀子）
連載中



研究成果による書籍
（共同執筆）

今後の展望

研究の成果に基づき、行政や産科医療機関の対応の中で実践できるスタイルの、虐待予防をみすえた早期ボンディング形成支援モデルの提案をめざしています。プライマリーケアワーカーである保健師や助産師が、ボンディング形成・促進に向けた支援を早期に実践できるようになれば、わが国の子ども虐待予防に寄与する可能性があるでしょう。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



症状に応じた看護師のタッチング技法の生体力学的分析



助教

樺島 稔

① アピールポイント

疼痛や不安といった症状の軽減だけでなく非言語的コミュニケーション手段の一つとして用いられるタッチングは、患者の性別や反応など個別性が求められる技術ゆえ、これまで経験的に学ばれてきました。本研究は各症状に対して看護師が行うタッチングの手の動きを生体力学的側面から可視化することにより、経験の少ない初学者の参考となることができます。

② 研究の出口のイメージ

タッチングを行う看護師のタッチング時の手の動きを、症状別に、実施時間・手技の構成・手の圧・手を動かす速さといった生体力学的項目を明らかにします。初学者の参考となる指標になる他、タッチングロボット等を作成する際のデータとして活用できると考えています。

キーワード

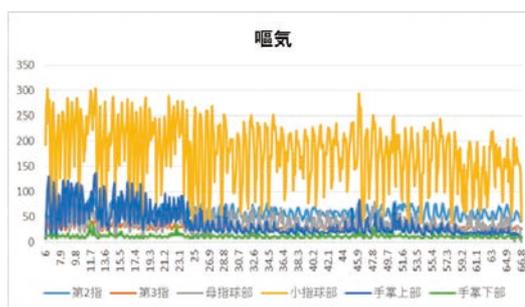
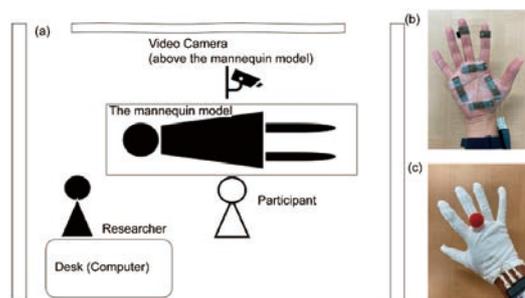
タッチング、Biomechanical Analysis、看護

研究の内容

タッチングは私たちの日常生活だけでなく、看護師が行うケアの中でも基本的かつ重要な要素の一つです。疼痛や不安といった症状の軽減だけでなく、非言語的コミュニケーション手段の一つとして実施されますが、個別性が高い技術であるため、看護師は経験的に（見よう見まねで）その手技を学ぶことが報告されています。

本研究は効果が検証されている症状（不安・不眠・嘔気・疼痛）に対して看護師が行うタッチングの手技を、実施時間、手技の構成、手の圧、手を動かす速さといった項目を可視化することを目指しています。

不安や不眠といった症状に対しては、傾聴の姿勢を示す目的や患者の気持ちを落ち着かせる目的で、優しくゆっくりとしたスピードでタッチングを行うと予想されます。人が心地よさを感じる速さは1～10cm/sと報告されており、とてもゆっくりとしたスピードで患者さんの体を擦るのではないかと考えられます。一方、疼痛や嘔気では症状を軽減させるため、力強く速いタッチングを行うのではないかと予想しています。



今後の展望

本研究で手の動きが明らかになった場合には、その手の動きを基にしたタッチングの効果を明らかにする必要が有ると考えています。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



認知症に対するアクティビティケアの心理社会的効果の検討



准教授
川久保 悦子

① アピールポイント

認知症高齢者に対するアクティビティケアやアートセラピーの研究を行ってきました。日本におけるアクティビティケアやアートセラピーの心理社会的効果を測る尺度を開発をしています。

② 研究の出口のイメージ

日本語版「The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Tool」を開発しました。信頼性・妥当性を検討し、さまざまなアクティビティやアートセラピーに対する有効性を検証します。尺度の利用価値を高めます。

キーワード

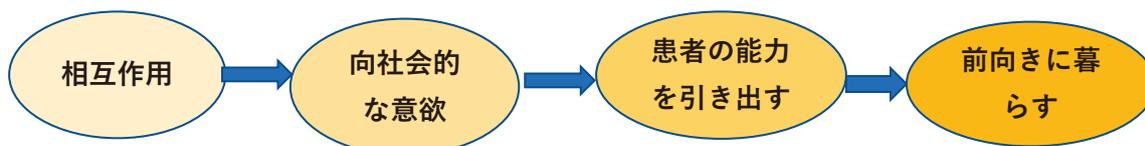
aged, art activity, dementia, quality of life, reproducibility of results

研究の内容

- ・アクティビティケアはアセスメントが重要です。
- ・アクティビティプログラムも看護計画と同じように対象者ひとりひとりをアセスメントし評価する必要があります。(個別性や環境の情報も大切です)

The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool (Rentz CA, 2002) は認知症のアートセラピーのwell-beingを測る尺度でLawton (1997) の概念を基盤に作られています。

日本語版「The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Observation Tool」はオリジナルと同様に「関心」「持続的注意」「喜び」「否定的感情」「悲しみ」「自尊心」「正常な状態」の7つの領域の19項目を10分間ごとの観察にもとづいて、4=いつも～0=全くないで評価します。



科研費 基盤研究 (c) 令和4年～令和6年度課題番号22K11241

今後の展望

現在、日本ではアクティビティケアやアートセラピー時の心理社会的な側面をとらえる尺度は開発されておりません。日本語版「The Greater Cincinnati Chapter Well-Being Tool」が高齢者施設でのアクティビティケアやアートセラピーにおいて、使いやすく有用な尺度となる研究を行っています。ケアの効果を測ることで高齢者のQOLが向上することを目指しています。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



超音波画像が映す末梢静脈カテーテルの血管内留置の実態の分析による、カテーテルをより安全に、より長く留置させるための技術の開発



准教授
北田 素子

① アピールポイント

私たちは、数ミリの血管に1mmに満たないカテーテルが留置されている画像を、エコーを用いて鮮明に抽出することに成功しました！

② 研究の出口のイメージ

カテーテル留置の実態と合併症との関連、穿刺技術に優れる熟練看護師の留置の特徴を“みえる化”することで、より安全に末梢静脈カテーテルを留置できる技術の標準化づくりに貢献します。

キーワード

エコー、末梢静脈カテーテル合併症、熟練看護師

研究の内容

「入院中は（点滴）注射を何度も刺し直しされて、本当に辛かった。」

そのような経験をお持ちの方も少なくないかと思います。

点滴静脈注射とは、静脈に長期留置できるよう柔らかい素材から成るカテーテル（細い管）を留置し、水分・電解質の補給・補正、栄養分の補給、薬剤の投与を目的として実施される、医療現場に欠くことのできない治療法のひとつです。なくてはならない、しかし、約半数ものカテーテルは合併症により、治療が完遂する前に抜去され、新しいカテーテルの再挿入が行われているとも言われています。繰り返しの穿刺に伴う患者さんの苦痛を何とかしたい！！

点滴静脈注射では、2mmほどの血管に1mmに満たないカテーテルが挿入され、留置されています。医療者は見えない細い血管に、経験と技をもって、挿入・留置するわけですが、合併症は後を絶ちません。

では、一体、どのような血管に、どのような状態でカテーテルは留置されているのか？どのような血管に、どのように留置されていれば、より安全に長く留置できるのか？

私たちは、留置の実態をエコーにより可視化することで、カテーテルをより安全に、より長く留置させるための技術の開発を目指します。

今後の展望

本研究は、これまで可視化されなかったレベルで、留置されているカテーテルの全体像と留置により生じる血管内および周囲組織の変化を明らかにできます。まずは実態をしっかりと掴み、その実態が教えてくれる問題点を捉え、解決の糸口を探ります。

繰り返しの穿刺に苦痛を抱える患者さんがひとりでも少なくなる未来につなげます。

子どもを亡くした親のセルフ・ヘルプ・グループで活動するピアサポーターに対する支援



助教
城所 眞紀子

① アピールポイント

助産師として、周産期にお子さんを亡くすという喪失を体験されたご夫婦のグリーフケアについて研究を進めています。子どもを亡くした喪失感は一生涯続きます。しかし地域での継続したグリーフケアは、ヒューマンリソースの不足もあり充実しているとは言い難い状況です。そのような現状を担っているのはセルフ・ヘルプ・グループ（SHG）です。よって、SHGを継続的に支援し、地域における「ピアサポートの力」を強化していきます。

② 研究の出口のイメージ

地域におけるSHGや患者会などを支援する「ピアサポーター」に必要なケアと、具体的なケアの実践に必要な情報についての内容を明らかにし、実際の支援プログラムの円滑な運営を目指しています。

キーワード

周産期の喪失（死産・流産・新生児死亡）、グリーフケア、セルフ・ヘルプ・グループ、ピアサポーターの支援

研究の内容

悲嘆とは、日本語では「悲しみ嘆くこと」という意味で使われていますが、英語では「グリーフ」といい、日本語よりも幅広い意味合いを持って表現されています。欧米の文献では、辛い、悲しい、眠れない、動悸がするなどの心理的、身体的な症状も含めての反応を「グリーフ」としています。また、「泣く」「人に話す」などの対処行動を含んだプロセスまでを含むこともあります。

現在、助産師として周産期に子どもを亡くしたご夫婦へのグリーフケアをテーマに研究を進めています。

少子高齢化が進む現代においては出生数の減少により、統計上の数値として現れる死産や新生児死亡は数値としては減少しているものの、厚生労働省の発表によれば、2020年には自然死産数8,188胎、新生児死亡は704人であり、他にも数字に現れない流産や出生前診断の普及に関連した人工死産などを考慮すると、どれだけ数多くのご夫婦、ご家族が深い悲嘆（グリーフ）を経験しているのかが推察されます。

愛する子どもを亡くした親のグリーフは一生涯続きますが、新たにきょうだいが生まれたり、日常生活を送る中で、その辛さや悲しみは周囲には理解されにくく、「公認されない悲嘆」として抱えていくことになりがちです。グリーフケアを学んだ医療者が介入することも必要ですが、遺族との関係は医療機関を退院した後に分断されてしまいやすい現状があることも事実です。

現在、そうした親を支えているのは地域で活動するセルフ・ヘルプ・グループ（SHG）です。今後は地域において、ますますSHGによるピアサポートの需要は高まると考えられますが、そのようなSHGを運営する人々もまた、一生涯続くグリーフを抱える当事者です。そうしたことを考慮すると、他者の苦しみを支えているピアサポーターへの支援もまた同様に、とても重要であると考えます。

地域における継続したグリーフケアの実践に向けて、SHGと医療者の協働と共に、ピアサポーターの心の健康を支えていくための、持続可能な支援方法を検討していきます。

今後の展望

今後迎えるであろう多死社会において、喪った人の年齢や関係性に関わらず、遺された人々のグリーフケアは今後ますます求められていくと予測します。子どもを亡くした親のSHGのみならず、センシティブな体験を共有する遺族が集まるSHGを運営し、多様な背景を持つ遺族を公平に支えようと努力する、当事者でもあるピアサポーターの心の負担を軽減し、SHGの地域での活動を持続可能なものにしていくための具体的な支援プログラムが広く普及することを目指します。



高齢者看護における倫理的課題に関する学習内容の検討



准教授
熊谷 玲子

① アピールポイント

看護学生が高齢者看護における倫理的課題に気づき、その課題への対応となる高齢者の尊厳を守るための行動を意識化することによって、高齢者の自尊心の向上や意欲の維持などQOLに良い影響を与え、倫理に基づく看護実践能力を高めることができると考えます。

② 研究の出口のイメージ

看護学生が、高齢者看護における倫理的感受性を高め、高齢者の尊厳を守るための行動がとれるような教育内容の構築

キーワード

看護学生、倫理的感受性、高齢者、倫理的課題、尊厳、QOL、意思決定支援、看護基礎教育

研究の内容

看護学生の高齢者看護における倫理的課題において、過去の調査から、高齢者の意向を尊重しない援助や認知症の方への意思決定の機会が少ないことなどがあげられており、看護学生は、高齢者の尊厳を守るためのケアとして意思決定支援や意思を尊重することの重要性を感じていました。

今後以下のような観点から研究を進めていきたいと考えます。

1. 看護学生は、高齢者看護における倫理的課題をどのようにとらえているか（継続）
2. 看護学生は、高齢者への意思決定支援の現状をどのようにとらえているか
3. 高齢者の意思決定支援におけるニーズ
4. 臨床看護師の高齢者への意思決定支援の実態
5. 高齢者看護における倫理的課題に関する学習内容の検討

今後の展望

意思決定を促す効果的な支援など倫理的実践を行うために重要な対話する力についても追究していきたいと考えます。

中途障害児と家族への支援に関する研究



助教
佐藤 愛

① アピールポイント

私の研究テーマは、健康な成長発達の途中における不慮の事故や病気の発症により重度の障害を有し、医療的ケアを必要とする中途障害児と家族への看護や支援に関することです。

② 研究の出口のイメージ

これまでの研究で、在宅で中途障害児を育てる母親の経験や、中途障害児と家族の経験する家族発達課題を解明してきました。今後は具体的な支援策を講じ実践するための、支援指針を開発したいと思っています。

キーワード

中途障害児、医療的ケア児、家族、家族発達課題、在宅看護、看護支援

研究の内容

近年の我が国における新生児医療、救急医療、集中医療の進歩により、新生児、乳幼児死亡率は低下する一方、様々な医療的ケアを必要としながら、在宅で生活を送る重症心身障害児も増加している現状があります。中途障害児は、重症心身障害児のなかでも、健康な成長発達の途中で不慮の事故や突然の病気の発症により、重度の障害を有した子どものことを示します。

家族にとって子どもが突然障害を抱えるということは、子どもがこれまで習得してきたものを喪失し、また今後への不安も加わり、苦しみが最大になるといわれています。

人間は生涯、発達を続けますが、家族も同様にユニットとして発達を続け、様々な発達課題に順応、あるいは克服しながら成長します。これまでの研究で、中途障害児とその家族は、家族員の一人である子どもが突然障害を有したことで、家族の発達に大きく影響を及ぼすことが明示され、より多くの支援を必要としていることが示唆されました。また、中途障害児とその家族の経験する家族発達課題を、中途障害児の家族と支援する専門職者の双方の視点から明らかにし、専門職者に求められる支援について検討してきました。

今後も研究を続け、中途障害児とその家族が家族としてともに生き、在宅での生活を継続するための支援を、探求し続けたいと思います。

今後の展望

中途障害児と家族の支援が具体化され、指針としてまとめた後は、実践・評価をして、さらなる支援の充実を目指したいと思っています。また、中途障害児と家族の経験する家族ダイナミズムについても、研究していきたいと考えます。



精神科病棟での多職種連携で看護師に求められる役割



助教
島村 龍治

① アピールポイント

事例文献をもとに、精神科医療における多職種連携での看護師の役割には、1. 対等な関係づくりを推進する役割（①主体性の発揮、②活発なコミュニケーション、③患者と家族の代弁者・擁護者）、2. 多職種連携の調整役（①マネージャー役割、②情報共有のキーパーソン）という2つの役割と5つの項目にまとめられました。

② 研究の出口のイメージ

退院支援を進める上で、対象が医療と福祉に出会い、各々がお互いを知り強みを理解し、対等な関係で同じ方向にスクラムを組む必要があります。看護師は、地域と病院の中に対話の場を開拓し、退院支援の実践で得た成功・失敗例をもとに対象が地域で安定して生活を継続できる効果的な支援のあり方を一緒に考えていきたいと思っています。

キーワード

精神科医療、精神看護、退院支援、多職種連携、チーム医療、連携、協働

研究の内容

精神科病棟は医療スタッフの配置が少ないが、多職種連携により患者の地域移行促進と地域生活の安定を図ることが求められています。最初に、「多職種連携」とは、「病院内外の専門職者と患者・家族がチームとなってそれぞれの技術と知識を活かして相互作用し、情報共有しながら共通の目標達成を目指し協働することである」と定義でき、連携や協働を重視しています。

事例文献を通して、精神科医療の多職種連携の現状を整理すると、4つの視点（①多職種連携を構成する職種、②多職種で情報共有するツールの活用、③カンファレンスの開催、④関係づくり）に整理できました。

精神科医療の多職種連携の課題を整理すると、5つ（①不十分な情報共有、②地域連携の弱さ、③コンフリクトによる連携の低下、④カンファレンスの質、⑤カンファレンス開催の困難さ）が挙げられました。

そして、看護師は、多職種連携の推進の中で、看護師が受け身的な姿勢を脱却することから始まり、対等な関係づくりと自由に話せる雰囲気づくりのリーダーシップを担い、多職種チームとの協働が必要となります。

病院の精神科医療での多職種連携を整理しましたが、今後、地域保健医療福祉の場から多職種連携の現状と課題を整理して病院と地域での相互理解を深めて、看護師に求められる役割について探求していきます。

今後の展望

地域移行が求められる中、多職種連携によって地域で安定して生活する精神障がい者と支援者にはどのような連携があるのか、成功例と困難例を整理して看護ケアの質向上につなげたいと考えております。退院が難しいとされていた方の退院促進につながる実践の知恵を探索しています。



多様化する提供精子治療における当事者への情報提供のあり方



教授
清水 清美

① アピールポイント

多様化する提供精子治療において、本治療を希望するレシピエントやドナーへの情報提供の在り方について明らかにします。

② 研究の出口のイメージ

本研究での成果は、わが国の非配偶者間生殖医療における当事者へのケアを検討する上で貴重な一資料になると考えます。また、本調査の結果を活用し、当事者に届くような情報提供資料を作成します。

キーワード

非配偶者間生殖補助医療、不妊カップル、家族形成、生まれた人の出自を知る権利

研究の内容

非配偶者間の生殖医療については2020年12月に「生殖医療法」が設立したが、具体的な制度化はここ2年で検討される予定です。本治療に関する制度化が成立しても、社会の認知度、当事者自身の治療に対する肯定感が低ければ、「生まれる子ども」の福祉に焦点を当てた仕組みにはなりません。制度化が検討されている今、すでにわが国で多様化しつつある提供精子のレシピエントやドナーの課題を明らかにするため、非配偶者間生殖医療に関連・関心のある、研究者・医療者・当事者（レシピエント・生まれた人・ドナー）にインタビュー調査を実施しています。以下は、著者が当事者団体と関りや研究で作成した教材です。

（左は子どもに伝えるための絵本 右は提供精子で親になった人の手記）



今後の展望

提供配偶子による家族づくりの課題を明らかにし、レシピエントやドナーはもちろんのこと、生まれてくる人の福祉を第一に考えられる世の中にするために、どのような仕組みやケアが必要か考えていきます。

殺菌・抗ウイルス効果に及ぼすエタノール濃度の影響



助教
神明 朱美

① アピールポイント

多くの微生物に対して局方で規定されるエタノールの至適濃度は有効であるものの、一部の抗酸菌とノンエンベロープウイルスに対して有効でないことが明らかとなりました。

② 研究の出口のイメージ

医療関連感染で重要な細菌、真菌、抗酸菌の殺菌効果、および抗ウイルス効果に対するエタノール濃度の影響を検討することで有効最小濃度を確認し、エタノールの殺菌・抗ウイルスのスペクトルを明らかにします。

キーワード

エタノール、細菌、真菌、抗酸菌、ウイルス、殺菌効果、抗ウイルス効果

研究の内容

消毒に用いるエタノールの殺菌効果は古くから検討されています。その至適濃度範囲は、日本薬局方（局方）では76.9～81.4v/v%、米国薬局方であるUSP-NF（The United States Pharmacopeia-National Formulary）では68.5～71.5v/v%、World Healthcare Organization（WHO）ガイドラインでは60～80v/v%とされています。これらの至適濃度を支持する報告は2000年以前のもものが多く、実験方法や供試微生物、エタノールと菌種との混合比率や作用時間等の実験条件が異なります。

方法（Methods）

エタノール濃度は0～90v/v%（25℃）の10%刻みとし、菌液の添加により供試エタノール濃度が90%に低下するため作用時の最終濃度で調整しました。一般細菌、真菌、抗酸菌に対する殺菌効果試験方法は、供試エタノール900μLに滅菌リン酸緩衝液で調整した菌液やウイルス液100μLを添加混合して10秒接触させて殺菌効果と抗ウイルス効果を評価しました。

今後の展望

一定条件で実験をすることで有効最小濃度を確認し、エタノールの殺菌・抗ウイルスのスペクトルを明らかにします。感染制御の環境消毒や手指衛生に生かせるのではないかと考えます。

看護実習の臨地実習指導者が学生指導で抱える 困難感の因子と個人属性の検討



助手
館野 和子

① アピールポイント

我が国の看護教育課程は多種多様であり、いずれの教育課程においても、講義・演習形式の科目に加えて「臨地実習」が位置づけられています。臨地実習指導者は、「看護実践の役割モデル」として教育効果が期待されている一方で、学生指導にさまざまな困難感を抱えています。臨地実習指導者の困難感について研究することで、学生たちが学ぶ臨地実習がより良いものになることを目指します。

② 研究の出口のイメージ

臨地実習指導者の学生指導で抱える困難感の因子構造、また個人属性（最終学歴、看護師経験、実習指導者経験など）による困難感の差について明らかにすることで、臨地実習指導者の学生指導における困難感の解消に向けた教育的基礎資料となる可能性があります。

キーワード

臨地実習指導者、困難感、看護、学生指導

研究の内容

近年、医療の高度化や複雑化と共に、看護を取り巻く現状も大きく変化し、臨地実習指導者の皆様もさまざまな困難を抱えながら学生指導に取り組まれています。

この研究では、臨地実習指導者が学生指導において抱く困難感の因子構造を示し、困難感の因子と個人属性（看護最終学歴、看護師年数、実習指導者経験年数、実習指導者講習会修了の有無、看護教員経験の有無）の検討をすることを目的としています。

全国の病院の中から300床以上の病院に絞り、その中からランダムに100病院を抽出し、800名の臨地実習指導者に対して「学生指導で抱える困難感」について問う、自記式質問紙調査表を配布しました。対象者本人から直接郵送回収を行い、回収率378名（47.2%）、有効回答数は367名（97.0%）とコロナ禍にもかかわらず、比較的高い回収率となりました。

分析では、学生指導で抱える困難感の因子構造を明らかにするために因子分析を行い、抽出された因子得点と個人属性について分析を行いました。

結果、臨地実習指導者の学生指導における困難感の因子として5因子が抽出され、さらに、対象者の個人属性である、最終学歴、看護師年数、実習指導者経験年数、において群間に有意差があり、個人属性により困難感に相違があることが示されました。

今後の展望

今後は、看護教育に関する研究を中心に、VR動画を用いた教材開発、学生への看護技術教育に関する研究、臨地実習に関する研究、などに着手していきます。



手浴の効果に対する生理学的エビデンスの確立



助教
中野 元

① アピールポイント

手浴は清潔ケアだけでなく、爽快感を得る、リラックス感をもたらす、やる気が向上する等の効果が明らかにされていますが、生理学的見地からその効果を明らかにする報告は多くありません。そこで、手浴が自律神経活動に及ぼす影響を明らかにするため、実験的に交感神経活動が亢進している状態および副交感神経活動が亢進している状態を誘発し、それぞれの状態における手浴の自律神経系および中枢神経系への効果を調査します。

② 研究の出口のイメージ

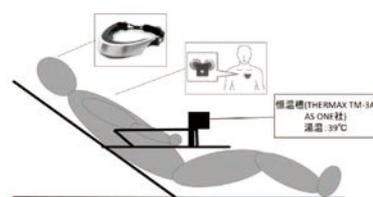
手浴のみならず自律神経系（リラックス効果、覚醒効果）や前頭前野等（認知機能などに関与）の血流量の測定を行い生理学的効果を明らかにします。

キーワード

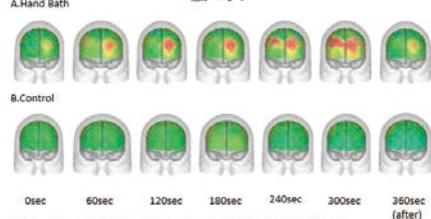
自律神経系、脳血行動態、ストレス、看護技術、温熱、手浴

研究の内容

清潔の保持は基本的欲求の一つにあげられ、生理的、心理的にも健康と深くかかわっています。清潔ケアには清拭、入浴等の全身に対するケアから、足浴、手浴等のような部分的なケアまで様々な方法があります。手浴は日常の看護の場において多く行なわれている清潔行為の一つであります。しかしながら、温めるということに関して生理学的効果にリラックス効果や覚醒効果など矛盾している効果を示す報告があります。自律神経のバランス調節効果を検証するためには、人為的に交感神経活動を亢進させた状態および副交感神経活動を亢進させた状態で、それぞれ手浴の効果を調査しました。その結果、手浴は快刺激として中枢神経系、自律神経系へ働きかけ、バランス調節作用し、臨床応用が可能であることが明らかとなりました。



手浴(A)とコントロール(B)タスクのOxy-Hb濃度変化の脳マップ



各脳マップの下の秒単位の時間は、タスクの開始後の経過時間を示す。Oxy-Hb濃度は手浴中に前頭極で増加を示した。

今後の展望

手浴における温熱効果は生理学的にも快刺激となる可能性を示し、自律神経系へ働きかけ、バランス調節作用し、臨床応用が可能であると考えます。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



在宅高齢者の抑うつ悪化の要因、抑うつと痛みとの関連、在宅看取りにおける訪問介護員と訪問看護師の連携



教授
二宮 彩子

① アピールポイント

現代において大きな課題となっている、高齢者の孤独感／痛みと、抑うつとの関連や、その介護者のストレスに焦点をあてた研究、そして在宅看取りに取り組むヘルパーや訪問看護師への支援に関する研究を行っています。

② 研究の出口のイメージ

抑うつ症状で苦しむ高齢者やその介護者のQOLを改善する具体的な方法の提示や施策への提言、また、在宅看取りに関わるヘルパーや看護師が不安なく、確実なスキルでケアを行い、御本人や御家族に寄り添った看取りを行えるシステム構築を目指しています。

キーワード

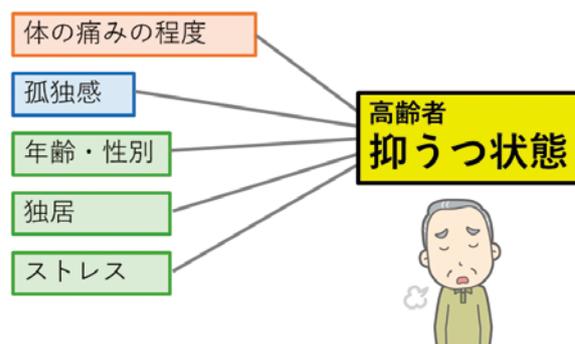
高齢者の抑うつ、在宅看取り、訪問介護員（ヘルパー）、訪問看護師

研究の内容

抑うつ状態は認知症と並び、高齢者の主要な精神疾患のひとつで、QOLを著しく下げると言われています。要介護状態への移行にもつながる可能性もあり、世界的に見ても早急に取り組むべき課題です。そこで、これまでに全国の居宅介護支援事業所で収集されたInterRai方式のアセスメントデータを利用し、高齢者の抑うつ悪化に影響を与える要因や、痛みと抑うつとの関連、介護者のストレスとの関連を調べました。

その結果、孤独感が抑うつ状態を悪化させることや、体の痛みが強くなる程、抑うつが発生リスクも高くなることなどが明らかになりました。

また、在宅看取りについては、ヘルパーや訪問看護師に対するインタビューや全国規模の意識調査を通して、看取りケアに対する自信に影響を与える要因を明らかにしているところです。これまでに、「ターミナルケアに向き合う態度」や「訪問経験」「専門職どうしの連携」との関連が明らかになってきています。



今後の展望

高齢者の抑うつ状態に対応するプログラムの提言や、ヘルパーや訪問看護師が質の高い、家族に寄り添った在宅看取りができるよう、専門職のサポートのためのシステム構築を目指します。

高齢心不全患者と共有できる意思決定支援の構造化に関する研究



助教

松尾 尚美

① アピールポイント

高齢心不全患者が治療や療養場所に関する選択を医療従事者と共同して意思決定するというあり様について、構造化を図る研究です。本研究により意思決定支援が具現化されることは、患者の尊厳を護る医療への契機となります。また、医療の質向上に貢献できます。厚生労働省は、2035年までに「国民ひとりひとりが治療を含めたライフスタイルを主体的に選択できる」というビジョンを掲げており、本研究は我が国における医療の趨勢に貢献できる研究です。

② 研究の出口のイメージ

本研究は、看護師、医師、患者にインタビューを行い、患者と医療者が共有できる意思決定支援のプロセスを言語化し、構造化します。高齢心不全患者が治療や療養場所を選択する際の意思決定や医療従事者による支援のプロセスを構造化することで、高齢心不全患者への意思決定支援の具体的な支援の一助となります。

キーワード

共有意思決定支援、患者アドボカシー、高齢心不全患者、患者教育

研究の内容

我が国は高齢社会を迎えて心不全患者が増加し、2025年には高齢心不全患者が200万人以上に達して「心不全パンデミック」の時代を迎えることが予測されています。高齢心不全患者は糖尿病や脳血管疾患などの併存症、認知症やうつ病などを合併し、フレイル（脆弱）に陥ることが多く、患者のquality of life (QOL) は大きく低下します。心不全は、がんや認知症が迎える短期間の明らかな増悪を示す病みの軌跡とは異なり、増悪・寛解を繰り返すことで予測困難な病みの軌跡を辿ります。高齢者心不全は複合的な症状を呈するがゆえに患者の予後は予測しにくく、終末期の状態であるか否かについて判断することは難しいです。ゆえに、心不全の早期の段階において患者や家族が望む治療や生き方を医療者と共有し、意思決定支援のプロセスを踏むことが求められています。

しかしながら、実際は、状態が急激に悪化した心不全末期の段階になって患者が様々な選択をせざるを得ない現状も多く、治療法、処置、療養場所や最期を迎える場所についていつ選択したらよいか、意思決定支援のタイミングについての難しさが指摘されています。また、重症心不全の状態で入院したとしても、呼吸苦などの症状が軽減されれば、患者自身と死を結び付けて考えにくくなります。看護師側もそのような患者に対して、予後を踏まえた治療選択や今後の過ごし方等について話し合う機会を設けることに躊躇する現状も報告されており、どのように意思決定支援のプロセスを展開するかについて困難な状況があります。

意思決定支援は、患者が自身の価値観や人生観を踏まえた選択ができるよう患者と医療者が共有して行うプロセスです。意思決定支援のプロセスを経た意思決定は患者に満足感を与え、意思決定の葛藤が減少することも報告されており、患者の尊厳を守る上で重要な支援です。心不全患者に対する意思決定支援について、その必要性を述べた論文は少なくありません。しかし、事例の実践報告に留っており、心不全患者と共有できる意思決定支援のプロセスを構造化した研究はありません。また、意思決定支援は医療者と患者が共同して行われるプロセスであるものの、患者側のニーズを含めて構造化された研究は報告されていません。本研究は、高齢心不全患者と共有できる意思決定支援を構造化することを目的として実施しています。

今後の展望

本研究結果のみならず、今までの研究（「看護師の患者アドボカシー：概念分析」への取り組み、「看護師の患者アドボカシー概念に基づく治療選択における意思決定支援力測定尺度」の開発）の経験を踏まえ、高齢心不全患者に対する意思決定支援の標準化、医療従事者への教育プログラムの開発へとつなげていきます。これらにより、患者の尊厳を護る医療の構築、医療の質向上に貢献することが目標です。



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

問合せ先：研究推進・社会貢献部研究推進課

TEL：0475-55-7832 FAX：0475-55-8897

E-mail：research-c@jiu.ac.jp



高齢者の社会的つながりに関する研究



助教
丸山 あかね

① アピールポイント

高齢者の社会的役割を維持する社会的つながりについて研究

② 研究の出口のイメージ

社会的役割を維持することで心身の健康が維持されることが明らかになっています。社会的孤立を防ぎ、社会的役割が維持できる地域づくりに挑戦していきます。

キーワード

高齢者、社会的つながり、社会的役割遂行

研究の内容

新型コロナウイルス感染症の拡大の中、積極的に地区活動に参加してきた高齢者は、活動の自粛によりフレイルへの加速が懸念されました。

そこでコロナ禍以前に積極的に地区活動に参加してきた高齢者を対象に「コロナ禍での社会的ネットワークにおける交流」を調査を行いました。その結果、コロナ禍以前に積極的に地域活動に参加してきた高齢者は、家族との交流を軸として家族との良好な関係をコロナ禍の環境に合わせて維持を図り、家族以外の近隣・友人、活動仲間との交流も継続していたことが明らかとなりました。有事の環境下で高齢者がフレイルに陥らないために、平時から社会的つながりを維持する生活が必要であり、高齢者自らエンパワメントを高められるように支援することの重要性が示唆されました。

現在、デジタル化が進む社会において高齢者のICT利活用について、調査・研究に取り組んでいます。



今後の展望

地域に在住する高齢者にICT利活用の実態について調査し、高齢者のICTの利活用の状況に応じた支援について介護予防の観点から取り組んでいきたいと思っております。



産後のストレス予防支援の研究、親性準備性の研究 女性の健康を考えたプレコンセプションケアの研究



准教授
山田 万希子

① アピールポイント

大学院で行動分析学、心理学を学び、心理面を考えた看護支援の研究を進めています。今後は助産師学生の教育についての研究も進めたいと考えています。

② 研究の出口のイメージ

女性やその家族の心身の健康を増進・保持できる支援、また、そのための早期予防支援を構築し、看護の質の向上に向けた研究を目指しています。

キーワード

妊娠期～産褥期の健康支援、メンタルヘルス支援、育児支援、親性準備性、プレコンセプションケア、心身の健康、行動分析学、自己効力感、行動変容、ストレス

研究の内容

1. 看護における行動分析学の応用の研究。自己効力感や学習心理学を応用した行動変容を促す健康支援、保健指導の研究を行い評価しました。慢性疾患に関わらず、看護における行動分析学の応用は患者の行動変容に必要なものと考えられました。結果、保健指導に行動分析学の応用は可能と考えられ、応用の働きかけはその人自身をよく知り、理解した上で勧めることが大切であると考えられました。妊娠期から産褥期における健康支援にどのように応用できるかを今後検証していきたいと考えています。
2. 産後のストレスや育児不安の一つとして、「なぜ泣いているかわからない」「泣き止んでくれなくて不安」など、乳児の泣き声あげられます。ストレスや育児不安から虐待につながる事例もあります。実際に乳児の泣き声にどのくらい反応しているか、心と身体の変化をみる研究を行っています。心の変化は感情の変化をみる調査を行い、身体の変化は皮膚血流や発汗、自律神経反応の変化を評価している。個人特性を考慮した健康支援を考える基礎研究としています。

今後の展望

子育てしやすい環境や社会、早期の健康支援を考えていきたいと思っています。



動物介在（イヌ）による子どもの心身への影響に関する研究



准教授
柚山 香世子

① アピールポイント

地域の小学校等に通う子どもや児童養護施設などの施設で生活する子どもに対して動物介在（イヌ）を行い、脈拍・血圧の変動などの生理学的指標に加え、表情から感情を分析する表情解析用ソフトウェアFaceReader TMによる心理学的指標を用いて、子どもの心身への影響を明らかにしています。2021年には、児童養護施設で暮らす子どものためのドッグセラピーを学生と施設職員、NPO団体、企業が共に創りあげるプロジェクトを実施しました。

② 研究の出口のイメージ

イヌの動物介在は、健康な子どもや行動や情緒面に不安定さをもつ施設入所の子どものにも、侵襲が少ない方法であり、心身に何らかの良い影響を与えることが考えられます。子どもは、自分の感情を言葉で表現することが難しい。そのため、表情からその感情を読み取るFaceReader TMを用いることにより、子どもの心理的側面と生理的側面への影響について明らかにし、動物介在（イヌ）の効果を様々な状況にある子どもを対象にした支援に活用していきます。

キーワード

動物介在（イヌ）、子ども、表情解析（FaceReader TM）、セラピードッグ

研究の内容

イヌは、人に飼育される動物のなかでもつき合いの歴史は古く、成人を対象とした研究では、アイコンタクトを交わす人間とイヌの双方に、愛着形成ホルモン（オキシトシン）の分泌量が増加し、イヌが人間のストレス軽減に役立つことが注目されています。

子どもを対象としたイヌの動物介在は、病院等の医療施設、福祉施設、学校等で盛んに行われ、その関わりの効果について研究が進みつつあります。

イヌへのアレルギーのない児童養護施設に入所している小学1～6年生の児童21名を対象にした研究では、以下のことが明らかになりました。

1. イヌの動物介在は、施設学童期の子どもにストレスを与えず、即時的にリラックス効果を与える可能性があります。
2. 研究対象の子どもは、全員何らかの虐待を受けた経験を有していた。表情分析の結果から、研究対象の子どもが被虐待の経験の影響から心的外傷後のストレスを保持し続けている可能性が示唆されました。また、Therapy dogとの触れ合いは、子どもの感情を徐々に解放し、被虐待の経験に起因する感情の麻痺による外部への反応性の低下を緩和させる可能性があります。



今後の展望

子どもを対象とした動物介在（イヌ）は、病院で治療を受ける子どもや地域や福祉施設で生活する子どもなど、様々な状況にある子どもの心身へ優しく働きかけ、ポジティブな影響を与える可能性があります。



撮影協力 板東 ふうか

城西国際大学メディア学部3年生

現在は大学のイベントや個人で撮影した写真をSNS等で発表しながらカメラを勉強しています。今回撮影に使用した機材はSony α7iiです。将来は写真スタジオや広告制作会社への就職を目指しています。

城西国際大学研究シーズ集 2022

印刷：2022年10月31日

発行：2022年10月31日

発行者：〒283-8555

千葉県東金市求名1番地

城西国際大学 研究推進・社会貢献部 研究推進課

編集兼発行責任者：

城西国際大学 学長特任補佐(特命戦略) 四十竹 美千代

城西国際大学 研究推進・社会貢献部

研究推進・社会貢献部長 秋元 雅之

編集委員：四十竹 美千代 秋元 雅之 大内 善広

大絵 晃世 吉城寺 尚子 中村 智香 (あいうえお順)

印刷所：〒260-0001

千葉市中央区都町1-10-6

株式会社 正文社

TEL/043-233-2235 FAX/043-231-5562



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

